

上大利南土地地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

牛頸野添遺跡群Ⅲ

～ 第6・8次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第69集

2006

大野城市教育委員会
九州国立博物館



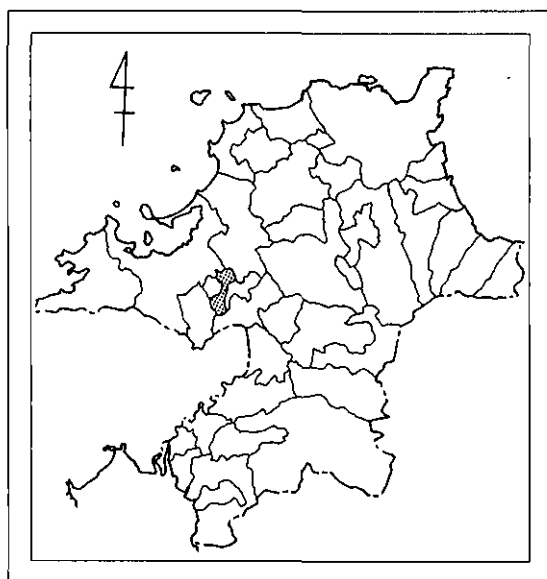
200094357

上大利南土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

うし くび の ぞえ い せき ぐん
牛頸野添遺跡群Ⅲ

～ 第6・8次調査 ～

大野城市文化財調査報告書 第69集



2006

大野城市教育委員会



水城跡

小水城

7次調査地

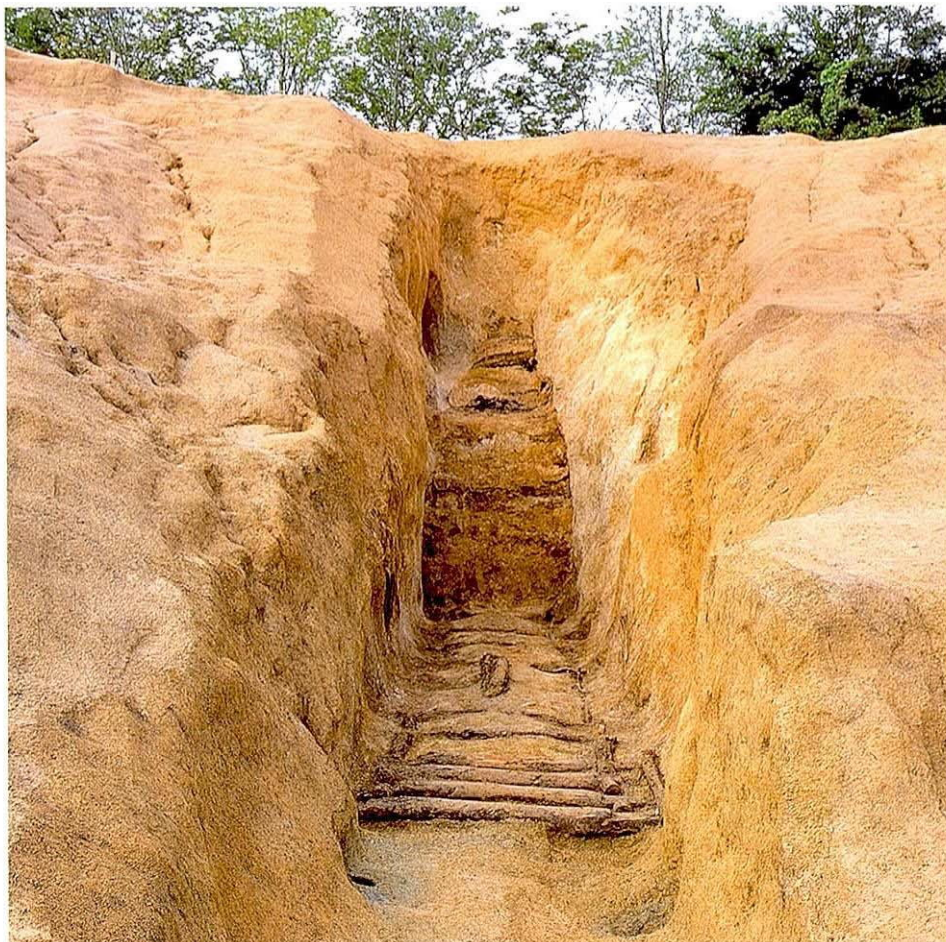
6次調査地

8次調査地

6～8次調査地周辺航空写真（平成15年5月撮影）



(1) 6次調査灰原検出状況（南西から）



(2) 6次調査検出洞窟壕全景（南西から）

序

上大利地区では事業面積が48haに及ぶ大規模な区画整理事業が計画され、平成13年度より本格的な発掘調査を実施しています。

今回の牛頸野添遺跡第6・8次調査報告書は、上大利南土地区画整理事業地内における3冊目の報告書になります。調査地は九州最大の須恵器窯跡群である牛頸窯跡群の北部にあたり、6次調査地で、須恵器窯跡の灰原や土坑などが見つかりました。出土した遺物は古墳時代から奈良時代のものであり、今回さらに多くの窯跡が見つかり、牛頸窯跡群が大規模であったことを再確認することができました。

また、6次調査地では第2次世界大戦末期に造られたと思われる防空壕の跡も見つかり、戦争遺跡という市内では珍しい遺構の発見もありました。地元の人々の話では、昭和20年3月頃に上大利地区には中国東北部から兵隊がたくさんやってきて、壕の建設や野砲陣地の構築など本土決戦へ向けての準備をしていたそうです。このことは、大野城市も大きな歴史の流れと共に存在したことを示しています。

土地には時代を問わずそこで起こった様々な出来事が遺跡・遺構・遺物といった形で記録されています。この残された遺跡に関して、慎重に発掘調査を進め、当時の人々の生活を記録し保存するよう努めています。どうか今後とも文化財行政に対しまして、尚一層ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、上大利南土地区画整理組合をはじめ(株)中野建設、工事関係者及び地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成18年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 古賀 宮太

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が上大利南土地地区画整理事業にともなって発掘調査を実施した、大野城市大字上大利所在の野添遺跡第6・8次発掘調査の報告書で、本事業に係る報告書の3冊目にあたる。なお上大利地区は牛頸窯跡群の範囲に含まれており、こうした歴史事象を踏まえたことから本書の表題を『牛頸野添遺跡群』とした。
2. 発掘調査は、大野城市上大利南土地地区画整理組合の委託を受け大野城市教育委員会が実施した。
3. 本書における遺構の分類番号は、整理の都合上SX：性格不明遺構とした。
4. 遺構写真は、6・8次調査とも岸見泰宏が撮影した。
5. 遺物写真は、(有)文化財写真工房（岡紀久夫、埋蔵文化財写真研究会員）が撮影した。
6. 遺構実測図は、6・8次調査とも岸見が作成した。また各調査の地形測量図は(株)埋蔵文化財サポートシステム、上大利地区旧地形図は(株)写測エンジニアリングに委託した。なお、地形測量図のコンターは25cm間隔である。
7. 遺構実測図中の方位は磁北を表し、図上の座標は国土座標を示す。
8. 遺物実測図は、西堂将夫・一瀬智・北川貴洋が作成した。
9. 製図は、井上愛子・渡部美香が作成した。
10. 拓本は、西堂・一瀬・北川が作成した。
11. 観察表は、井上・北川が作成した。
12. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/25000地形図『福岡南部』『太宰府』を使用した。
13. 本書の遺物・実測図・写真はすべて大野城市教育委員会が管理・保管している。
14. 本書に使用する土色名および土器胎土中の粒径表現は、『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会事務局監修を使用した。
15. 本書の執筆者については、文末に氏名を記した。
16. 本書の編集は石木秀啓がおこなった。

本文目次

I. はじめに	
1. 平成15年度の調査経過	1
2. 調査体制	4～7
II. 調査の結果	
1. 第6次調査	
A. 調査概要	8
B. 遺構と遺物	10
C. 小結	32
2. 第8次調査	
A. 調査概要	33
B. 遺構と遺物	33
C. 小結	33
III. まとめ	
1. 野添6・8次調査周辺窯跡の分布と支群設定について	44
2. 野添遺跡6次調査検出の洞窟塚について	47

図版目次

図版 1	(1) 6次灰原横断面 (B-B'面) (南西から)
	(2) 6次灰原縦断面上方 (A-A'面) (南から)
	(3) 6次灰原縦断面下方 (A-A'面) (南から)
図版 2	(1) 6次洞窟塚上土層① (南東から)
	(2) 6次洞窟塚上土層② (南東から)
図版 3	(1) 6次洞窟塚全景 (南西から)
	(2) 6次洞窟塚横断部土層 (南西から)
	(3) 6次洞窟塚井桁状構築材検出状況 (南西から)
図版 4	(1) 8次調査地全景 (北東から)
	(2) 8次SX01全景 (南から)
図版 5	(1) 8次SX01遺物出土状況 (南から)
	(2) 8次SX01土層 (南から)
図版 6	6次調査出土遺物①
図版 7	6次調査出土遺物②
図版 8	6次調査出土遺物③

図版 9	6次調査出土遺物④
図版10	6次調査出土遺物⑤
図版11	6次調査出土遺物⑥
図版12	6次調査出土遺物ヘラ記号①
図版13	6次調査出土遺物ヘラ記号②
図版14	6次調査出土甕類タタキ・当て具痕①
図版15	6次調査出土甕類タタキ・当て具痕②
図版16	6次調査出土甕類タタキ・当て具痕③、8次調査出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図	平成15年度上大利南区画整理地内調査地位置図 (1/5000)	2
第 2 図	上大利区画整理地周辺地形測量図 (1948年米軍撮影) (1/5000)	3
第 3 図	周辺遺跡分布図 (1/25000)	折り込み
第 4 図	6次調査地地形測量図 (1/500)	9
第 5 図	6次灰原区割図 (1/200)	10
第 6 図	6次灰原土層実測図 (1/100)	11
第 7 図	6次洞窟壕実測図 (1/100)	12
第 8 図	6次灰原出土遺物実測図① (1/3)	14
第 9 図	6次灰原出土遺物実測図② (1/3)	15
第10図	6次灰原出土遺物実測図③ (1/3)	16
第11図	6次灰原出土遺物実測図④ (1/3)	17
第12図	6次灰原出土遺物実測図⑤ (1/3)	18
第13図	6次灰原出土遺物実測図⑥ (1/3)	19
第14図	6次灰原出土遺物実測図⑦ (1/3)	20
第15図	6次灰原出土遺物実測図⑧ (1/3・1/6)	21
第16図	6次灰原出土遺物実測図⑨ (1/3・1/6)	22
第17図	6次灰原出土遺物実測図⑩ (1/3・1/6)	23
第18図	6次灰原出土遺物実測図⑪ (1/3・1/6)	24
第19図	6次灰原出土遺物実測図⑫ (1/3・1/6)	25
第20図	6次灰原出土遺物実測図⑬ (1/3・1/6)	26
第21図	6次灰原出土遺物実測図⑭ (1/3)	27
第22図	6次灰原出土遺物実測図⑮ (1/3・1/6)	28
第23図	6次洞窟壕出土遺物実測図 (1/3)	29
第24図	6次灰原 1 区上方東SP・表採遺物実測図 (1/3)	29

第25図	6次調査出土甕類タタキ拓影図（1／2）	30
第26図	6次調査出土甕類当て具痕拓影図（1／2）	31
第27図	8次調査地地形測量図（1／500）	34
第28図	8次SX01実測図（1／60）	35
第29図	8次SX01出土遺物実測図（1／3・1／6）	36
第30図	上大利区画整理事業地周辺窯跡分布図（1／5000）	45
第31図	福岡会戦構想概見図	48

表 目 次

表 1	野添遺跡第6次調査出土遺物観察表①	37
表 2	野添遺跡第6次調査出土遺物観察表②	38
表 3	野添遺跡第6次調査出土遺物観察表③	39
表 4	野添遺跡第6次調査出土遺物観察表④	40
表 5	野添遺跡第6次調査出土遺物観察表⑤	41
表 6	野添遺跡第6次調査出土遺物観察表⑥	42
表 7	野添遺跡第6次調査出土遺物観察表⑦	43
表 8	野添遺跡第8次調査出土遺物観察表	43

巻 頭 図 版 目 次

巻頭カラー図版 1	6～8次調査地周辺航空写真（平成15年5月撮影）
巻頭カラー図版 2	(1) 6次調査灰原検出状況（南西から）
	(2) 6次調査検出洞窟壕全景（南西から）

I. は じ め に

1. 平成15年度の調査経過（第1図）

上大利南土地地区画整理事業地内における埋蔵文化財の調査経緯については『牛頸野添遺跡群Ⅰ』（大野城市文化財調査報告書第62集）に詳述しているため、以下では平成15年度の埋蔵文化財調査についてまとめておきたい。

平成15年度、上大利南土地地区画整理事業地内における埋蔵文化財調査としては、6ヶ所（35・36・38・40・42・43次）の試掘調査を実施した。35次試掘調査地は平成13年度より試掘調査を実施している12次試掘調査地の南側に続く部分であり、調査地の関係上便宜的に分けたが本来は同じ谷部内である。調査は断続的に続けられ、12次試掘調査当初から合算すると1年半近くにもおよんだ。調査地の丘陵上は削平が著しく平坦になっており、春日市側の斜面で少量の須恵器片が出土した他は遺構の存在は認められず、確認された遺構は12次試掘調査地で発見した灰原1ヶ所のみであった。

36次試掘調査地は平成13年度に発掘調査を実施した野添遺跡3次調査地の北側にあたり、すでに植林地として造成されており、調査の結果バイラン土を検出し、何らの遺構・遺物も確認されなかった。東に隣接する23次試掘調査地においても同様であり、周辺は旧表土が残らないほど大規模な削平を受けていた。

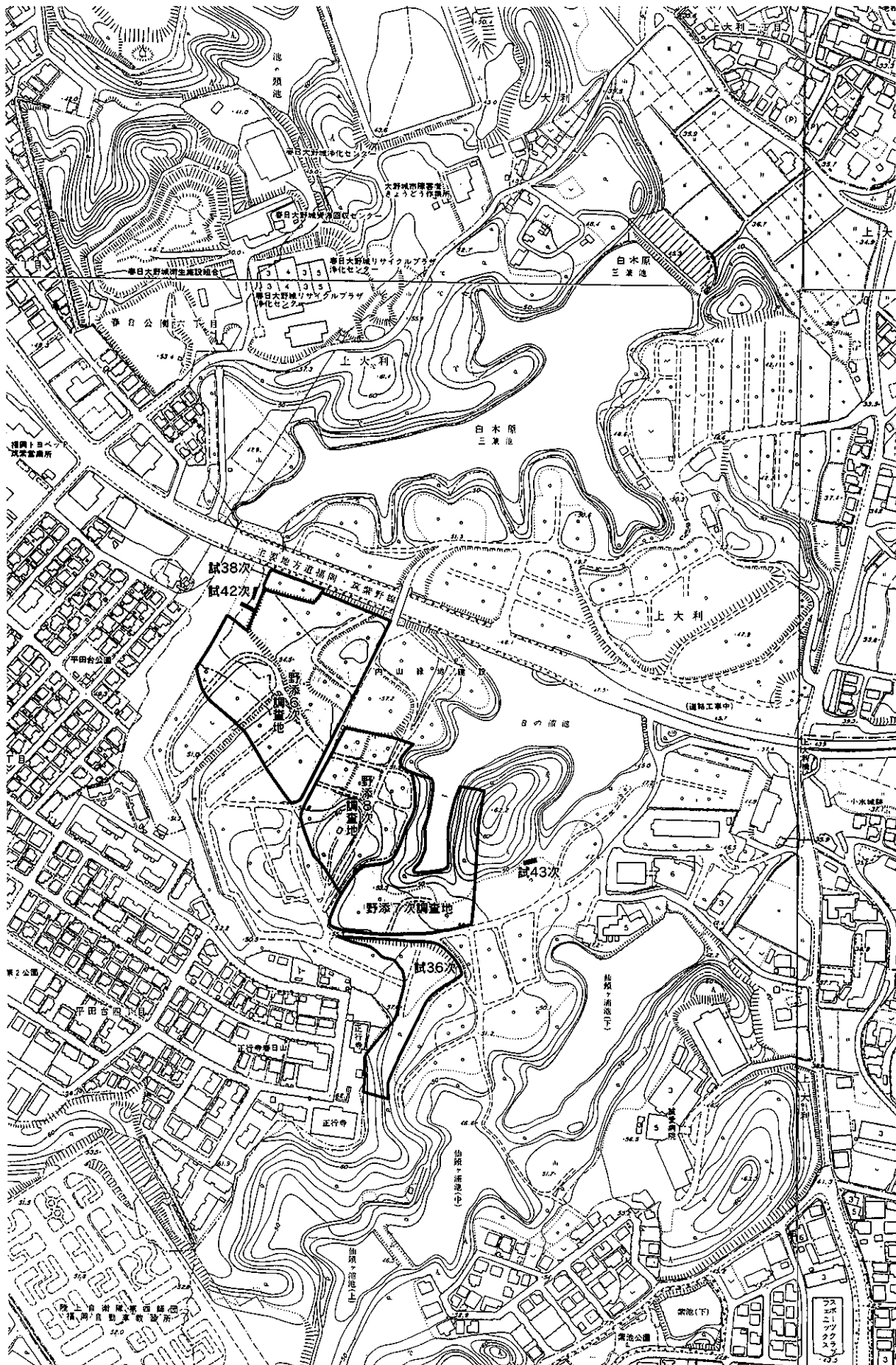
38次試掘調査地は12次試掘調査地と通称5号線（県道31号線）の間に、5号線側へ向かう谷の一部を確認し、県道建設はこの部分が谷状の地形を呈することが知れたが、遺構・遺物に関しては確認されなかった。

40次試掘調査地は日ノ浦池西側にあたり、平成14年度に実施した32次試掘調査地で検出した谷部から西側に入り込む谷部である。検出時より遺物の出土があり、土坑1基が確認された。

42次試掘調査地は12次試掘調査地の西側にあたる。周辺は工事用道路として利用されていたためトレンチ2本を設定し、掘り下げをおこなった。調査の結果、現地表面から300cm以上下がっても地山および遺構検出面が現れず、グライ化した粘質土が認められた。現在この周辺は平坦になっているが、元々は三兼池がここまでのびていることが大正期の地形図や字図で確認されたことから、ここは池の中であり遺構の残存している可能性は低いものと判断された。

43次試掘調査地は日ノ浦池南側にあたり、23次試掘調査地の西側にあたる。周辺はすでに工事により盛土がなされており、空閑地を狙ったトレンチ1本のみの調査であった。調査の結果、現地表下160cmでマサ土が検出された。表層部分も既に失われ、岩脈が露出するような状態であった。隣接する23次試掘調査でも同様であったことから、この周辺は日ノ浦池に突き出す丘陵と同程度の丘陵が元々あり、これを大幅に削平し、植林地を設けたようである。

上記のように、平成15年度も14年度と同様に非常に広い範囲で試掘調査を実施した。この結果を受けて、南組合と協議の基、工事の優先順位が高いものから順番に発掘調査を実施していった。特に35次試掘調査地は灰原の存在を平成13年度段階で確認していたが、調査地内がスリ鉢状に深くなり安全面の懸念があったことと、工事優先順位の関係で発掘調査の順番が後回しになったため、結果的に試掘から発掘調査開始まで1年半ほどが経過してしまった。このため遺構・遺物の残存状



第1図 平成15年度上大利南土地区画整理地内調査地位置図 (1/5000)



第2図 上大利区画整理地周辺地形測圖 (1948年米軍撮影) (1/5000)

況が悪くなり、発掘調査に入った際、降雨による流入土がありその除去に手間取ったり、出土遺物の位置の混乱を生むこととなってしまった。当時はやむをえない状況であったが、調査体制に問題があったと言わざるをえない。

発掘調査は野添遺跡6～8次調査として、平成15年度は3ヶ所実施した。調査期間・面積等については下の表のとおりである。

	遺 跡 名	試掘調査回数	試掘調査期間	発掘調査期間	調査面積 (㎡)	担当
平成15年度発掘調査	野添遺跡 第6次調査	12・35次	平成14年1月25日～ 平成15年6月24日	平成15年5月22日～ 8月4日	6500	岸見
	野添遺跡 第7次調査	32次	平成14年12月13日～ 平成15年3月31日	平成15年8月4日～ 12月18日	4735	岸見
	野添遺跡 第8次調査	40次	平成15年7月25日～ 9月20日	平成15年9月16日～ 10月23日	8260	岸見

2. 調査体制

発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下のとおりである。

平成15年度発掘調査

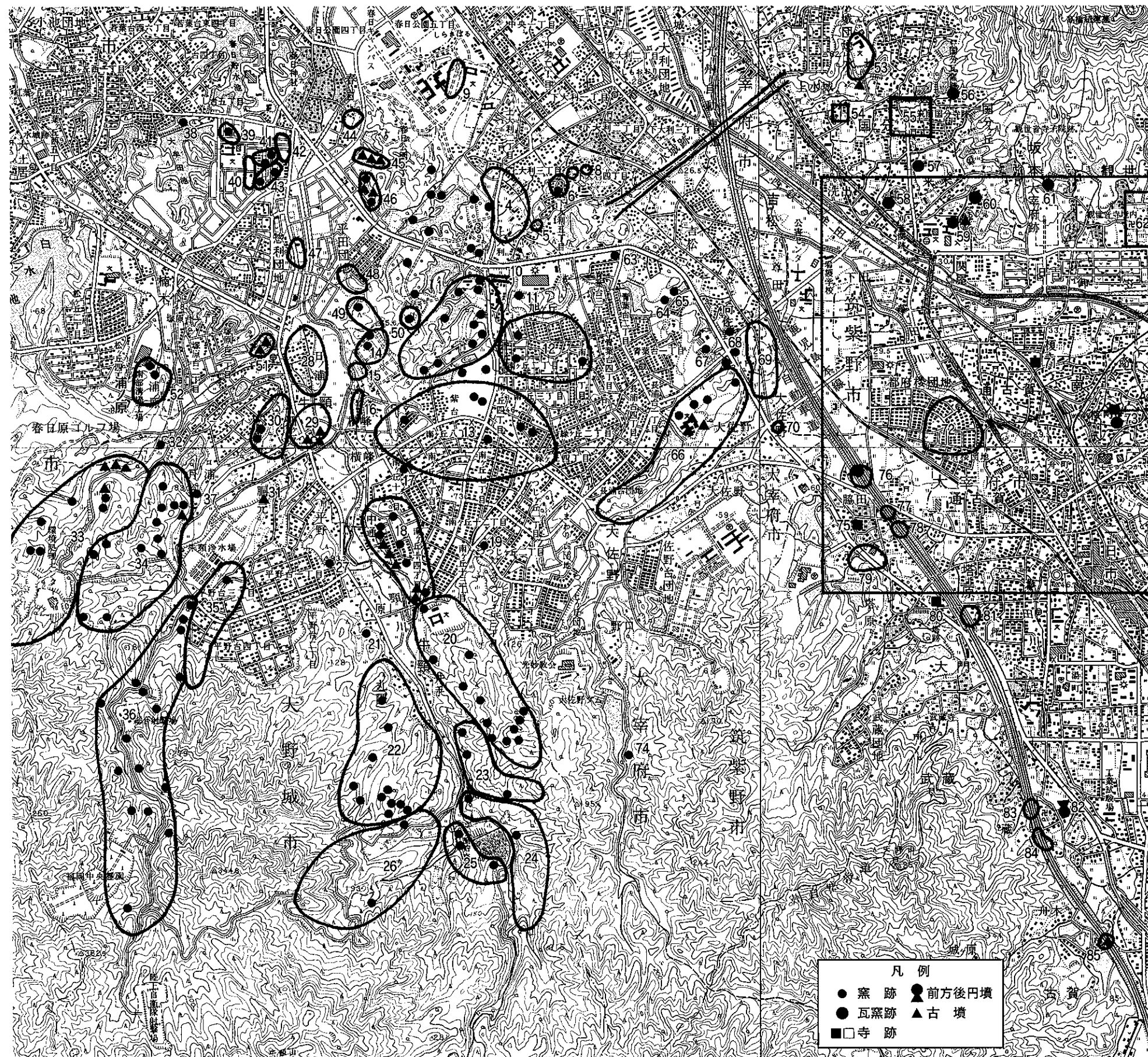
[大野城市教育委員会]

教育長	堀 内 貞 夫 (～15年6月)
	古 賀 宮 太 (15年6月～)
教育部長	鬼 塚 春 光
社会教育課長	秋 吉 正 一
文化財担当係長	舟 山 良 一
主 査	徳 本 洋 一
主任技師	石 木 秀 啓
	丸 尾 博 恵
	林 潤 也
主任主事	大 道 和 貴
嘱 託	平 島 義 孝
	上 田 恵 (～15年4月)
	島 田 拓 (～15年6月)
	岸 見 泰 宏
	西 堂 将 夫

平成17年度整理作業

[大野城市教育委員会]

教育長	古 賀 宮 太
教育部長	小 嶋 健



第3図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

〔大野城市〕

1. 野添遺跡群
2. 梅頭遺跡群
3. 本堂遺跡群
4. 上園遺跡
5. 出口遺跡
6. 出口遺跡
7. 唐土遺跡
8. 谷川遺跡
9. 池田・池の上遺跡
10. 上大利小水城
11. 谷蟹窯跡
12. 大浦窯跡群
13. 平田窯跡群
14. 華無尾窯跡
15. 華無尾遺跡
16. 屏風田遺跡
17. 東浦窯跡群
18. 中通遺跡群
19. 上平田遺跡
20. ハセムシ窯跡群
21. 原窯跡
22. 井手窯跡群
23. 道ノ下窯跡群
24. 長者原窯跡群
25. 笹原窯跡群
26. 足洗川窯跡群
27. 城ノ山窯跡群
28. 日ノ浦遺跡群
29. 塚原遺跡群
30. 畑ヶ坂遺跡群
31. 胴ノ元古墳
32. 小田浦28地点
33. 後田遺跡群
34. 小田浦遺跡群
35. 大谷窯跡群
36. 石坂窯跡群
37. 月ノ浦1号窯跡

〔春日市〕

38. 大牟田窯跡
39. 惣利窯跡群
40. 惣利西遺跡
41. 惣利遺跡
42. 惣利北遺跡
43. 惣利東遺跡

〔太宰府市〕

44. 向谷北遺跡
45. 向谷古墳群
46. 平田北遺跡
47. 円入遺跡
48. 春日平田遺跡
49. 春日平田西遺跡
50. 春日平田東窯跡
51. 塚原古墳群
52. 浦ノ原窯跡群
53. 陣ノ尾古墳・遺跡
54. 筑前国分尼寺
55. 筑前国分寺
56. 国分瓦窯跡
57. 坂本瓦窯跡
58. 松倉瓦窯跡
59. 来木古墳群・瓦窯跡
60. 来木北瓦窯跡
61. 都府楼北窯跡
62. 観世音寺
63. 神ノ前窯跡
64. 篠振遺跡・窯跡
65. 尊田窯跡
66. 宮の本遺跡
67. 長浦窯跡
68. 向佐野窯跡
69. 前田遺跡
70. 尼崎遺跡
71. 榎寺
72. 市ノ上遺跡
73. 般若寺・瓦窯跡
74. 野口窯跡

〔筑紫野市〕

75. 杉塚廃寺
76. 剣塚遺跡・瓦窯跡
77. 前田遺跡
78. 唐人塚遺跡
79. 脇田遺跡
80. 塔原廃寺
81. 桶田山遺跡
82. 原口古墳
83. 八隈遺跡
84. 畑添遺跡
85. 扇祇古墳群

社会教育課長	水 野 邦 夫
文化財担当係長	舟 山 良 一
主 査	徳 本 洋 一
	石 木 秀 啓
	緒 方 一 幹 (庶務担当)
	丸 尾 博 恵
主任技師	林 潤 也
	早 瀬 賢
嘱 託	西 堂 将 夫
	一 瀬 智 (～平成17年7月)
	井 上 愛 子
	北 川 貴 洋
	栗 津 剛 史 (庶務担当)

[上大利南土地区画整理組合]

理事長	森 山 繁 喜
副理事長	樋 口 敬 記
事務局長	平 田 靖 憲
技術職	濱 本 泰 司
事務職	戸 渡 美智子

(石木)

Ⅱ．調査の結果

1．第6次調査

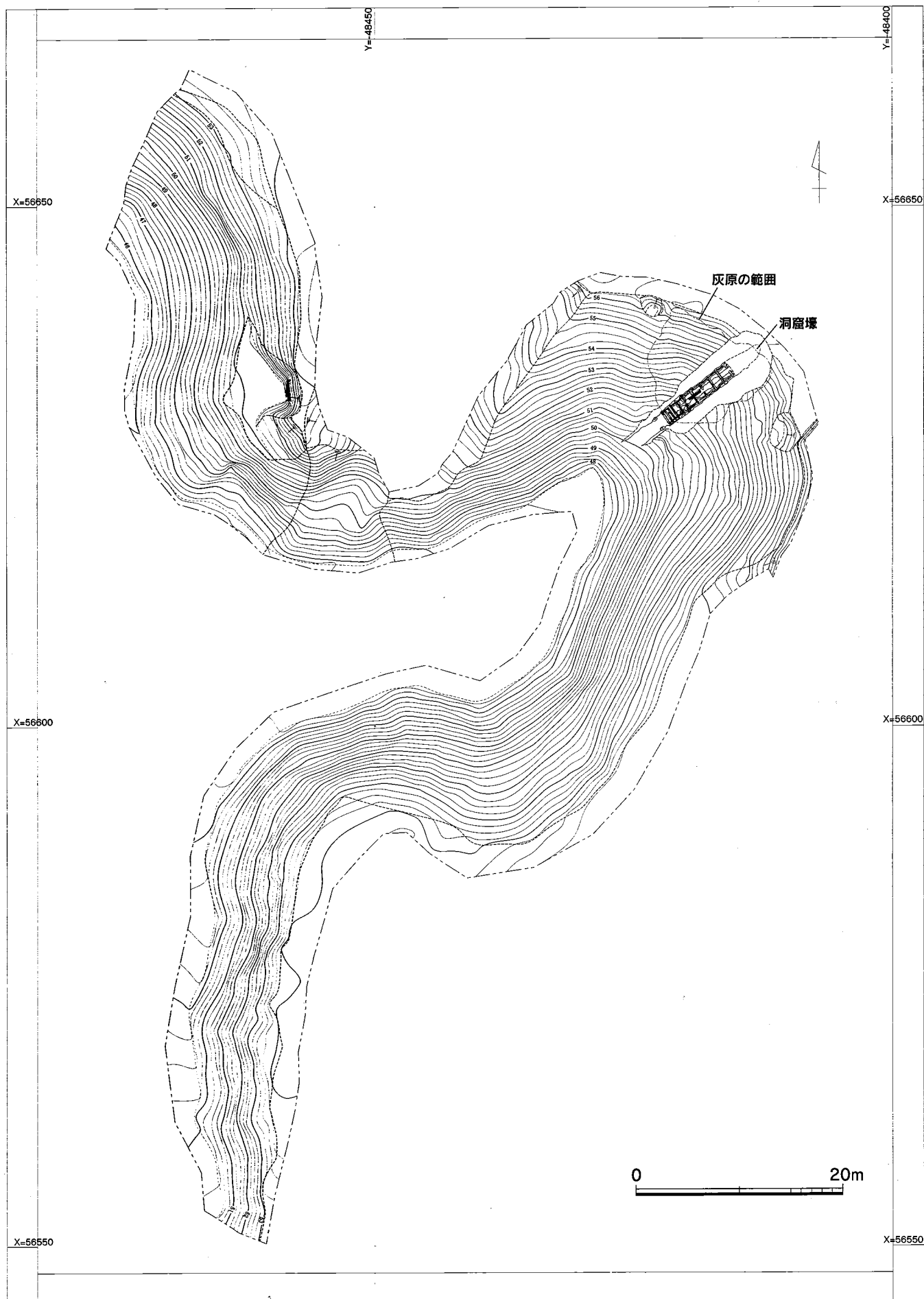
A．調査概要（第4図、巻頭カラー図版2）

第6次調査地は、県道31号線から約100m南側に位置する。大野城市大字上大利598-1の一部ほかにあたり、調査面積は6500m²である。調査地の周辺は丘陵の削平が著しく進み平坦となっており、平坦面には植林がおこなわれ、段々に造成されていた。このために元々の地形がいかなるものか調査前は皆目不明であったが、試掘調査の結果、南東方向に入り込む谷部があることが分かった。この谷部は昭和23年の旧地形図上にも現れており、これからすると、南西へ細長くのびる三兼池から分かれて南東方向へほぼまっすぐのびており、谷部の先端は北東と南方向へとさらにのびている。

調査はすでに丘陵上半部が失われていたため、下半部の斜面の調査のみとなったが、地形測量図で調査地北東側の最高所が56m強であるのに対し、旧地形図では60mを優に超えている。この数字が実態を表すかはともかく、本調査地から県道31号線までの間は試掘調査をおこなってもすべて現地表下2m以内に岩脈がはしるパイラン土を検出していることから、本来ここにあった丘陵は相当大きなものであったことは確実である。旧地形図上では丘陵上は広い緩傾斜面になっており、ここには検出された灰原にともなう窯跡以外の何らかの遺構が存在した可能性が高いが、試掘調査や本調査の結果、須恵器以外ではごく僅かの土師器・黒曜石チップが出土したのみで、存在を確実とすることはできなかった。

試掘調査はまず北東隅から開始した。開始から3日目に灰原の存在を確認したが、先述したように調査の優先順位と周辺の安全対策等から、周辺を広く調査できる状況が整った後に試掘調査を本格化させた。その後丘陵斜面を西側に移動しながら調査を進め、谷部北側斜面を表土剥ぎした後に谷部南側から東側斜面を表土剥ぎした。谷部内は元々池であったためか地盤が非常に緩く、重機で表土剥ぎができたのは標高48mくらいまでで全掘することはできなかったが、一部確認のためトレンチを設定したところ、グライ化した青灰色土を検出し遺物等も確認できなかったため、この下に遺構の存在はないものと判断した。

このことから確認できた遺構は灰原1ヶ所のみと考え掘り下げをおこなっていたが、検出作業の段階より灰原の中央部を縦断方向にカクランした個所があることが認識された。当初この部分は後世の流水等によるカクランであるとの判断や、灰原下に窯跡が残存するとの見方があったが、掘り下げの結果、斜面に断面砲弾型のトンネルを掘り込んでいることが判明し、床面は水平に近く、さらに梯子状に組まれた丸木が床面上から検出された。こうした遺構の類例についてはまったく思い当たらなかったが、地元の人からの聞き取りにより昭和20年3月頃に調査地を含めた上大利から現在の旭ヶ丘・南ヶ丘一帯に旧陸軍が駐屯し、山の中に洞窟を掘り、周辺から松を切り出してきて壕の構築材とし、中に野砲を据えていたとの証言を得たことから、この遺構は旧陸軍によって掘削された洞窟壕であると判断した。洞窟壕は検出した入口から長さ10m以上あり、さらに奥へ続いていたが、山の斜面からの深さが5mを超え、人力での発掘は危険と判断した。このため調査終了後に



第4図 6次調査地地形測量図 (1/500)

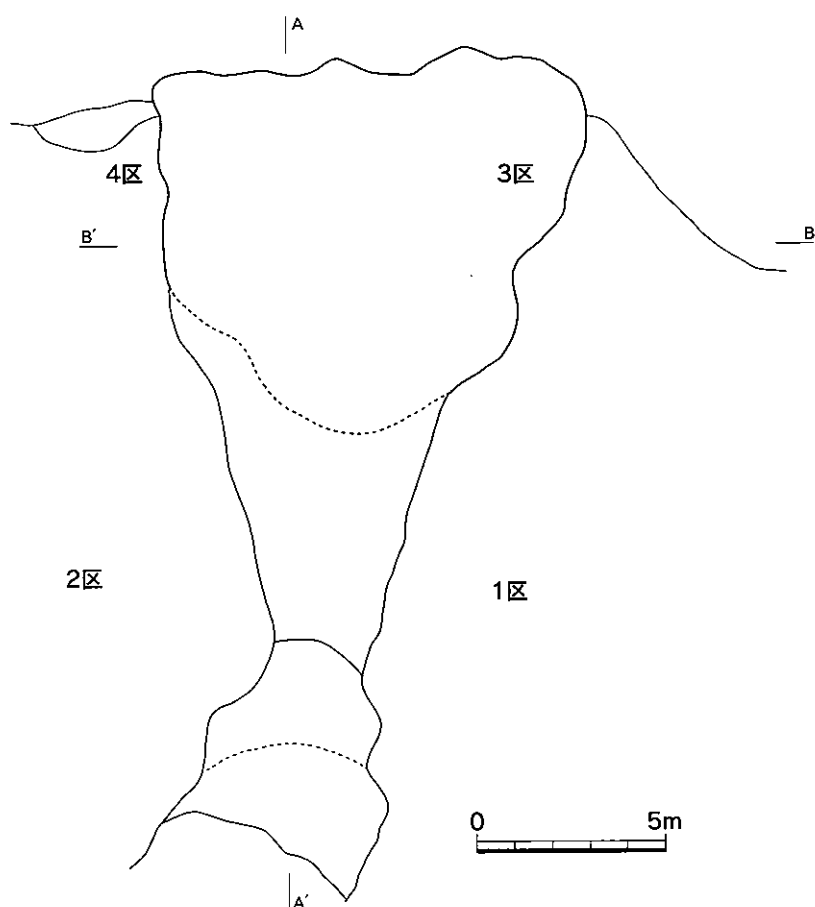
重機によりさらに奥へ掘り進めたが、それでも奥まで行き当たることができなかった。したがって、壕の奥行は確認できなかった。(石木)

B. 遺構と遺物

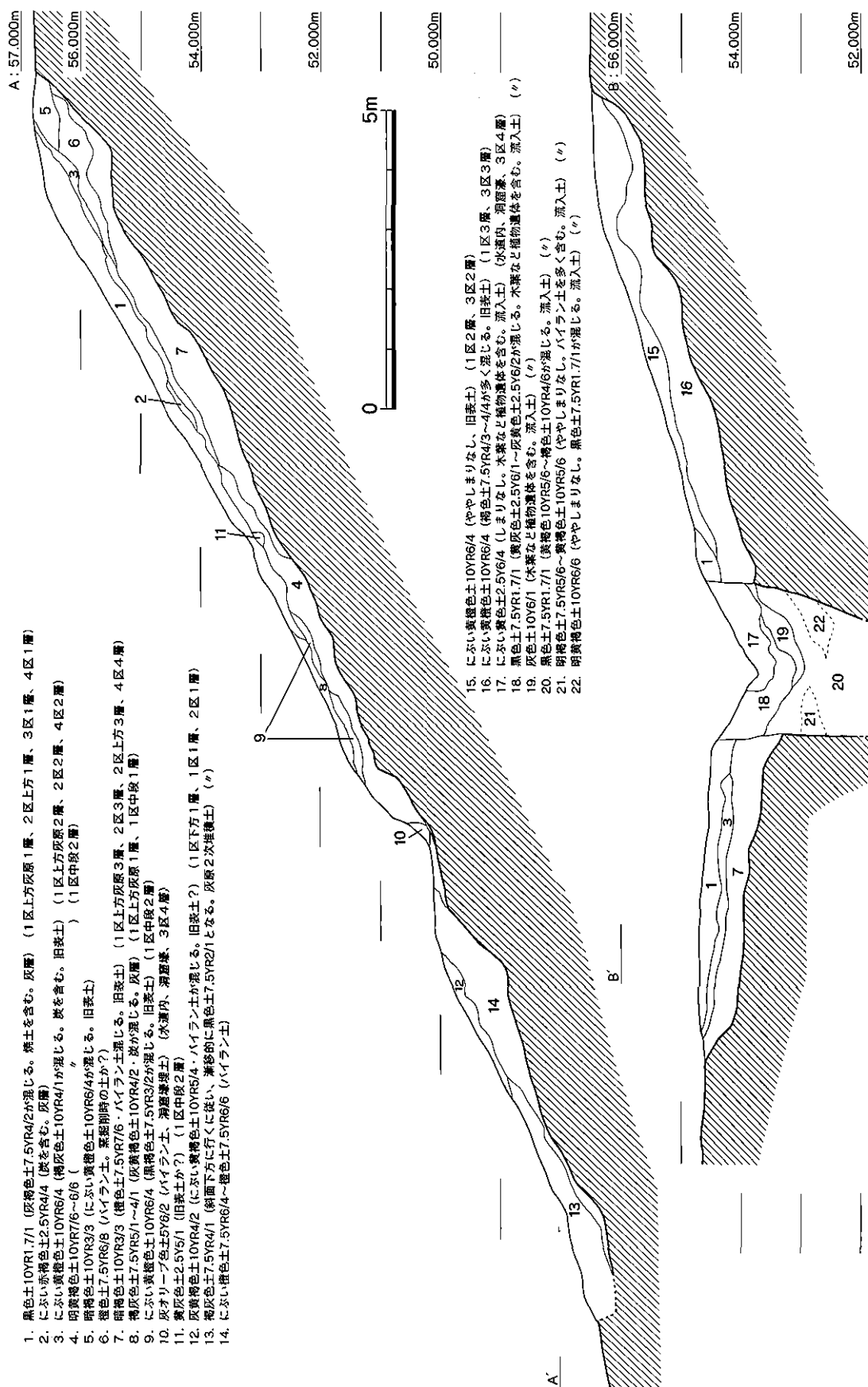
(1) 灰原 (第5・6図、図版1)

灰原是三兼池から入り込む谷の最奥部に位置し、北東方向へのびる小谷の谷頭にあたる。黒色を呈する灰層は長さ約10m×幅約11.2mの範囲に広がっており、さらに谷底に向かって灰層が流れ落ちている状態であった。この流れ落ちた灰層は斜面中位では褐灰色、斜面下方にいくにしたがい黒色を呈し遺物を多く含んでいる。灰原の二次堆積土である。この堆積土は標高47m付近まで掘り下げることができたが、さらに下方へもぐりこんでいた。本来であれば流れ落ちた灰層も完掘すべきであったが、土が軟弱であり重機による灰層の検出は不可能であり、また時間的な制約があったことから調査はここまでとした。

灰層は斜面上方の最も厚い所で約50cmあまり、灰層下は旧表土や窯の掘りぬき土が認められる。灰層は明確な層界は認められず、分層できなかった。また灰原検出時も平面的に灰層の重複を認めることはできなかった。(石木)



第5図 6次灰原区割図 (1/200)

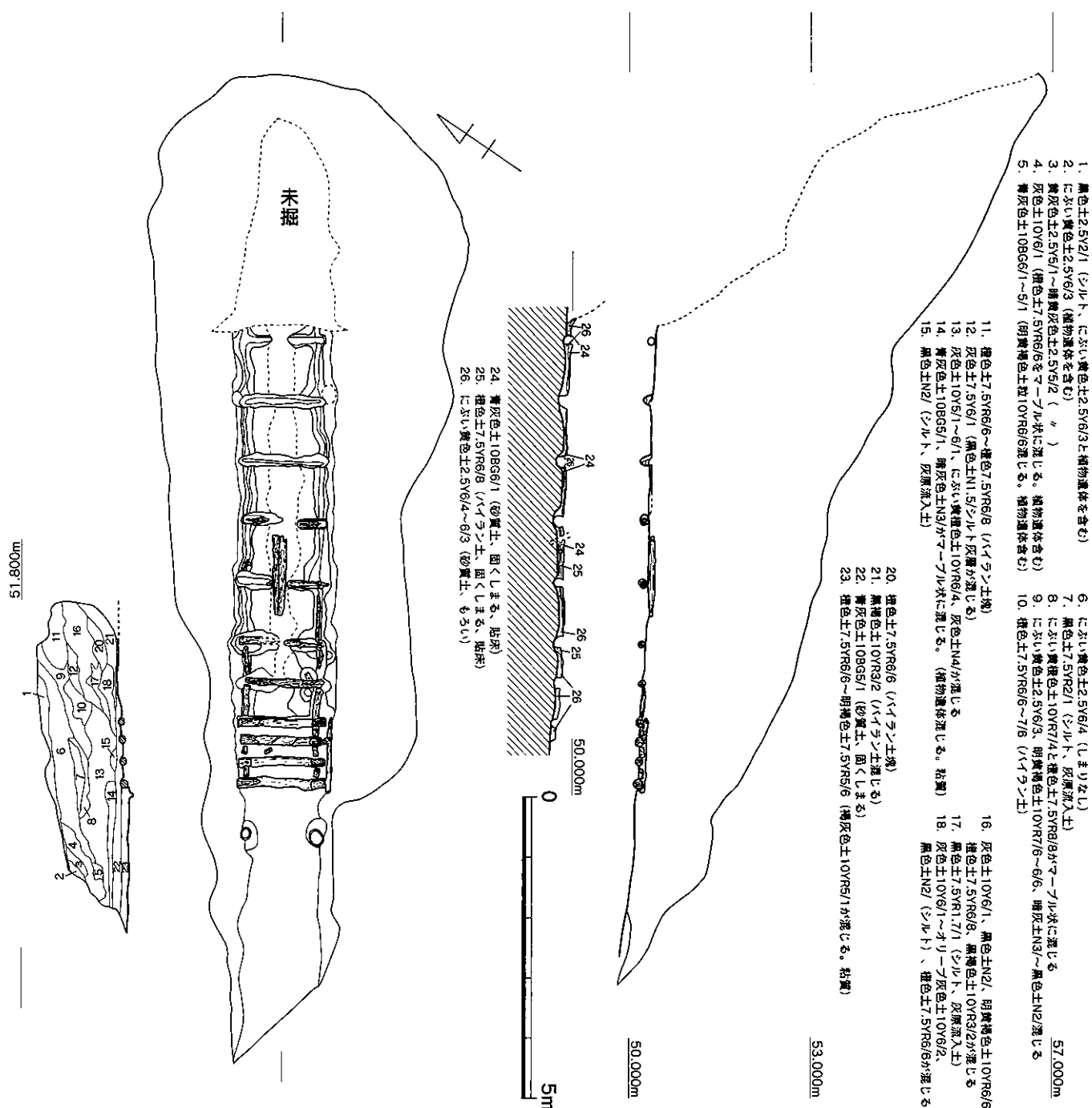


第6図 6次灰原土層実測図 (1/100)

(2) 洞窟壕 (第7図、図版2・3)

洞窟壕は先の灰原を縦断している。奥行は、入口から約11.5mまでは人力により床面を検出することができた。しかし、これより先は崩落の危険性が高く、重機によりさらに奥へ5m以上掘り進んだが、壕を完掘することはできなかった。

入口より奥へ約3mの所には径20cm程度のピットが床面の両脇に認められ、ここには柱を立て構築材を渡していたものと思われる。このピットより奥へ約80cm入ると、床面には丸木が梯子状に配されている。床面の土層観察から行くと、地山を梯子状に浅く掘り込み、丸木を安定させた後に約10cm程度の貼床を施している。手前から約35cm間隔で4本、65cm間隔で2本、さらに奥は



第7図 6次洞窟壕実測図 (1/100)

約1m間隔で横方向に長さ約1.3~1.5m、直径15cm程度の丸木をわたし、両側壁下には直径10cm程度の丸木を配している。床面は両側壁とも奥へまっすぐのびる細長いプランを呈しており、幅は約1.5~1.7m程度、入口から奥まではほぼ水平である。

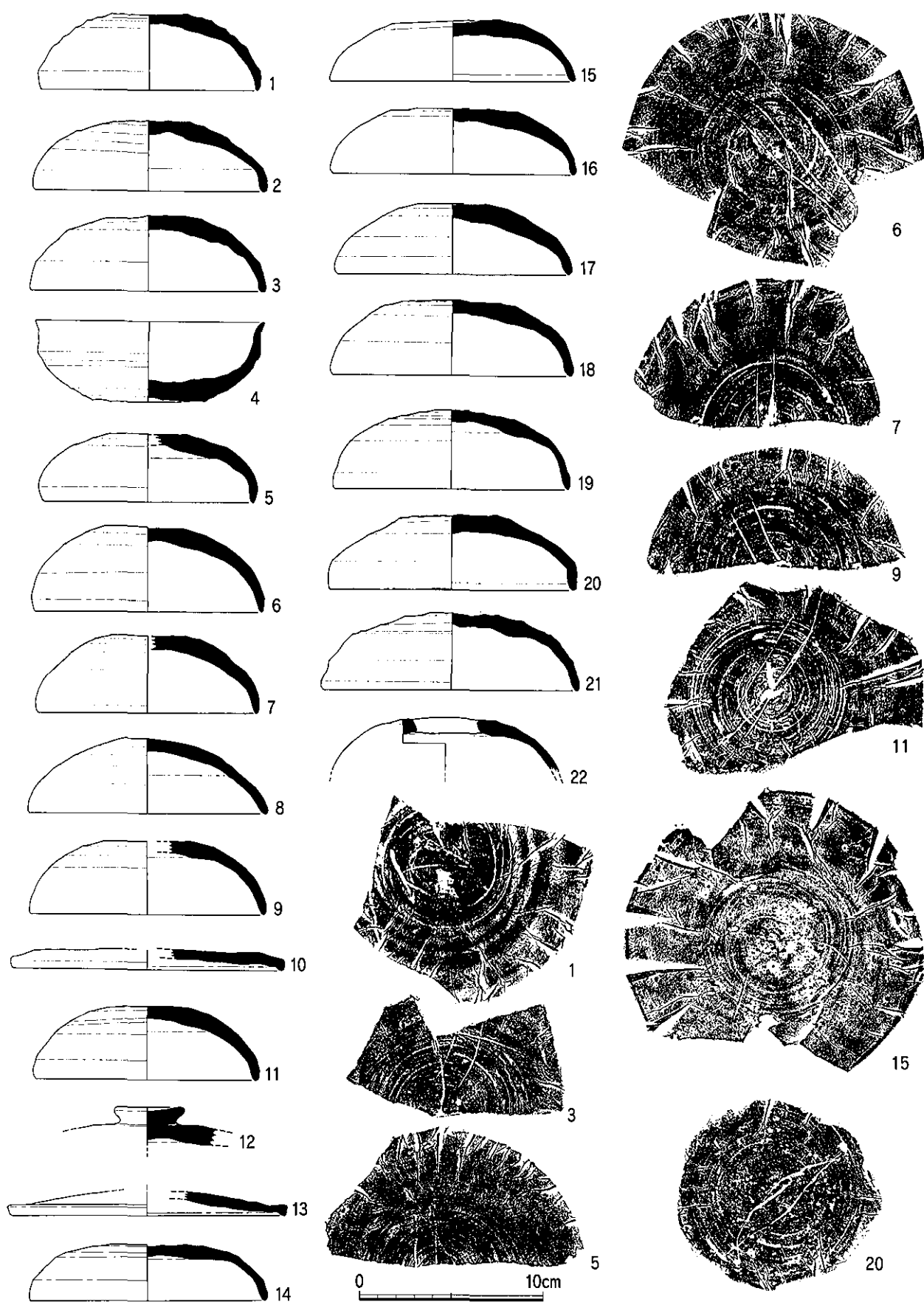
灰原横断面の観察より、壕はトンネルを掘り抜くいわゆる地下式構造であったと考えられる。ただし、壕のトンネル部分がどの辺りから始まるかは明らかにできなかった。横断面は砲弾形を呈し、高さは3mほどである。

(石木)

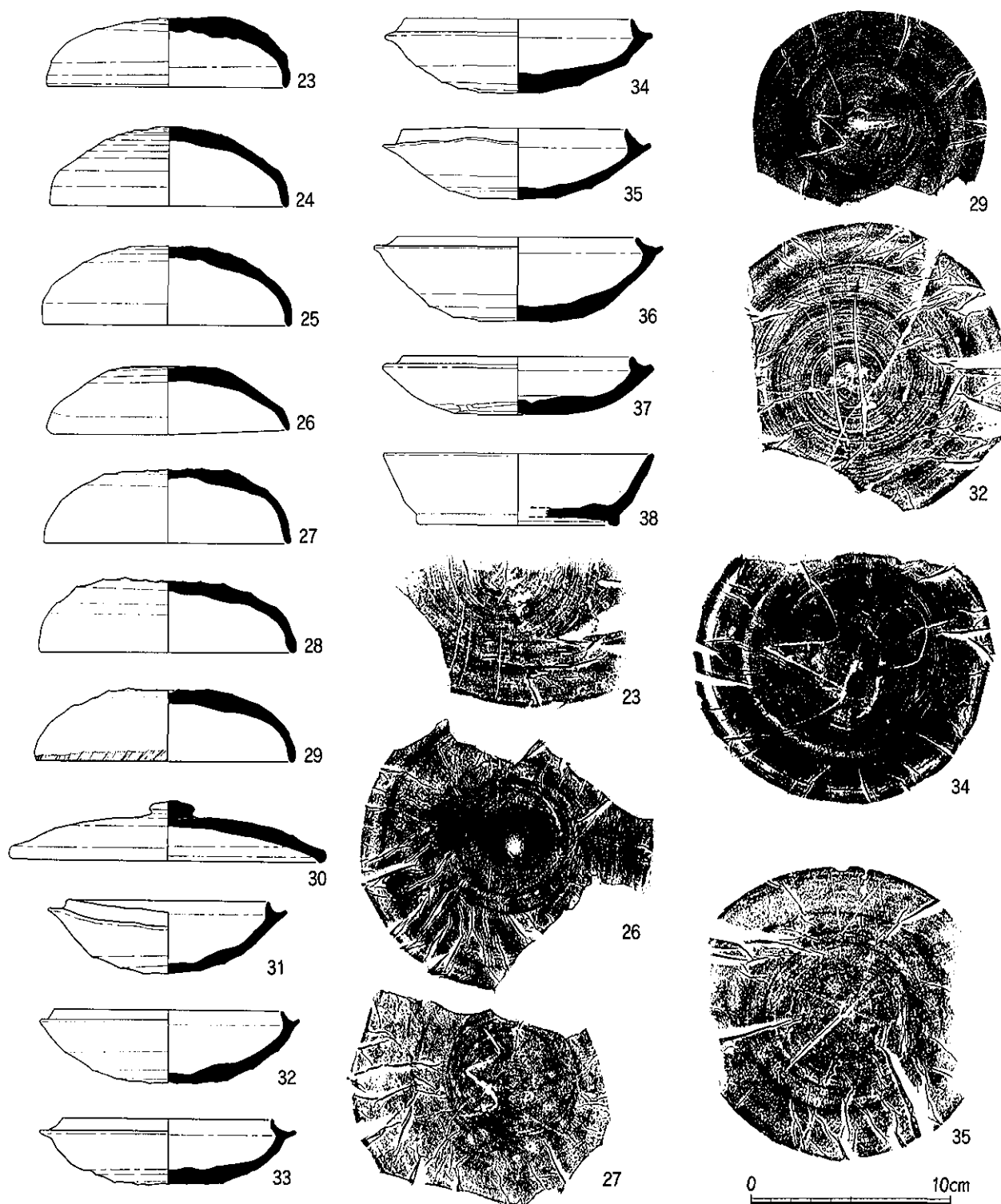
出土遺物 (第8~26図・図版6~16)

各遺物の出土地点は以下の通り。1~4・10・31~34・36・38・57・58・82・86・94~96は灰原1区上方1層黒色土、35・37は灰原1区上方、11・59~65・87・91~93・90・102は灰原1区下方1層暗褐色土、53・54は灰原1区1層暗褐色土、51は灰原1区縦断ベルト1層灰層、52は灰原1区縦断ベルト清掃中、27~30・76~78・97は灰原1区水道、55は灰原2区上方、66は灰原2区上方1層、12・13・67・98は2区下方1層黒褐色土、14~22・39~42・68~74・81・83・84・88・101・103・105は灰原3区2層黒色土、75は灰原3区ベルト際焼土層、85は灰原水道、5~9・43~49・56・89・104は灰原4区1層黒色土、106は灰原4区4層西端褐色土、100は3・4区間ベルト3層、23~25・80は灰原縦断ベルト1層灰層、26は灰原水道、79・99は灰原検出中である。

1~3・5~11・13~30は杯蓋で、天井部は平坦で体部は丸みをおびそのまま口縁部へと至るもの(1~3・5~9・11・14~19・21・23・24・26~29)、天井部は平坦で体部は丸みをおび口縁部が垂直に立つもの(20・25)、扁平で口縁端部を折り曲げ断面三角形にするもの(10・13)、やや丸みをおびた形態で口縁端部をわずかにつまむもの(30)がある。10・13・22・30を除き、口径は11.0~14.0cmを測り、器高は3.05~4.65cmを測る。天井部外面は回転ヘラ削りを2/5~3/4施す。10・30は天井部外面は回転ヘラ切り後回転ナデを施す。22は天井部を焼成前に穿孔する。孔径は3.35cmで、幅5mm程の断面半円形もしくは三角形の工具で内側から外側へと工具を連続的に円形に突き刺して穿孔する。25は外面に二次焼成による破裂痕が認められる。1・27・29は「M」、3は「卅」、5・7・9・11・23は「||」、6は「|||」、15は「ㄣ」、20は「J」、26は「丁」のヘラ記号を持つ。4・31~52は杯身で、天井部は平坦で口縁端部が外反するもの(4)、底部は平坦で体部は丸みをおび内傾するかえり部を持つもの(32~37・39・41~44・46~52)、直立するかえり部を持つもの(31・40)、体部から口縁部は直線的に外に開き短く直立する高台を持つもの(38)がある。口径は10.2~12.0cmを測り、器高は2.95~4.7cmを測る。4は天井部外面は回転ヘラ切りし、沈線を1条施す。31~36・39~44・46~52は底部外面2/5~5/6に回転ヘラ削りを、37は底部外面2/5に手持ちヘラ削りを施す。38は底部外面は回転ヘラ切り後回転ナデを施す。45は外面受部下から底部に回転ヘラ削り後板状工具でカキメを施し、底部と体部の境が強く屈曲する。33は底部外面に二次焼成による破裂痕が認められる。41は外面受部下に杯蓋または杯身の口唇部がわずかに粘着し、重ね焼きの痕跡がみられる。32・43・46・47・48・50・51は「||」、34は「M」と「ㄣ」、35は「×」と「Λ」、39は「N」、41は「J」、49は「卅」、52はおそらく「J」のヘラ記号を持つ。53・54・56は高杯の蓋で、つまみを持ち体部は丸みをお

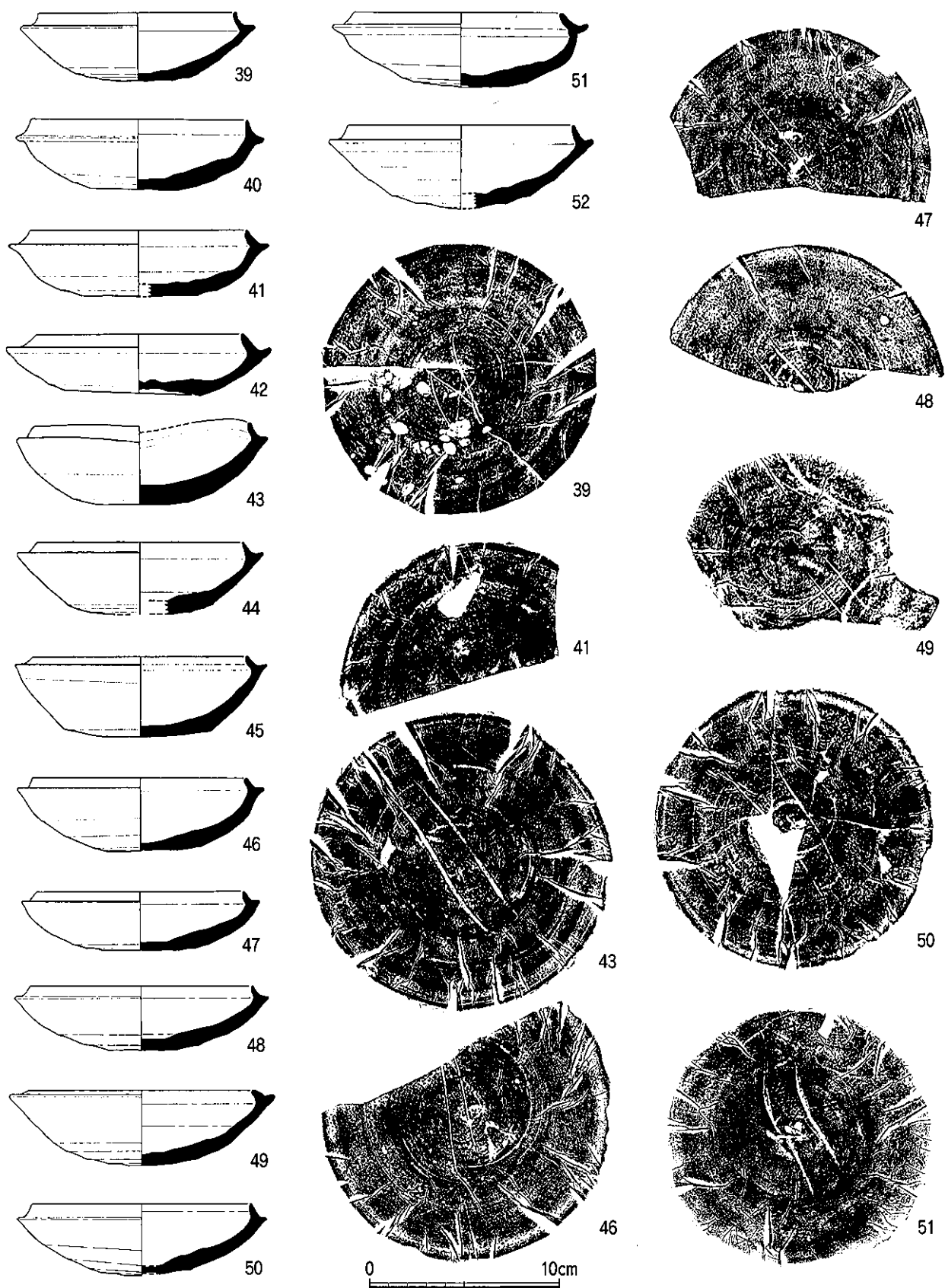


第8图 6次灰原出土遺物実測図① (1/3)

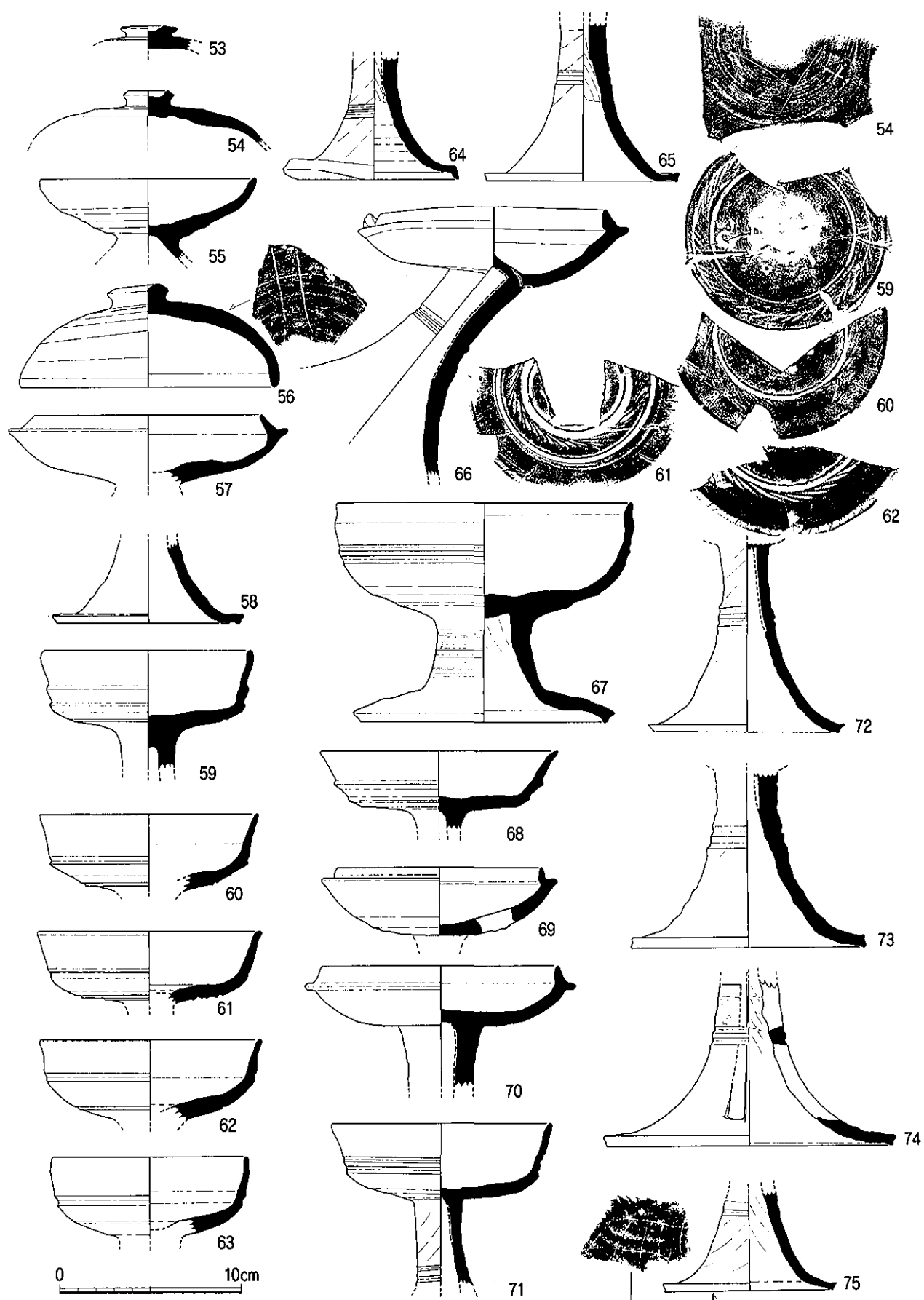


第9図 6次灰原出土遺物実測図② (1/3)

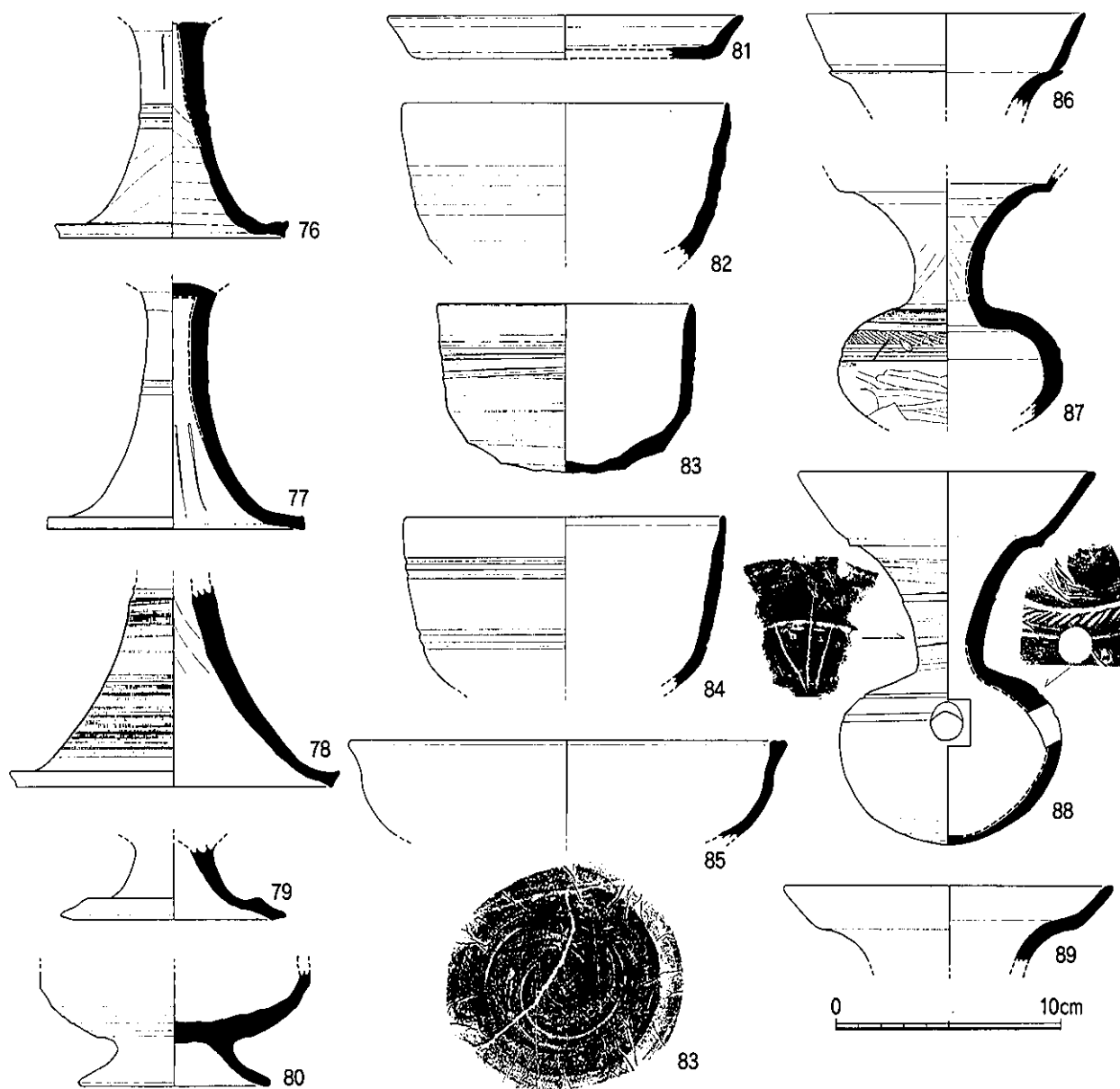
び口縁部へと至る (56)。54・56は天井部外面を1/2～2/3回転ヘラ削りし、53の天井部外面はカキメを施す。54は天井部外面に「H」のヘラ記号を有す。57・66・69・70は有蓋高杯で杯部は丸みをおび内傾するかえり部を持つもの (57)、直立するかえり部を持つもの (66・69・70) がある。66・69の底部外面は回転ヘラ削りである。66はかえり部に杯蓋を合子状にあわせて重ね焼



第10图 6次灰原出土遺物実測図③ (1/3)

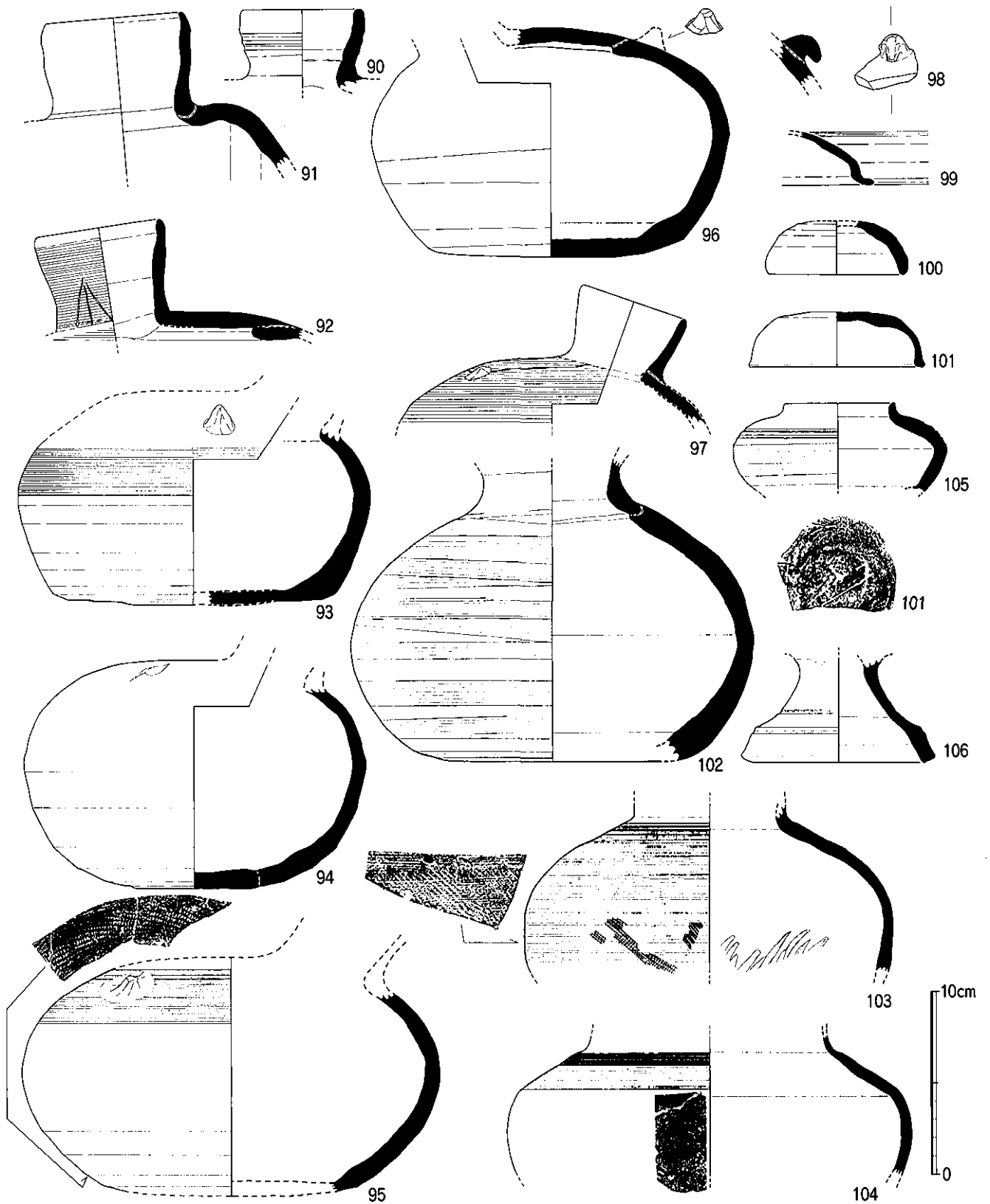


第11図 6次灰原出土遺物実測図④ (1/3)



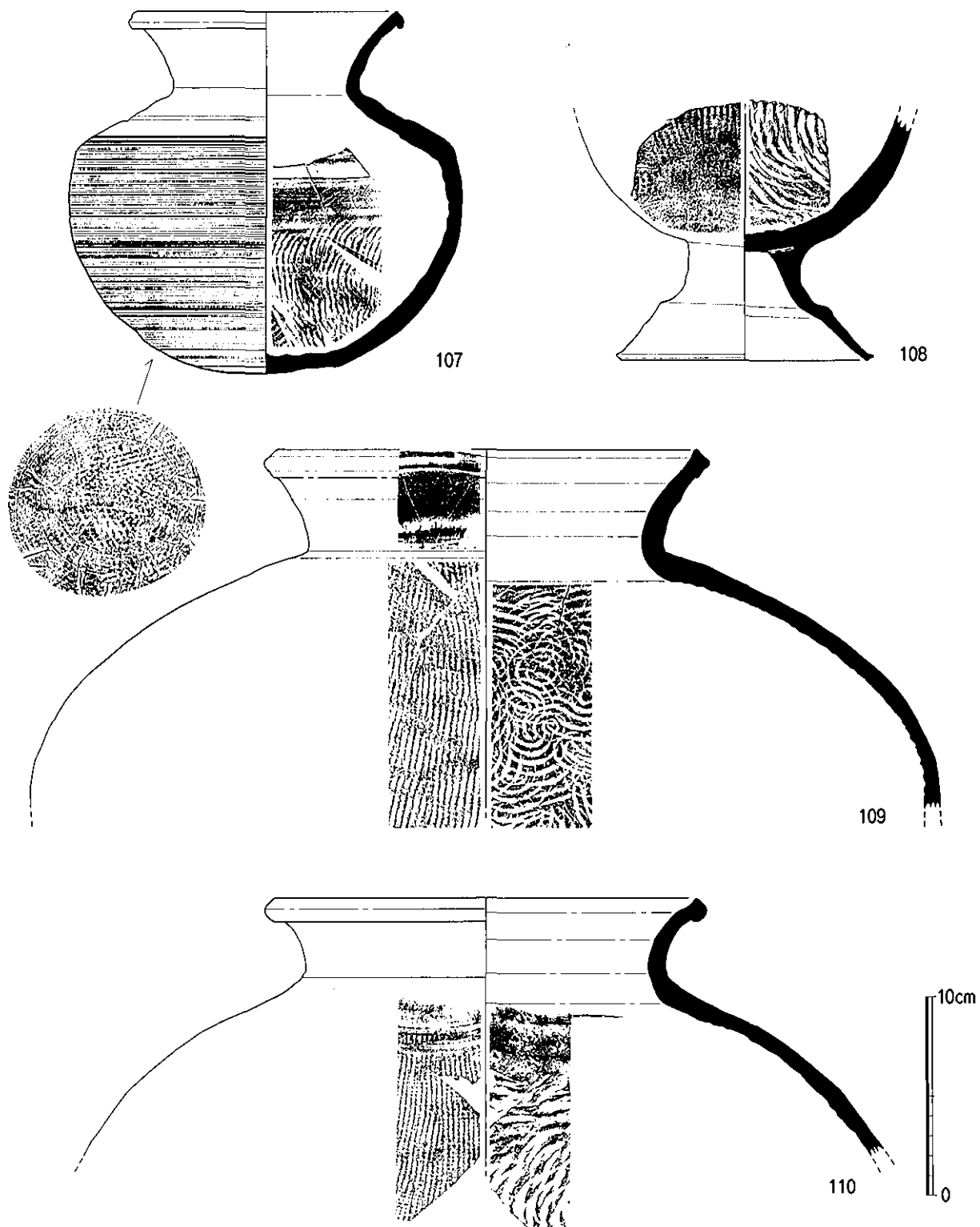
第12図 6次灰原出土遺物実測図⑤ (1/3)

きした痕跡が確認される。脚部が焼成時にひどく歪む。69は焼成前、体部に径2.2cmの孔を穿孔する。外側からヘラ状の工具を差し込んで円形に切り取ったあと、内側からも同様の工具を孔の周囲にあてて丁寧に整形している。底部外面には脚部が取れた痕跡が残っている。55・59～63・67・68・71は無蓋高杯である。調整は55・59・67・68・71は外面を回転ヘラ削りし脚部を回転ナデにより取り付ける。67は脚部外面上位から中位にカキメを施す。杯部底部と体部の境に稜を持つもの (59・60・68)、杯部が丸みをおびるもの (61～63・67) がある。60は杯部底部と体部の境に1段、59・68は杯部底部と体部の境と体部に各1段、段を有す。63は1条、62・67は2条、61は3条の沈線を杯部外面に施す。59～62は連続刺突文を施す。67の脚裾部は屈曲し膨らみながら脚端部へと至る。58・64・65・72～79は高杯脚部である。基部が細いもの (72～75・78)、脚裾部が屈曲するもの (58・65・76・77)、脚端部を折り曲げるもの (64)、脚裾部で段をなす



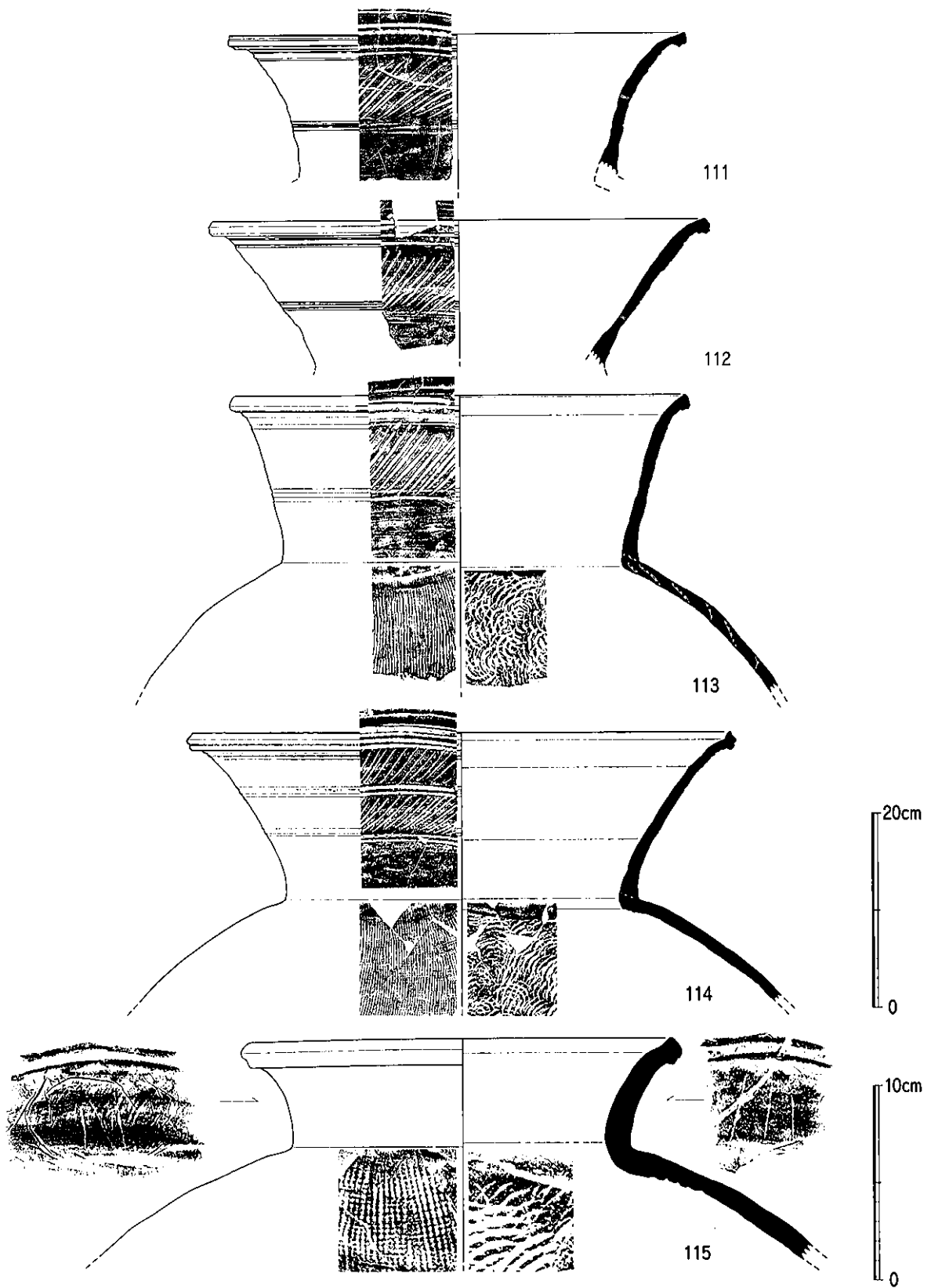
第13図 6次灰原出土遺物実測図⑥ (1/3)

もの (79)、基部が太く短いもの (80) がある。74は外面上位のみ、78はほぼ外面全体にカキメを施す。74は台形の透かしを上下2段に縦一列、3方向または4方向に穿つ。64・65・71～

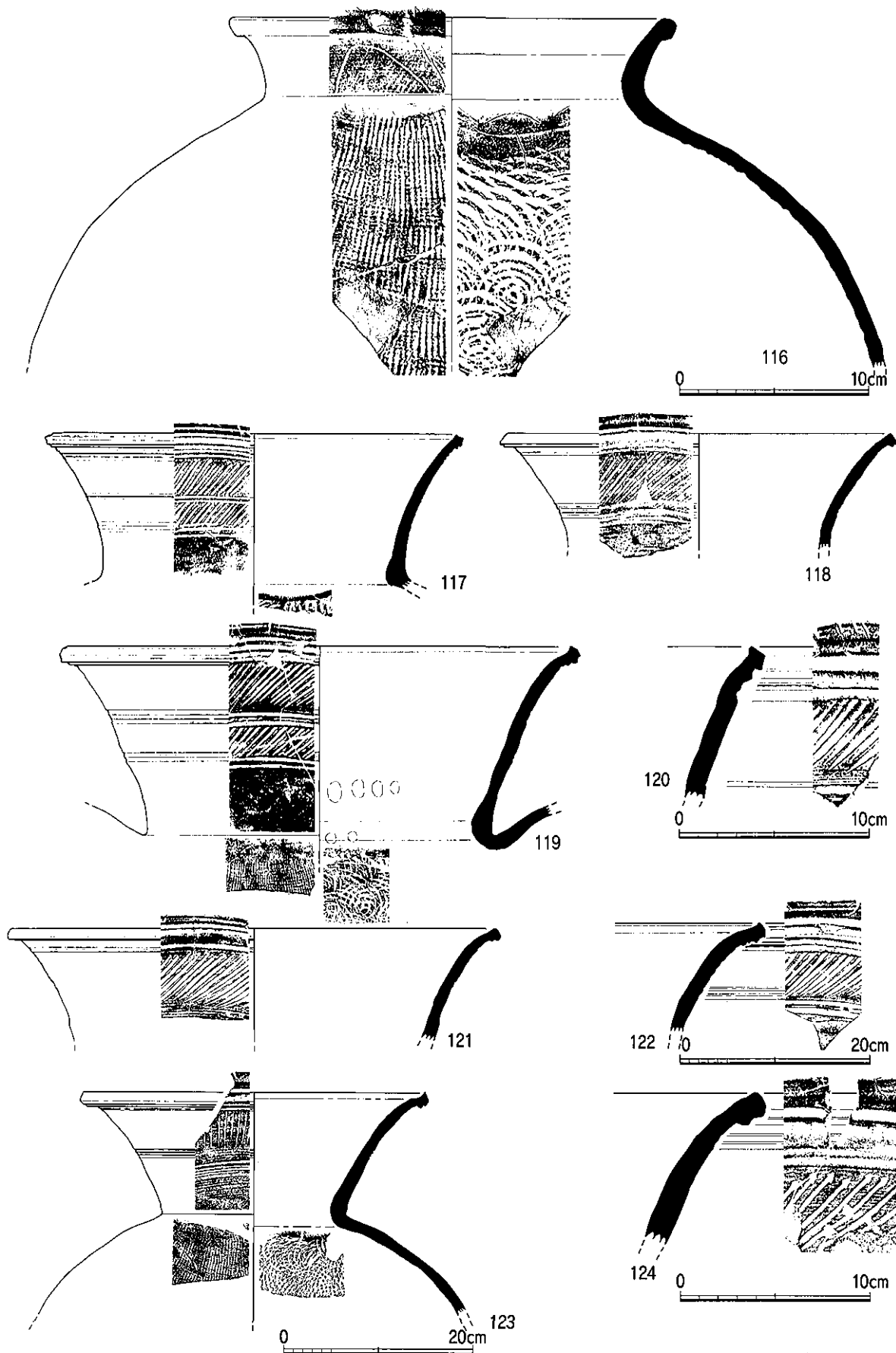


第14図 6次灰原出土遺物実測図⑦ (1/3)

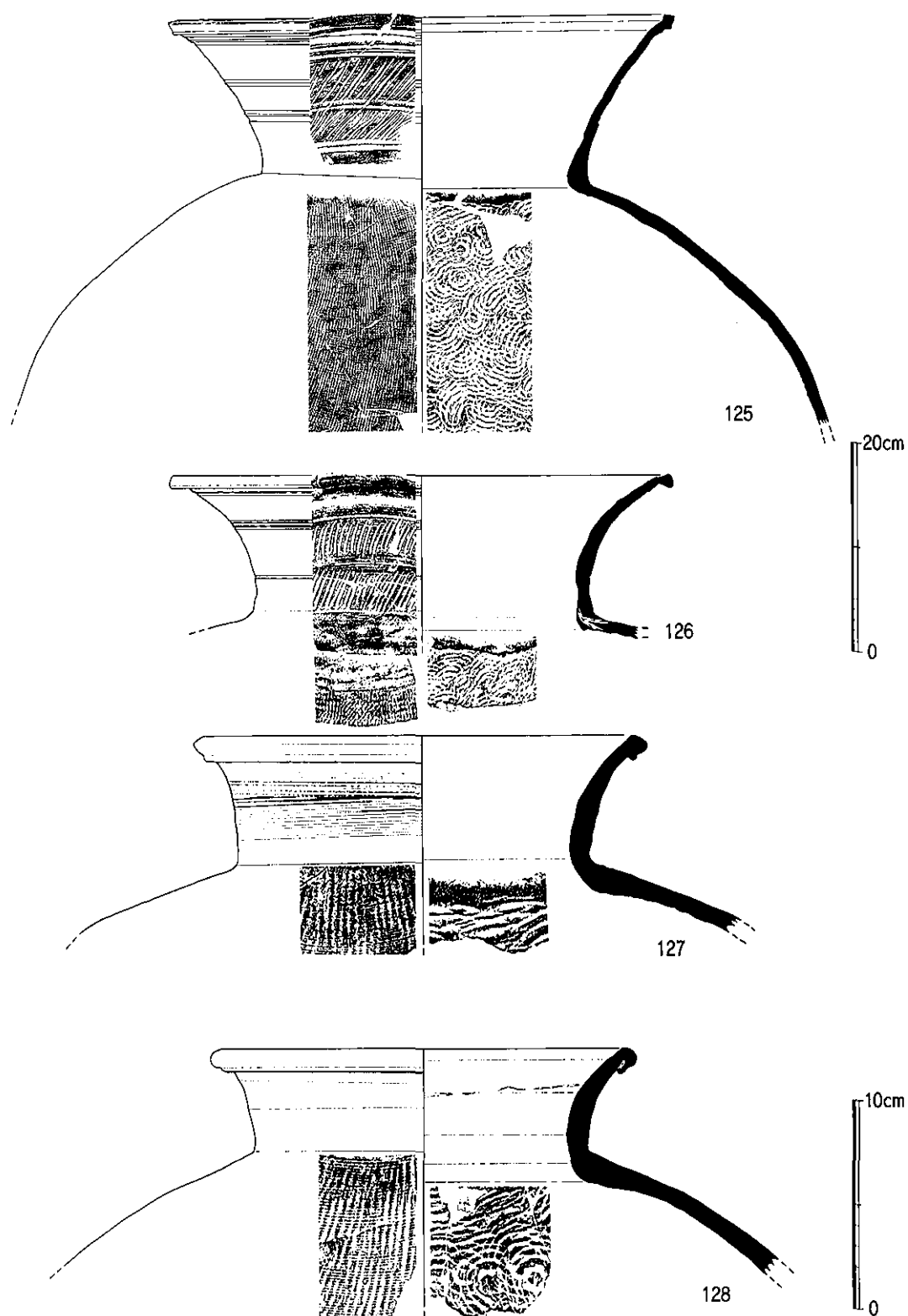
74・76・77は脚部外面中位に沈線を2条施す。75は脚部内面に格子状のヘラ記号を持つ。81は皿。口縁端部はやや外反し、底部は回転ヘラ切りである。82～84は椀。82・84はともに底部を欠損するが、体部から口縁部にかけて開き気味に立ち上がり口縁端部がややすぼまる形態である。83は丸い底部から体部は直立する。体部外面はカキメ、体部と底部の境から底部は回転ヘラ削りを施



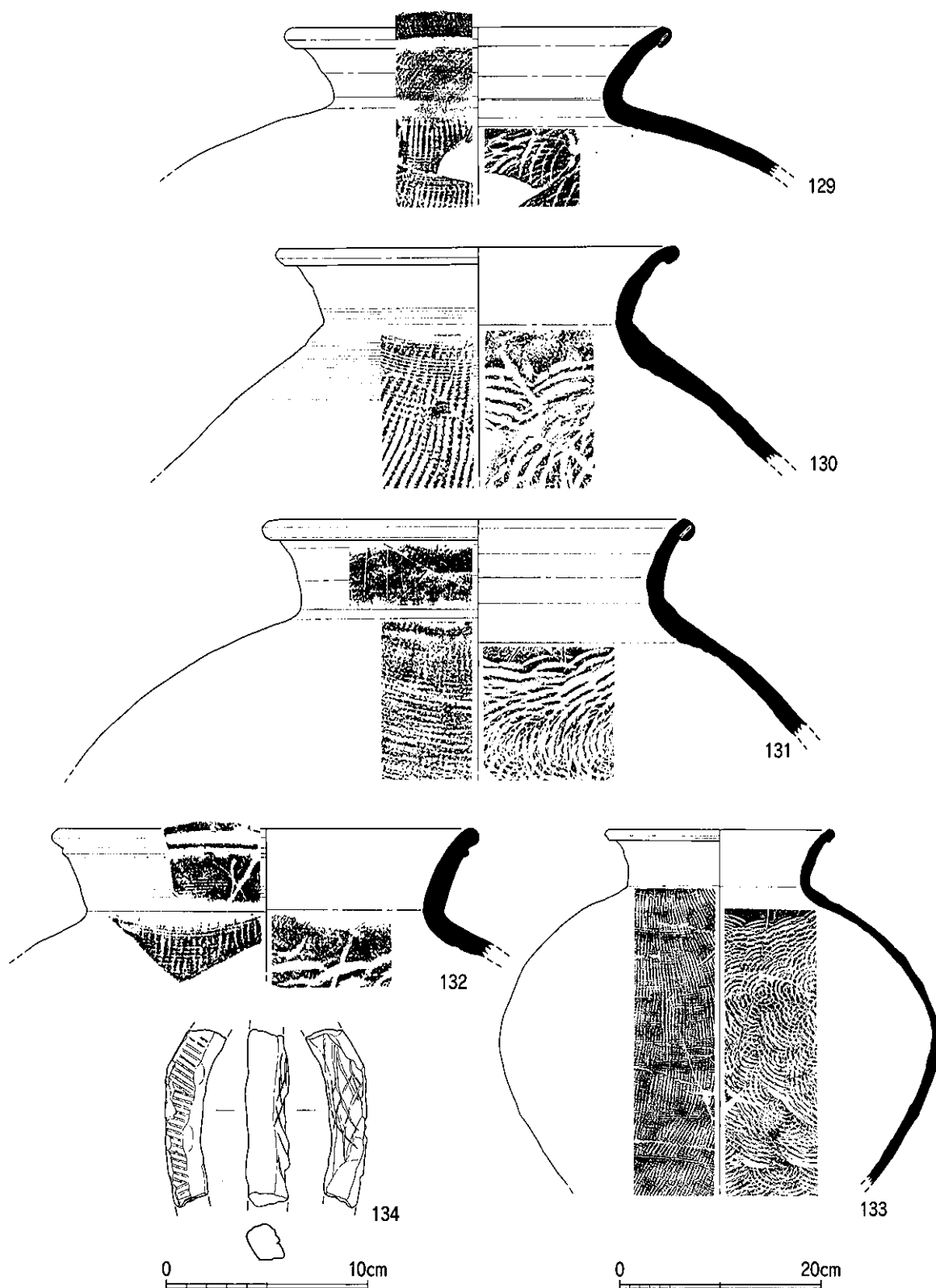
第15図 6次灰原出土遺物実測図⑧ (111~114は1/6、115は1/3)



第16図 6次灰原出土遺物実測図⑨ (116・120・124は1/3、他は1/6)

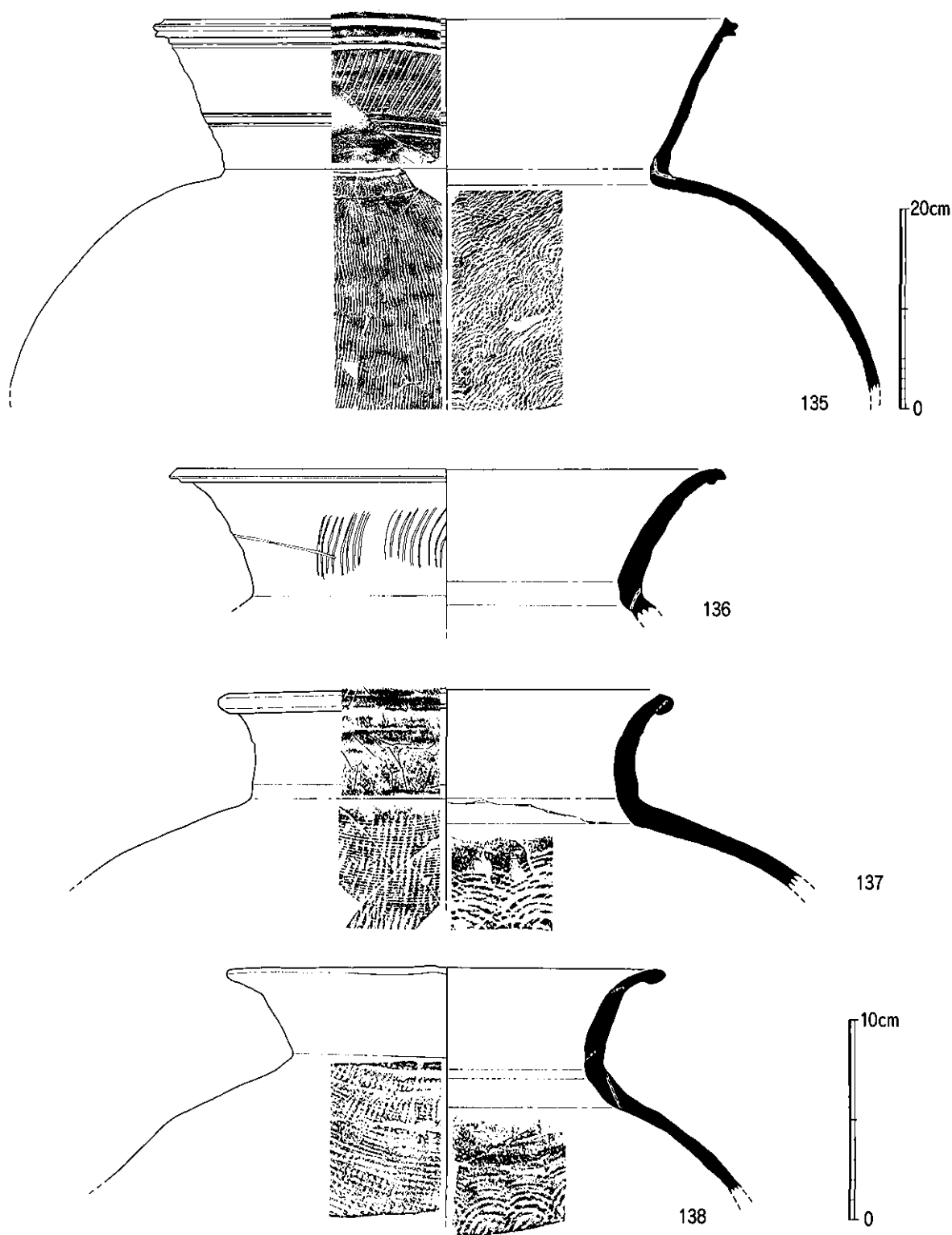


第17図 6次灰原出土遺物実測図⑩ (125・126は1/6、127・128は1/3)



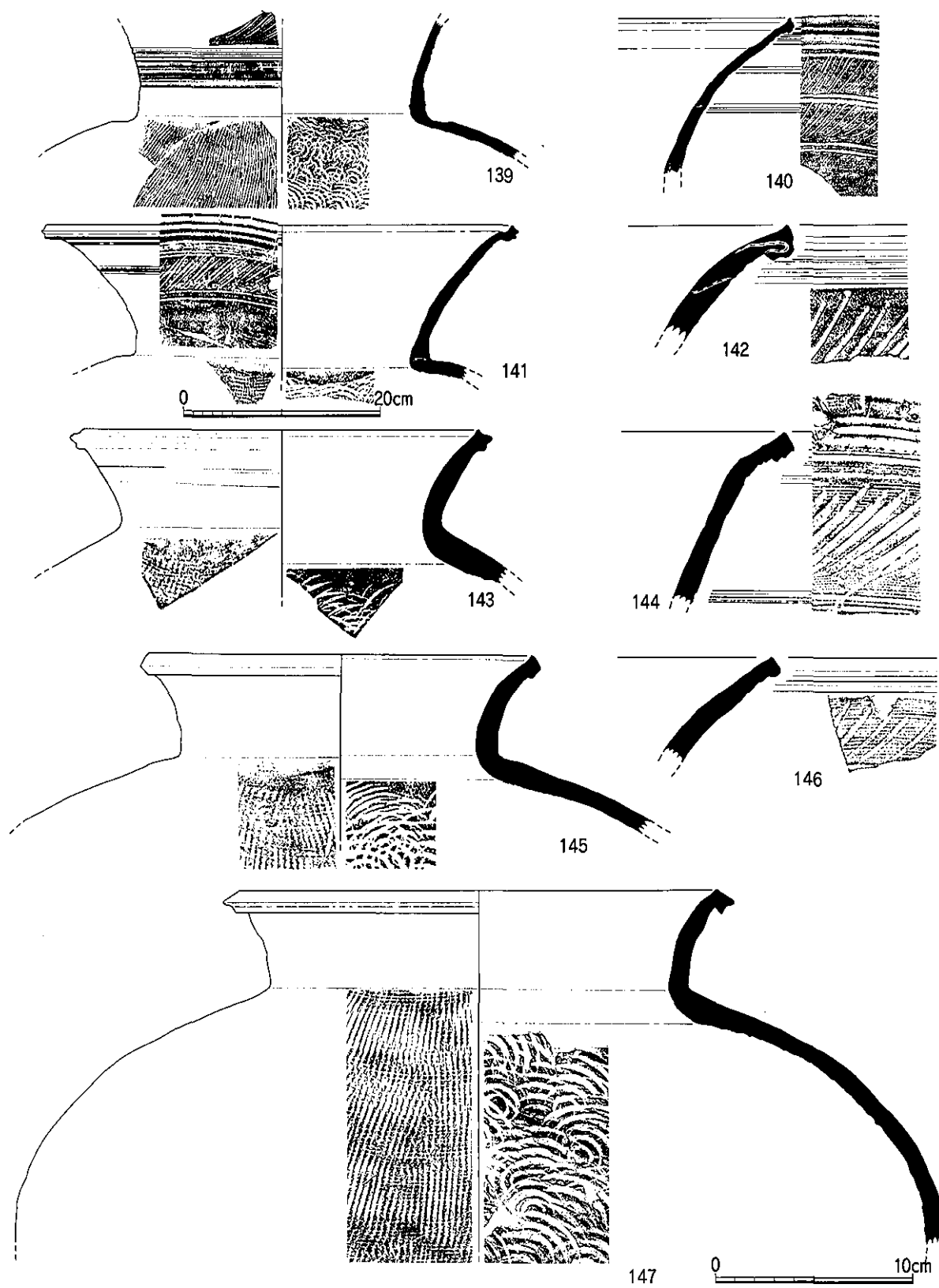
第18図 6次灰原出土遺物実測図⑪ (129~132・134は1/3、133は1/6)

す。82は2条と3条の沈線を各1組、84は2条の沈線を2組施す。83の底部外面には格子状のヘラ記号が施される。85は盤。底部を欠損するが口縁部下で少しすぼまり体部がややふくらむ形態で、口縁端部は平坦気味になる。86~89は罫。86は口縁部下に凸線をめぐらせる。87は体部外面上位

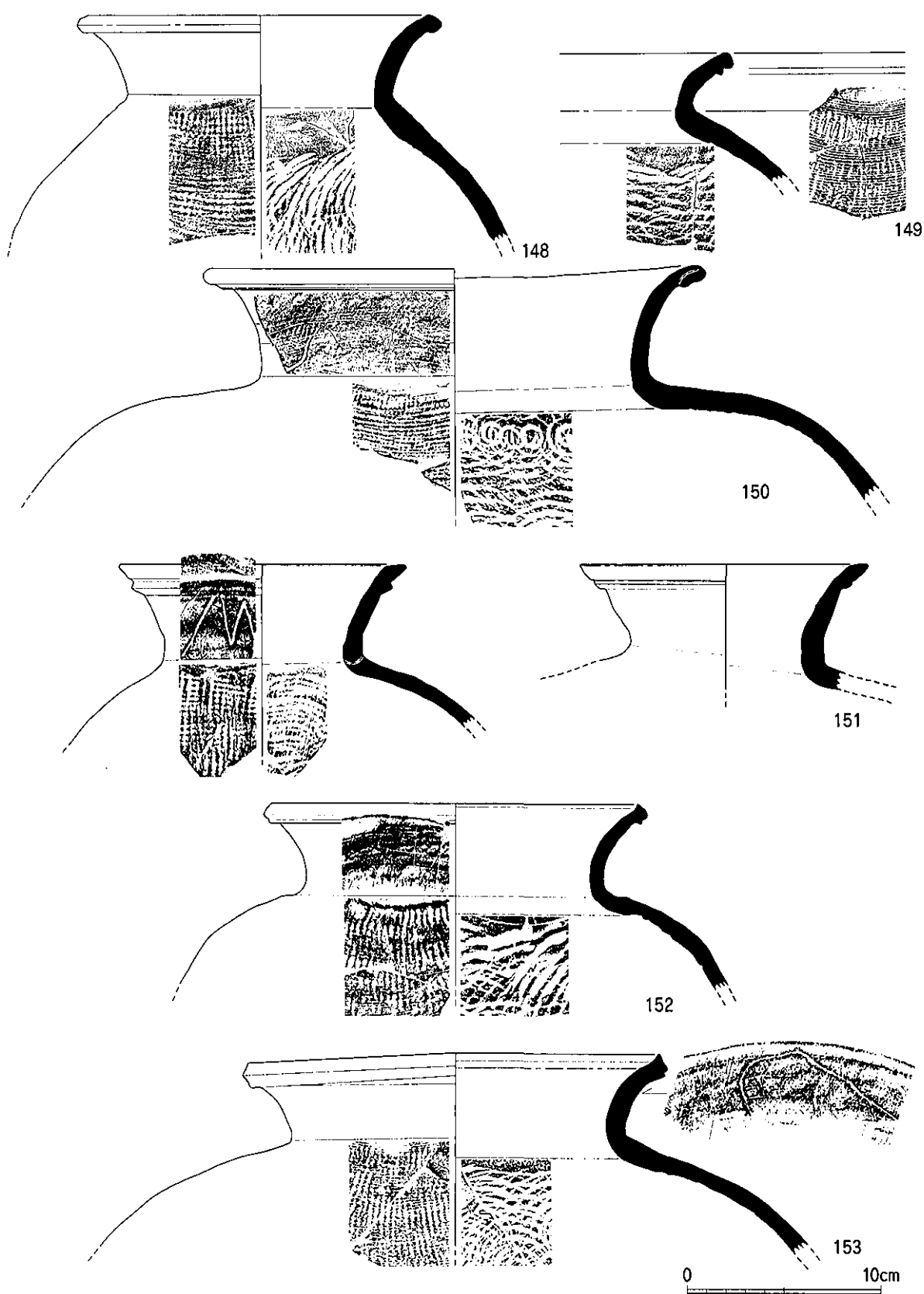


第19図 6次灰原出土遺物実測図⑫ (136～138は1/3、135は1/6)

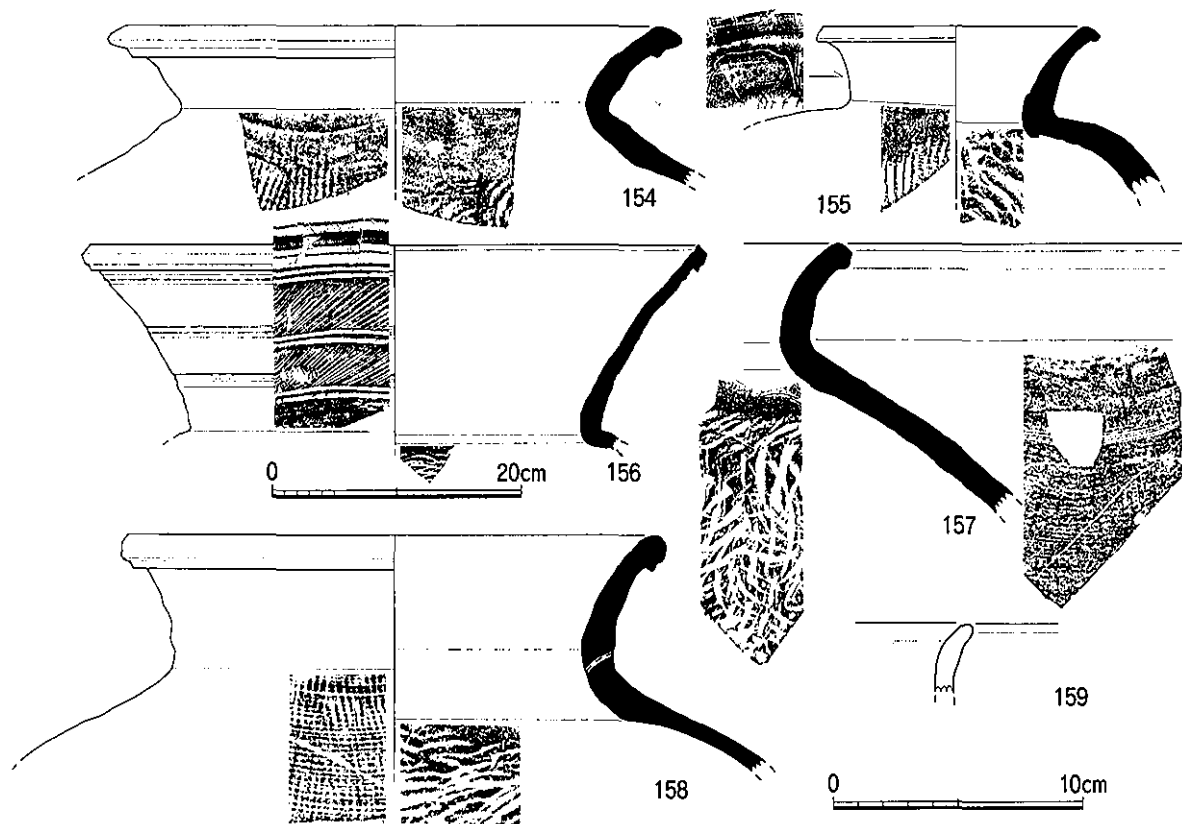
にはカキメ、中位には沈線を2条、そのカキメと沈線の間に連続刺突文を施す。体部外面中位から底部は手持ちヘラ削り。88は頸部外面から体部上位はカキメ、中位には沈線2条、その沈線の間に連続刺突文、底部外面は回転ヘラ削りが施される。体部の穿孔は丁寧にナデで仕上げる。頸部外面には「V」のヘラ記号が施される。90は瓶類または壺の口縁部で回転ナデ調整、外面中位に沈線



第20図 6次灰原出土遺物実測図③ (140・142~147は1/3、139・141は1/6)



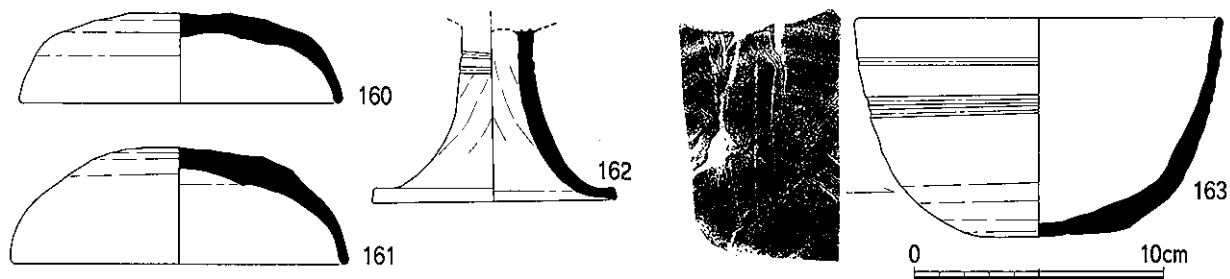
第21図 6次灰原出土遺物実測図⑭ (1/3)



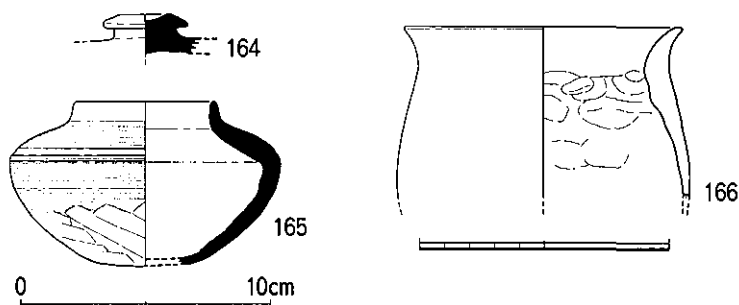
第22図 6次灰原出土遺物実測図⑮ (156は1/6、他は1/3)

が2条施される。91と98は提瓶。91は口縁端部が少しすぼまる形態。98は提瓶の把手で鍵状を呈す。92～97は平瓶。93・96は最大径部から下位は直線的にすぼまって底部へと至る。94は最大径部から下位は丸みを持ちながら底部へと至る。95の体部は楕円形を呈する。92は頸部と残存する体部、93・95・97は体部外面上位にカキメ、93～96は体部外面下位は回転ヘラ削りが施される。95は底部と体部の境に回転ヘラ削り後擬格子タタキが施される。また、93・95～97は肩部に乳状突起が貼付される。94は貼付痕のみが確認される。99は蓋で口縁端部が外反し、天井部外面はカキメ、体部と天井部の境は回転ヘラ削り。100・101は短頸壺蓋。100は丸みを帯び、外面3/4は回転ヘラ削りを施す。101は平坦な天井部から垂直気味に口縁部へと至り、口縁端部はほぼ平坦に仕上げる。天井部外面は回転ヘラ切り後ナデを施す。天井部外面に「||」のヘラ記号が認められる。105は短頸壺で口縁部は短く垂直に立ち上がり、体部は楕円形を呈し最大径部外面のやや上方に沈線を2条、中位はカキメ、下位は回転ヘラ削りを施す。102は蓋で、カキメはまばらである。103・104は短頸壺。103は体部外面に擬格子タタキ後カキメ、104は外面の最大径部下にタタキが施される。106は台付壺の脚部である。ゆるやかに裾部に向かって広がり裾部は段を成し脚端部へと至る。外面に沈線を2条施す。(井上)

107は壺。器高18.2cmに復元される小型のもの。体部外面は肩部以下にカキメを施すが、タタキ痕が残っており、内面は同心円当て具痕が認められる。108は体部中位以上を失うが、外面平行タタキ、内面同心円当て具痕を有する球体状の体部に脚部がつく。上半は接合資料がないため推測のしようがないが、タタキ成形が用いられることから小型の甕のような器形になるのであろうか。



第23図 6次洞窟塚出土遺物実測図 (1/3)



第24図 6次灰原1区上方東SP・表採遺物実測図 (1/3)

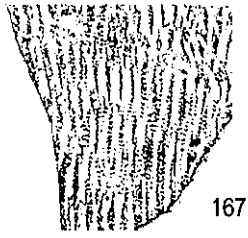
109～133・135～150・152～158は甕。頸部が全周したものは少なく、口径の復元には反転したものが多いが、口径20～30cm前後の中・小型のものと口径40～55cm前後の大型のものに分けられる。中・小型のものは基部は太く、頸部は短く外上方に開き、口縁端部は折り曲

げられ玉縁状に丸く仕上げられるもの、端部下半を強くナデることで断面三角形形状になるもの、端部を上方にのぼすことで稜が生じるものなどに大別され、さらに端部外面に面取り状に強いナデが施されたり、工具により沈線を施すことで端部形態が異なっており、バリエーションが多い。大型のものは、頸部外面に2～3段に沈線を巡らし、沈線により区画された空間にカキメを施しさらに連続斜線文を施すもの、連続斜線文のみを施すもの、カキメのみを施すものがある。口縁部は太い基部から外反し、端部へいたる。端部は、折り曲げて丸くもしくは方形に仕上げた後、さらに端部外面に沈線や強いナデを施すものや、端部を上方へのぼし稜が生じるものがある。134は甕の体部と口縁部を接合する際に、体部の余分な部分を切り取ったと考えられるものである。平行タタキ・同心円当て具痕が内外面に残る。151は横瓶。口縁部はやや高さが異なり、外面擬格子タタキ・内面同心円当て具痕が残る。159は土師器の甕。口縁部だけの小片であり、口径などは不明。

160～163は、洞窟塚とした灰原を切り込む遺構の埋土中から出土したものである。160・161は杯蓋。口径は12.7～13.2cm。天井部は比較的高く、丸みをもつ。162は高杯。脚部のみの破片である。比較的低い脚部をもち、上位に沈線が2条巡らされる。163は椀。体部外面は中位から底部にかけて回転ヘラ削りが施され、上位には沈線を二段に配する。下位にはヘラ記号を施す。

164・165は灰原1区で検出されたピット内出土。164は高杯蓋。つまみ部分のみ残存。165は短頸壺。底部外面は手持ちヘラ削りにより仕上げられ、肩部には蓋の釉着痕が認められる。166は表採。小型の土師器甕であり、内面は指頭痕が著しく、ナデにより仕上げられる。

167～184は甕の体部に施されるタタキと当て具痕跡について、観察により別個の原体と想定されるものについて取上げたものである。いずれも木目に直交して刻み目を施すいわゆる擬格子タタキとされるものであり、明確に平行・格子目タタキと分かるものは確認できなかった。179のように一見平行タタキに見えるものもあるが、タタキ目の凹部には木目が生じている。183などは刻み



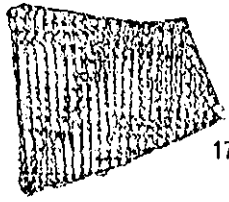
167



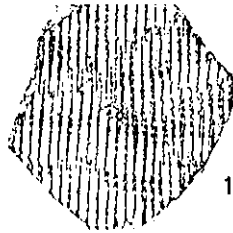
168



169



170



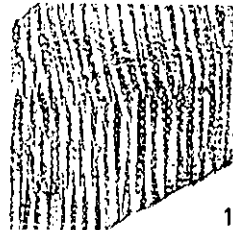
171



172



173



174



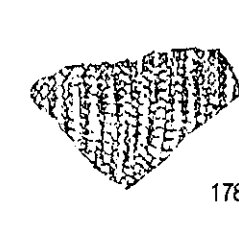
175



176



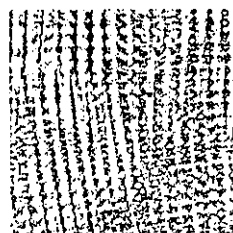
177



178



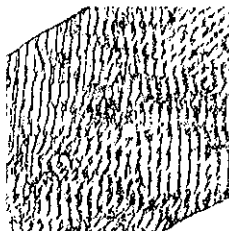
179



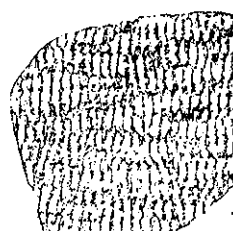
180



181



182

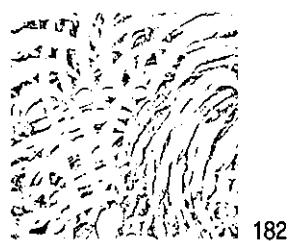
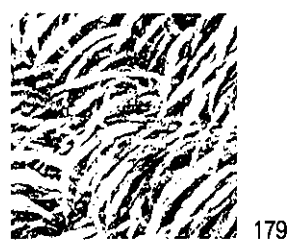
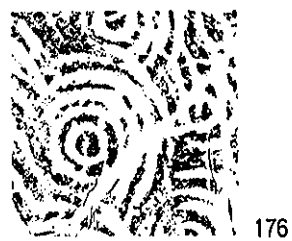
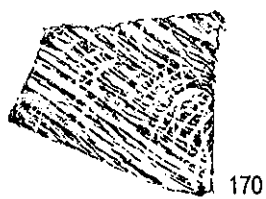
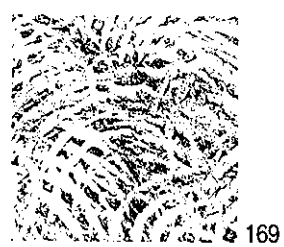
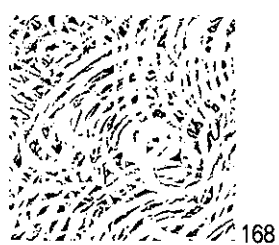
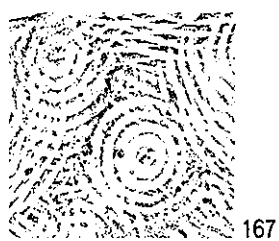


183



184

第25図 6次調査出土甕類タタキ拓影図 (1/2)



第26図 6次調査出土甕類当て具痕拓影図 (1/2)

目となるタタキ目の凸部が丸くなっており、直交する木目がタタキ目の凹凸部を横断する。原体はかなり使い込まれたと考えられるが、実験を経ていないため、確言することはできない。内面は、いずれも同心円当て具が使用される。しかし、拓本に使用した以外にも6次調査では甕において、一部平行条線文に見える当て具痕も存在する。ただ、体部成形タタキの際の当て具の角度によって同心円当て具痕が平行条線文に見える場合もある。したがって、当て具については主として同心円当て具が使用されたものと考え、一部平行条線文も使用された可能性はあるが、体部全体の成形には用いられていないようである。(石木)

C. 小結

上記のように、6次調査地では須恵器窯跡にともなう灰原と、これを切り込む洞窟塚が確認された。灰原は複数の時期の遺物を含んでおり、おおむねⅣA期と8世紀代の2つの時期が認められるものの、灰層には間層などは認められず、灰原が複数重複した状況は看取できなかった。ⅣA期の遺物は焼きが悪かったり、焼け歪んだものが多く、灰原はⅣA期のものにもなう可能性が高い。また奈良時代の遺物については、窯跡が存在した可能性は否定できないものの量的にも少なく、積極的な根拠に欠ける。したがって、窯跡以外の何らかの遺構が周辺に存在したと思われるが、内容を明らかにできない。

洞窟塚については、灰原土層の観察により地下式の塚が崩落した状況が伺える。陥没部分からは灰原に伴う須恵器が大量に出土したが、床面からは梯子状に配置された丸木以外何らの遺物も出土していない。したがって、時期を示す遺物はまったくなく、洞窟塚とするのは早計に過ぎるかもしれないが、可能性としては最も高いと考えている。地元の人達からの聞き取りによれば、構築材には松を使ったとの証言があるが、丸木の樹種同定は実施しておらず、いずれ分析をおこなうことで洞窟塚であるか否かを確かめたい。(その後、(株)古環境研究所に分析を依頼し、丸木がアカマツであるとの結果を得た。分析内容については、次集に掲載予定である。)

構造としては、全体像は未掘のため不明な点があるが、長さ10m以上、幅約1.6m程度の細長く直線的なプランを呈するのが特徴である。同様の構造を持つものは、上大利北土地区画整理地内で調査を実施した本堂遺跡7次調査地でも確認している。床面に構造材が存在し、貼床を施すことも特徴と考えられるが、現時点では機能や用途については不明である。(石木)

2. 第8次調査

A. 調査概要 (第27図、図版4)

第8次調査地は大野城市大字上大利598-2の一部にあたる。調査面積は8260㎡にわたる。日ノ浦池から南西方向に入り込む小谷にあたり、第6次調査地とは作業用の仮設道路を挟む。この仮設道路は内山緑地が県道31号線をまたぐために作ったアカシヤ橋から略南西方向にのびており、旧地形図に照らし合わせると日ノ浦池を北から西へ周回するようにのびる丘陵の尾根線上にあたる。

試掘調査はこの仮設道路から東側を実施した。仮設道路部分は相当の削平を受けていたが、南西方向に入り込む谷部の斜面は残存していた。表土剥ぎはこの谷部を実施していったが、谷が狭くまた深いため難渋した。遺構は仮設道路の東側斜面に位置しており、土坑1基が確認された。またこの土坑の他、調査地内では数ヶ所で遺物の出土が認められたが、遺構は確認されなかった。

(石木)

B. 遺構と遺物

SX01 (第28図、図版5)

遺構は東側斜面上に検出され、現状では斜面上方に位置するが仮設道路が削平を受けることを考えると、丘陵頂部よりやや下がった位置に所在した可能性が高い。遺構の所在する斜面は傾斜が急であり、遺構の床面もこの斜面とほぼ同じ傾斜を呈している。

土坑は長さ3.55×幅5.85mの不整形プランを呈し、深さは約40cm、埋土には花崗岩の大ぶりの石が含まれていた。遺物も石とともに埋土中から出土したが、いずれも浮いた状態であり床面に置かれたりするようなものはなかった。

(石木)

出土遺物 (第29図・図版16)

185は高杯。杯部形成後底部にカキメを行い、脚部と接合する。脚部上半にカキメを施す。杯底部と脚部中位に2条の沈線を巡らす。脚部に6本の透かし状のV字の切り込みが入る。杯底部に渦巻き状のヘラ記号が認められる。杯部内面に窯壁屑が釉着し、それと正対する脚部に降灰が認められる。また、降灰が確認できる反対の脚端部は歪みが生じていることから、焼成段階で倒置されていたと思われる。186・187は甕である。186はほぼ完形の中型の甕である。口径は23.6cmである。口縁部は基部から短く外反した後、端部は肥厚して外側下方に沈線状の段を作る。体部最大径は44.1cmである。体部外面は擬格子タタキを施す。体部下位は底部叩き出しに伴う不定方向、中位はやや左上がりの一定方向のタタキが施されている。上位はタタキ後カキメを施す。内面は同心円当て具痕。187は大型の甕の口縁部の破片である。復元口径は42.0cmである。沈線を2段巡らせる。上端に2条、その間に連続斜線文を施したあと、下端の2条を巡らせる。接合部には体部に施されたタタキの痕跡が確認できる。

(北川)

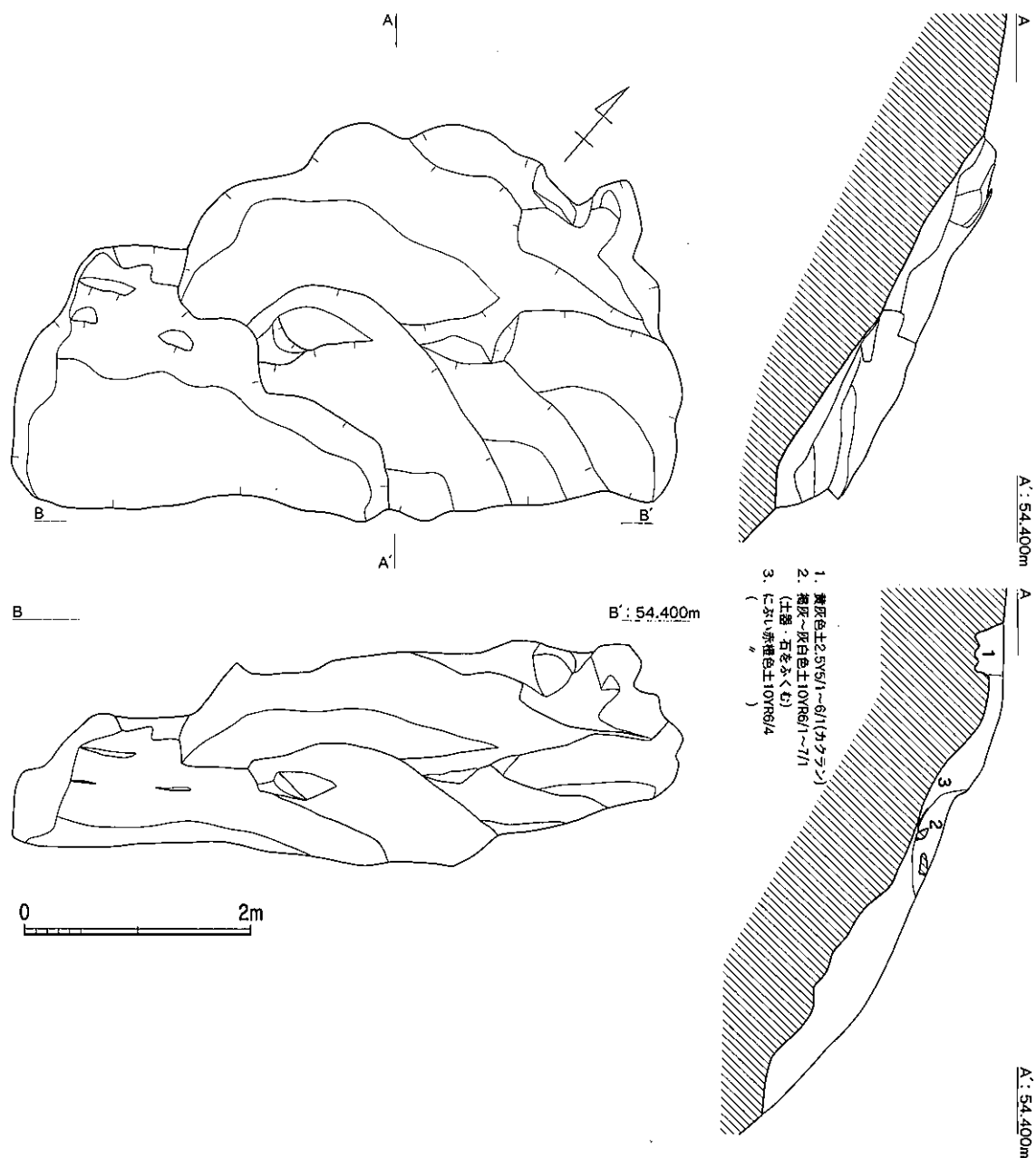
C. 小結

以上のように、8次調査地では土坑1基が確認された。出土遺物から、Ⅳ期のものと考えられるが、出土遺物が少なく、時期を確定させることができない。

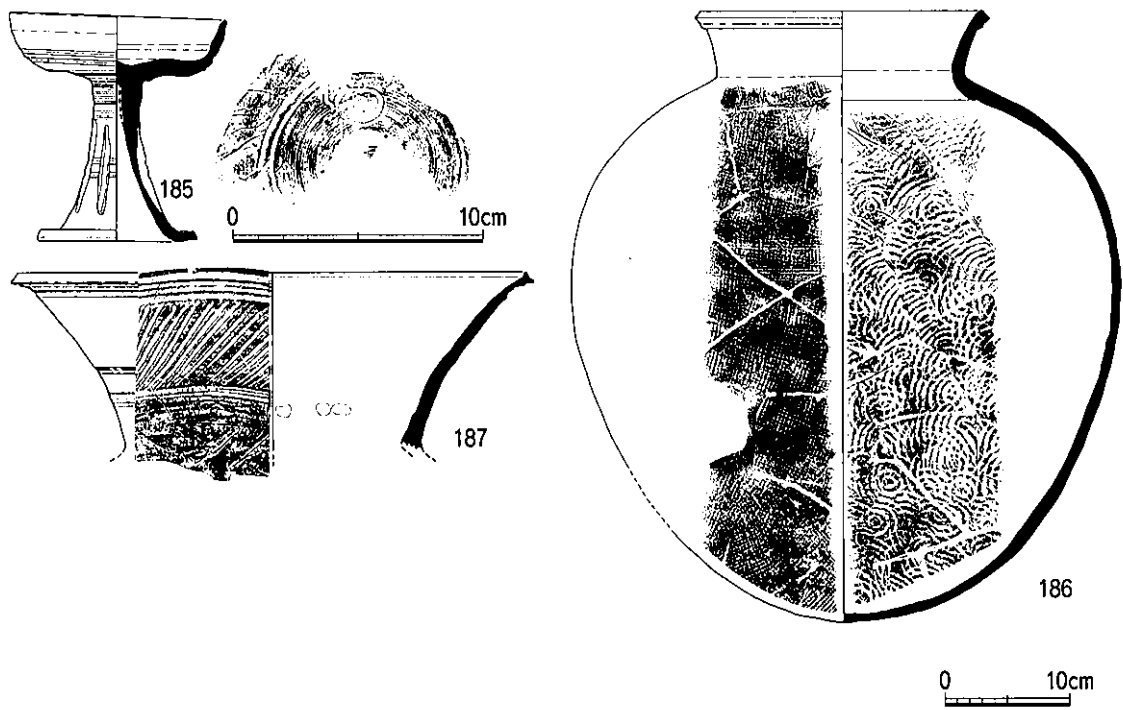
土坑のプラン・形状から考えると、遺構の機能・目的をはっきりとさせることは難しく、斜面上



第27図 8次調査地地形測量図 (1/500)



部も削平されるため周辺遺構の規模や範囲の推測も不可能である。また遺構自体が明確な掘り込みを伴うとも言い難く、SX01自体が遺構ではない可能性も考えられるが、尾根部を挟んで北方50mに位置する野添6次調査地にIV期の須恵器窯跡が存在しており、これにともなう工房ないしは集落が8次調査地の所在する斜面にあった可能性を提示するに留めておきたい。(石木)



第29図 8次SX01出土遺物実測図（185は1／3、186・187は1／6）

表1 野添遺跡第6次調査出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量cm ※()は復元径 ①口径 ②器高 ③底径 ④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
1	須恵器	杯蓋	灰原1区上方1層黒色	①(11.6) ②4.1	外面2/5回転ヘラケズリ、内面4/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B良好 C内外、灰N6/	天井部外面にヘラ記号
2	"	"	灰原1区上方1層黒色	①12.5 ②3.8	外面2/3回転ヘラケズリ、内面1/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B良好 C外、黄灰2.5Y6/1 内、灰5Y6/1	天井部外面にヘラ記号
3	"	"	灰原1区上方1層黒色 灰原3区水道 灰原4区1層	①(12.7) ②4.1	外面2/5回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1～2mmの白色粗砂を少し含む B不良 C外、にぶい黄橙10YR7/4～にぶい黄褐10YR5/4 内、明黄褐10YR6/6	天井部外面にヘラ記号
4	"	杯身	灰原1区上方1層黒色	①(12.5) ②4.35	外面1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1mmの白色粗砂を少し含む Bやや不良 C内外、灰赤2.5YR4/2	外面に土柱使用痕
5	"	杯蓋	灰原4区1層黒色	①(11.0) ②3.7	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。0.5～2mmの白色粗砂を多く含む B良好 C内外、灰N5/	天井部外面にヘラ記号
6	"	"	灰原4区1層黒色	①12.7 ②4.65	外面1/2回転ヘラケズリ、内面2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。0.5～1mmの白色粗砂や黒色粒子をやや多く含む Bやや不良 C外、灰白10Y8/1～灰10Y5/1 内、灰5Y6/1～N7/	
7	"	"	灰原4区1層黒色	①(12.2) ②4.25	外面1/2回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。3mm以下の白色粗砂・礫や黒色粒子を少し含む B良好 C外、灰白5Y6/～青灰5B5/内、青灰5B5/	天井部外面にヘラ記号
8	"	"	灰原4区1層黒色	①13.0 ②4.1	外面2/5回転ヘラケズリ、内面3/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。0.5～1mmの白色粗砂を少し含む Bやや不良 C内外、灰5Y6/1	内面にヘラ記号
9	"	"	灰原4区1層黒色	①(12.8) ②4.0	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。1mm以下の白色粗砂や黒色粒子をやや多く含む B不良 C外、灰5Y6/1 内、灰黄2.5Y6/2	天井部外面にヘラ記号
10	"	"	灰原1区上方1層黒色	①(14.7) ②(1.1)	外面3/4回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂を少し含む B不良 C外、灰白2.5Y8/2～にぶい橙7.5YR7/3	天井部外面に土柱使用痕
11	"	"	灰原1区下方1層暗褐色	①(12.25) ②4.0	外面1/2回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂や黒色粒子を少し含む Bやや不良 C外、灰N6/～緑灰7.5GY5/1 内、灰N6/	天井部外面にヘラ記号
12	"	"	灰原2区下方1層黒褐色	つまみ径3.8 つまみ高1.0	つまみ回転ナデ、外面回転ヘラケズリ、内面不定方向ナデ	Aやや粗。0.5mmの白色粗砂、黒色粒子をやや多く含む B良好 C内外、灰N4/ つまみ部、灰白N7/	
13	"	"	灰原2区下方1層黒褐色	①(15.3)	内面2/3は回転ナデ、他は不定方向ナデ	A精良。0.5mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外、灰N6/～4/ 内、灰N6/、灰7.5Y6/1～N5/	
14	"	"	灰原3区2層黒色	①(12.9) ②3.05	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。2mm以下の白色粗砂、黒色粒子をやや多く含む B良好 C外、灰10Y6/1～暗青灰5PB3/1 内、灰N6/	
15	"	"	灰原3区2層黒色	①13.35 ②3.3	外面2/5回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。0.5～3mmの白色粗砂・礫、黒色粒子をやや多く含む B良好 C内外、灰5Y5/1～N5/	天井部外面にヘラ記号
16	"	"	灰原3区2層黒色	①(13.3) ②3.55	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。0.5～6mmの白色粗砂・礫を多く含む B良好 C外、灰赤10R5/2～暗灰N3/、灰白N7/、5Y8/2 内、灰N5/	天井部外面に窯壁屑付着
17	"	"	灰原3区2層黒色	①(12.9) ②3.85	外面2/5回転ヘラケズリ、内面2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。0.5～2mmの白色粗砂、黒色粒子をやや多く含む B良好 C外、紫灰5P5/1～青灰5PB6/1 内、青灰2.5YR5/2～灰N5/	
18	"	"	灰原3区2層黒色	①13.2 ②4.1	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。0.5～2mmの白色粗砂、黒色粒子をやや多く含む B良好 C外、灰N6/～灰赤10R4/2、暗灰N3/ 内、灰N5/	
19	"	"	灰原3区2層黒色	①(13.0) ②4.3	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。0.5～1mmの白色粗砂を多く含む Bやや不良 C、灰オリーブ5Y6/2～灰N6/	天井部外面にヘラ記号
20	"	"	灰原1区縦断ベルト清掃中 灰原3区2層黒色	①(13.4) ②4.1	外面3/5回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A粗。1～3mmの白色粗砂・礫を多く含む B不良 C外、にぶい褐7.5YR7/3 内、にぶい褐色7.5YR5/3	天井部外面にヘラ記号
21	"	"	灰原3区2層黒色	①(14.0) ②4.2	外面1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B不良 C内外、浅黄2.5Y7/3	天井部外面にヘラ記号
22	"	穿孔杯	灰原3区2層黒色 灰原3区防空壕	孔径3.35	外面1/2回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。3mm以下の白色粗砂・礫、黒色粒子をやや多く含む Bやや不良 C外、灰7.5Y6/1～青灰10B G5/1 内、浅黄2.5Y8/4～灰N6/	天井部に焼成前穿孔
23	"	杯蓋	灰原縦断ベルト1層灰層	①12.2 ②3.5	外面3/4回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A粗。1～3mmの白色粗砂・礫を多く含む B良好 C内外、灰N6/	口縁部外面にヘラ記号
24	"	"	灰原縦断ベルト1層灰層 灰原3区防空壕	①(12.0) ②4.0	外面3/4回転ヘラケズリ、内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む Bやや不良 C内外、灰褐7.5YR4/2	
25	"	"	灰原縦断ベルト1層灰層	①12.4 ②4.0	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B良好 C外、暗灰N3/ 内、灰N6/	天井部外面にヘラ記号
26	"	"	灰原水道 灰原3区防空壕	①12.15 ②3.4	外面1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	Aやや粗。0.5～3mmの白色粗砂・礫をやや多く含む B良好 C外、灰褐5YR5/2～暗青灰5PB4/1、黄灰2.5Y6/1 内、赤灰2.5YR5/1～4/1	天井部外面にヘラ記号
27	"	"	灰原1区水道	①(12.5) ②3.8	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。1～4mmの白色粗砂・礫をやや多く含む B良好 C外、紫黒5P1.7/1 内、灰N4/	天井部外面にヘラ記号
28	"	"	灰原1区水道	①(13.0) ②3.8	外面3/4回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。1～3mmの白色粗砂・礫を多く含む Bやや不良 C外、暗赤灰5R4/1 内、赤灰5R5/1	
29	"	"	灰原1区水道	①(12.9) ②4.6	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、口縁外面回転ナデ後ハケメ、他は回転ナデ	A精良。1mmの白色粗砂を少し含む B良好 C内外、灰N6/	天井部外面にヘラ記号
30	"	"	灰原1区水道	①(16.0) ②3.0 つまみ径2.2 つまみ高0.7	外面3/5回転ヘラ切りのち不定方向ナデ、口縁内面2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C内外、灰N6/	
31	"	杯身	灰原1区上方1層黒色	①10.2 ②3.7 受部径12.0	外面3/5回転ヘラケズリ、内面3/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。1～3mmの白色粗砂・礫を多く含む Bやや不良 C外、灰N5/ 内、褐灰10YR4/1	焼け歪む
32	"	"	灰原1区上方1層黒色 灰原縦断ベルト1層灰層 灰原水道	①11.3 ②3.7 受部径13.5	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B不良 C外、褐灰7.5YR6/1 内、褐灰5YR4/1	底部外面にヘラ記号
33	"	"	灰原1区上方1層黒色	①11.6 ②3.35 受部径12.95	外面1/2回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1～2mmの白色粗砂を少し含む B良好 C外、暗灰N3/ 内、灰白N7/	
34	"	"	灰原1区上方1層黒色	①11.5 ②3.7 受部径13.3	外面2/3回転ヘラケズリ、内面3/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1mmの白色粗砂を少し含む Bやや不良 C外、灰N6/0 内、N5/	底部外面にヘラ記号
35	"	"	灰原1区上方 灰原2区水道	①11.7 ②4.7 受部径13.5	外面2/3回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1mmの白色粗砂を少し含む B良好 C内外、灰N5/	底部外面にヘラ記号
36	"	"	灰原1区上方1層黒色 灰原3区2層黒色	①(12.0) ②4.2 受部径(14.5)	外面2/3回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B不良 C外、にぶい黄橙10YR7/4～6/4 内、にぶい黄橙10YR7/4～明黄褐10YR7/6	底部外面にヘラ記号?
37	"	"	灰原1区上方 灰原3区暗褐色	①(11.4) ②2.95 受部径(13.6)	外面2/5手持ちヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～6mmの白色粗砂・礫、黒色粒子を少し含む Bやや不良 C外、オリーブ灰2.5GY6/1 内、緑灰10G5/1～オリーブ灰2.5GY6/1 口縁、灰白10YR8/1	

表2 野添遺跡第6次調査出土遺物観察表②

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量cm ※()は復元径 ①口径 ②器高 ③底径 ④最大径	形態・技法の特徴	A 胎土 B 焼成 C 色調	備考
38	須臾器	杯身	灰原1区上方1層黒色	①(13.6) ②3.7 高台径(10.0) 高台高(0.5)	高台ヘラ切り後回転ナデ、他は回転ナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂を少し含む B良好 C外.暗灰N3/～灰N5/ 内.灰N6/	
39	"	"	灰原3区2層黒色 灰原4区1層黒色	①10.55 ②3.6 受部径12.4	外面1/2回転ヘラケズリ、内面3/4六角形ナデ、他は回転ナデ	A精良。0.5～1mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外.青灰5PB7/1～6/1、紫灰5RP5/1～青灰5PB5/1 内.灰7.5Y6/1、赤灰5R5/1	底部外面にヘラ記号
41	"	"	灰原3区2層黒色	①(11.4) ②3.5 受部径(13.7)	外面1/2回転ヘラケズリ、内面3/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外.暗青灰5PB4/1、にぶい黄2.5Y6/3 内.灰10Y5/1～N4/	底部外面にヘラ記号 受部に破片が軸着
42	"	"	灰原3区2層黒色 灰原3区水道 灰原3区防空壕 灰原1区上方1層黒色 灰原1区上方2層	①11.0 ②3.2 受部径14.0	外面3/5回転ヘラケズリ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。1～4mmの白色粗砂・礫をやや多く含む B良好 C外.灰白7.5Y7/1～灰7.5Y4/1 内.灰7.5Y6/1	底部に破片が軸着
43	"	"	灰原4区1層黒色	①11.2 ②4.5 受部径13.2	外面2/3回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂、黒色粒子を少し含む Bやや不良 C外.灰白7.5Y7/1 内.灰2.5Y6/2	底部外面にヘラ記号 焼け歪む
44	"	"	灰原4区1層黒色	①(10.8) ②3.8 受部径(13.0)	外面1/3回転ヘラケズリ、内面1/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外.灰7.5Y6/1～灰白N7/、灰N4/ 内.～立ち上がり外.赤灰2.5YR5/1 受部.明青灰5PB7/1～暗灰N3/	
45	"	"	灰原4区1層黒色	①11.2 ②4.25 受部径13.2	外面5/6回転ヘラケズリ後板状工具による回転ナデ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。0.5～3mmの白色粗砂、黒色粒子を多く含む B良好 C外.青灰10B G6/1～暗青灰5PB3/1 内.灰N4/	
46	"	"	灰原4区1層黒色	①11.2 ②3.9 受部径12.95	外面3/5回転ヘラケズリ、内面2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。1mm以下の白色粗砂をやや多く含む B良好 C外.灰白5Y7/1～青灰5PB6/1 内.黄灰2.5Y6/1	底部外面にヘラ記号
47	"	"	灰原4区1層黒色	①(10.9) ②3.1 受部径(12.6)	外面1/2回転ヘラケズリ、内面2/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。2mm以下の白色粗砂、黒色粒子をやや多く含む B良好 C外.青灰5PB6/1 内.灰N5/1	底部外面にヘラ記号
48	"	"	灰原4区1層黒色	①(11.7) ②3.4 受部径(13.4)	外面3/5回転ヘラケズリ、内面1/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。0.5～3mm以下の白色粗砂をやや多く含む B良好 C内外.青灰5PB5/1	底部外面にヘラ記号
49	"	"	灰原4区1層黒色	①(11.7) ②4.0 受部径(14.0)	外面1/2回転ヘラケズリ、内面口縁下は回転ナデ、他は磨滅のため調整不明	A粗。0.5～3mmの白色粗砂・礫を多く含む B不良 C内外.灰白7.5YR8/1～粗7.5YR6/8	底部外面にヘラ記号
50	"	"	灰原4区4層西端褐色	①11.4 ②3.8 受部径13.1	外面3/4回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。2mm以下の白色粗砂をやや多く含む Bやや不良 C外.灰N6/～灰オリブ5Y6/2 内.灰N6/～灰オリブ5Y6/2	底部外面にヘラ記号
51	"	"	灰原縦断ベルト1層灰層 灰原水道 灰原清掃中	①11.3 ②3.9 受部径13.8	外面3/5回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1mmの白色粗砂を少し含む B良好 C外.灰6/ 内.灰10Y6/1	底部外面にヘラ記号
52	"	"	灰原1区縦断ベルト清掃中	①(12.0) ②4.4 受部径(14.0)	外面4/5回転ヘラケズリ、内面1/4不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B不良 C外.灰赤2.5YR5/4 内.にぶい赤褐2.5YR5/4	底部外面にヘラ記号
53	"	高杯蓋	灰原1区1層暗褐色	つまみ径3.1 つまみ高0.6	外面カキメ、内面不定方向ナデ、つまみ回転ナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂を少し含む B良好 C内外.灰N6/～5/	
54	"	"	灰原1区1層暗褐色	つまみ径(2.8) つまみ高(0.85)	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。4mm以下の白色粗砂・礫を多く含む B良好 C内外.青灰5PB5/1～暗青灰5PB4/1	天井部外面にヘラ記号
55	"	高杯	灰原2区上方 灰原1層黒色	①(12.0)	外面2/3回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B良好 C外.灰N5/ 内.灰N6/	
56	"	高杯蓋	灰原4区1層黒色	①(14.35) ②5.7 つまみ径3.3 つまみ高1.1	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/2不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。0.5～2mmの白色粗砂、黒色粒子をやや多く含む Bやや不良 C外.灰N7/～5/ 内.灰N6/～5Y5/1 つまみ部.灰白5Y7/1	天井部外面にヘラ記号
57	"	高杯	灰原1区上方1層黒色	①(12.6) ②3.8 受部径(15.4)	回転ナデ	A精良。1～5mmの白色粗砂・礫を少し含む B良好 C外.暗青灰5PB4/1～青灰5PB6/1 内.暗赤灰5R4/1～青灰5B5/1	
58	"	"	灰原1区上方1層黒色	脚端径(11.5)	回転ナデ	Aやや粗。1～3mmの白色粗砂・礫をやや多く含む B良好 C外.灰N4/ 内.青黒5PB1.7/1～紫黒5P7/1	
59	"	"	灰原1区下方1層暗褐色 灰原3区2層黒色	①(11.7)	杯底部外面回転ヘラケズリ後回転ナデ、内面3/5不定方向ナデ、他は回転ナデ。杯底部外面に連続刺突文、沈線2条	Aやや粗。0.5～2mmの白色粗砂、黒色粒子をやや多く含む B良好 C杯部内面.灰N6/～10Y6/1	
60	"	"	灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区上方水道 灰原2区下方1層黒褐色 灰原3区防空壕	①(12.0)	回転ナデ。杯外面体部と底部の境に沈線1条。杯底部外面に連続刺突文、沈線1条	A精良。1～2mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外.灰N6/～褐灰10Y6/1 内.灰N5/～7.5GY5/1	内外面灰かぶり
61	"	"	灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区水道 灰原検出中	①(12.4)	杯底部外面回転ヘラケズリ後回転ナデ、他は回転ナデ。杯外面体部と底部の境に沈線1条。杯底部外面に連続刺突文後沈線2条	A精良。1～4mmの白色粗砂・礫、黒色粒子を少し含む B良好 C外.灰白N7/～黄灰2.5Y6/1 灰かぶり.5G3/1	
62	"	"	灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区水道	①(12.2)	回転ナデ。杯底部外面に連続刺突文、沈線2条。	A精良。1mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外.褐灰10YR6/1～4/1 内.にぶい赤褐5YR5/4～4/4 灰かぶり.10G R2/1～暗緑灰10GY4/1	
63	"	"	灰原1区下方1層暗褐色 灰原2区上方 灰原検出中	①(11.0)	外面1/3回転ヘラケズリ、内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ。外面沈線1条	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B良好 C内外.灰褐7.5YR4/2～褐灰7.5YR5/1 灰かぶり.黒褐7.5YR5/1	杯部内面灰かぶり
64	"	"	灰原1区下方1層暗褐色	脚端径(9.7)	脚部内外面にしぼり痕。他は回転ナデ。脚部外面に沈線2条	A精良。1～3mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C内外.灰N6/ 灰かぶり.緑黒7.5GY2/1	
65	"	"	灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区水道 灰原2区上方1層	脚端径(10.8)	脚部内外面にしぼり痕。回転ナデ。脚部外面に沈線2条	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫、黒色粒子を少し含む B良好 C外.灰白N7/～10YR7/1 内.灰N6/灰かぶり.暗緑灰10G3/1	
66	"	"	灰原2区上方1層 灰原1区水道	①13.2 受部径14.8	杯部内面3/4不定方向ナデ、杯部外面1/3回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。脚部外面に沈線2条	A精良。1～4mmの白色粗砂・礫、黒色粒子を少し含む B良好 C外～脚部内面.黄灰2.5Y4/1～暗緑灰10GY4/1 杯部内面.灰N6/	受部に杯蓋口縁片が軸着
67	"	"	灰原2区下方1層黒褐色 灰原3区防空壕奥 灰原4区1層黒色 灰原4区4層西端褐色 灰原検出中	①(16.3) ②12.1 脚端径(14.3)	杯底部外面回転ヘラケズリ後回転ナデ、脚部外面上方カキメ、他は回転ナデ。杯部外面に沈線2条	A精良。0.5～2mmの白色粗砂を少し含む Bやや不良 C内外.にぶい黄橙10YR7/2～青灰5PB6/1	杯部口縁内面にヘラ記号
68	"	"	灰原3区2層黒色	①(13.2)	底部外面回転ヘラケズリ後回転ナデ、他は回転ナデ。杯部外面体部と底部の境に2条の凸線	A精良。0.5～2mmの白色粗砂を少し含む B良好 C外.暗青灰5PB4/1 灰かぶり.灰白2.5Y8/2 内.灰白5Y7/1～浅黄2.5Y7/4～黄灰2.5Y4/1	杯部内面灰かぶり
69	"	"	灰原3区2層黒色	①(11.2) ②3.75 受部径(13.0)	外面2/3回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。杯部に焼成前穿孔	Aやや粗。0.5～2mmの白色粗砂をやや多く含む B良好 C外.暗青灰5PB5/1～暗青灰5PB4/1 内.暗青灰5PB4/1～暗紫灰5P4/1	
70	"	"	灰原3区2層黒色 灰原1区水道	①(13.0) 受部径(15.0)	杯部内面4/5不定方向ナデ、杯部外面灰かぶりのため調整不明、脚部外面回転ナデ	A粗。0.5～7mmの白色粗砂・礫、黒色粒子を多く含む B良好 C杯部外.明青灰5PB7/1～灰白7.5Y7/1～暗青灰5PB4/1 脚部外.青灰5PB6/1～暗青灰5PB4/1 内.明青灰5PB7/1	杯部外面灰かぶり

表3 野添遺跡第6次調査出土遺物観察表③

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量cm ※()は復元径 ①口径 ②器高 ③底径 ④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
71	須恵器	高杯	灰原3区2層黒色	①12.2	杯底部外面3/4回転ヘラケズリ後回転ナデ、 杯部内面1/3は不定方向ナデ、他は回転ナデ。 杯部外面体部と底部の境と脚部に各2条の沈線	A精良。1mm以下の白色粗砂を少し含む B良好 C外.青灰5PB5/1～暗青灰5PB3/1 灰かぶり.灰白5Y7/2 内.灰10Y6/1～暗青灰5PB3/1 脚内.灰白N7/～青灰5PB5/1	内外面灰かぶり 焼け歪む
72	"	"	灰原3区2層黒色	脚端径12.8	脚部内外面にしぼり痕。他は回転ナデ。 脚部外面に沈線2条	A精良。1mm以下の粗砂を少し含む B良好 C内外.暗灰N3/～浅黄5Y7/3	脚部外面灰かぶり
73	"	"	灰原3区2層黒色	脚端径(13.5)	回転ナデ。脚部外面に沈線2条	A精良。1mm以下の粗砂を少し含む B良好 C外.灰N4/～暗灰N3/ 内.灰10Y6/1	
74	"	"	灰原3区2層黒色	脚端径(16.2)	脚部外面上半カキメ、脚部内面にしぼり痕、 他は回転ナデ。脚部外面に沈線2条。 3方向か4方向に2段透かし	A精良。0.5～1mmの白色粗砂を少し含む Bやや不良 C内外.灰オリーブ5Y5/2～灰5Y5/1	
75	"	"	灰原3区ベルト際焼土層	脚端径9.6	脚部内外面にしぼり痕。他は回転ナデ。 脚部外面に沈線2条	A粗。2mm以下の白色粗砂を多く含む B良好 C外.青灰10B G6/1～暗灰N3/ 灰かぶり.灰白5Y7/2 内.灰N6/～暗灰N3/	脚部内面にヘラ記号
76	"	"	灰原1区水道	脚端径10.4	脚部内外面にしぼり痕。他は回転ナデ。 脚部外面に沈線2条	A精良。1～2mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む Bやや不良 C外.褐灰10YR6/1 内.灰黄褐10YR6/2	
77	"	"	灰原1区水道	脚端径(11.6)	外面にしぼり痕。他は回転ナデ。 脚部外面に沈線2条。	A精良。1～2mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C内外.灰白N7/ 灰かぶり.黒10YR2/1～褐灰10YR4/1	
78	"	"	灰原1区水道 灰原3区水道 灰原検出中	脚端径(14.8)	内面にしぼり痕。脚部外面はカキメ、 他は回転ナデ。脚部外面に沈線1条。	A精良。1mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.灰N5/～暗灰N3/ 内.灰白N7/～灰白N6/	
79	"	"	灰原検出中	脚端部径(10.0)	回転ナデ	Aやや粗。0.5mmの白色粗砂をやや多く含む Bやや不良 C内外.黄灰2.5Y6/1	
80	"	"	灰原縦断ベルト1層灰層	脚端部径(8.5)	杯部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	Aやや粗。1～3mmの白色粗砂・礫をやや多く含む B良好 C外.灰N4/ 内.灰白N7/	
81	"	皿	灰原3区2層黒色	①(15.9) ②1.95 ③(13.0)	底部外面回転ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～2mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む Bやや不良 C内外.灰白10YR7/1～N7/	
82	"	椀	灰原1区上方1層黒色	①(14.4)	体部外面下半回転ヘラケズリ、他は回転ナデ。 外面に沈線2条×1、3条×1	A精良。1～10mmの白色粗砂・礫を少し含む B良好 C外.暗灰N3/ 内.灰N5/	
83	"	"	灰原縦断ベルト1層灰層 灰原1区水道 灰原3区2層黒色 灰原4区1層黒色 灰原検出中	①11.4 ②7.5	底部外面回転ヘラケズリ、外面カキメ、 内面回転ナデ。外面沈線2条	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む Bやや不良 C外.灰5Y6/1 内.灰2.5Y7/1	底部外面にヘラ記号
84	"	"	灰原3区2層黒色 灰原検出中	①(14.3)	回転ナデ。体部外面に沈線2条×2	A精良。0.5mm以下の白色粗砂を少し含む B良好 C外.灰白N7/～暗灰N3/ 灰白5Y8/2 内.灰7.5Y6/1～暗青灰5PB4/1	
85	"	皿?	灰原3区水道	①(19.6)	回転ナデ	A粗。0.5～3mmの白色粗砂・礫、黒色粒子を多く 含む B良好 C外.青灰5PB6/1 内.灰N6/～5/	
86	"	縁	灰原1区上方1層黒色	①(13.5)	回転ナデ	A精良。1～2mmの白色粗砂を少し含む B良好 C外.暗灰N3/～灰N4/ 内.暗灰N3/	
87	"	"	灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区1層 灰原1区水道 灰原2区1層 灰原下方1層暗褐色	④10.0	頸部内外面しぼり痕、外面は体部上半カキメ、 体部中位連続刺突文・沈線2条、体部下半手持 ちヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1～2mmの白色粗砂を少し含む B良好 C内外.灰N4/～にぶい黄褐10YR5/3	
88	"	"	灰原3区2層黒色	①(13.3) ②16.7 ④9.9	頸部内外面カキメ、体部外面下半回転ヘラケズ リ、他は回転ナデ。頸部外面中位に沈線1条、 体部外面連続刺突文、沈線2条。体部中位に穿孔	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫を少し含む B不良 C外.灰10YR8/2～褐灰10YR6/1 内.浅黄10YR8/3	頸部外面ヘラ記号
89	"	"	灰原4区1層黒色	①(14.6)	回転ナデ	Aやや粗。0.5～1mm以下の白色粗砂、黒色粒子をや や多く含む B不良 C外.灰黄2.5Y7/2 内.浅黄2.5Y7/3	
90	"	瓶類	灰原1区下方1層暗褐色 灰原2区下方1層黒褐色	①(6.8)	外面沈線2条施した後回転ナデ、他は回転ナデ	A精良。1mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外.灰N5/ 灰かぶり.暗褐灰10G4/1、 緑黒10GY2/1	内外面灰かぶり
91	"	提瓶	灰原1区下方暗褐色 灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区1層 灰原1区水道	①(8.0)	口縁と頸部の境ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～4mmの白色粗砂・礫を少し含む B良好 C内外.灰白N7/～10YR7/1 灰かぶり.褐灰10YR7/1	灰かぶり
92	"	平瓶	灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区 灰原1区水道 灰原検出中	①7.2	外面はカキメ、口縁と体部の境はナデ、 他は回転ナデ	A精良。1mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む Bやや不良 C内外.褐灰10YR6/1～にぶい黄橙10YR7/1	頸部外面ヘラ記号
93	"	"	灰原1区下方1層暗褐色 灰原3区2層黒色 灰原4区1層黒色	④(19.2)	外面は体部中位カキメ、体部下半回転ヘラケ ズリ、他は回転ナデ。体部上半に突起状把手	Aやや粗。3mm以下の白色粗砂・礫、黒色粒子をや や多く含む B良好 C内外.オリブ灰2.5GY6/1～青灰5PB5/1	底部外面にヘラ記号
94	"	"	灰原1区上方1層黒色 灰原1区上方2層 灰原1区水道 灰原3区2層黒色 灰原3区防空壕	④(18.6)	外面は体部上半不定方向ナデ、体部下半回転 ヘラケズリ、内面回転ナデ	A精良。0.5～1mmの白色粗砂を少し含む B不良 C内外.灰白5Y7/1～浅黄5Y7/3～明黄褐10YR7/6	肩部に把手状突起の貼 付痕
95	"	"	灰原1区上方1層黒色 灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区水道 灰原2区下方1層黒褐色 灰原3区1層 灰原3区2層黒色 灰原3区3層東端 灰原3区4層 灰原3区東端 灰原縦断ベルト1層灰層	④(21.2)	外面は体部上半カキメ、体部下半～底部回転 ヘラケズリ、外面体部と底部の境縦格子目タ キ、他は回転ナデ	A精良。0.5～1mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む Bやや不良 C外.灰白5Y7/2・8/2～灰5Y5/1 内.灰白5Y7/2～灰5Y5/1	肩部に把手状突起の貼 付
96	"	"	灰原1区上方1層黒色 灰原1区水道 灰原2区上方 灰原3区2層黒色 灰原3区防空壕 灰原4区1層黒色 灰原縦断ベルト1層灰層	③14.0 ④19.4	外面は底部器表面摩滅のため調整不明、 体部下半回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1mmの白色粗砂を少し含む B不良 C外.灰白2.5Y8/2～黄灰2.5Y6/1～暗黄褐10YR7/6 内.灰白2.5Y8/1～暗黄褐10YR7/6	肩部に把手状突起の貼 付
97	"	"	灰原1区水道 灰原3区防空壕 灰原奥	①(6.1)	体部外面カキメ、他は回転ナデ	Aやや粗。1mmの白色粗砂、黒色粒子をやや多く含む Bやや不良 C外～口縁内面.灰7.5Y6/1～灰N5/ 内.灰白N7/～灰N6/	肩部に把手状突起の貼 付
98	"	提瓶	灰原2区下方1層黒褐色		把手ナデ、体部回転ナデ	A精良。0.5～2mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C内外.青灰5PB6/1	
99	"	蓋	灰原検出中		天井外面ヘラケズリ後カキメ、他は回転ナデ	A精良。0.5mm以下の白色粗砂を少し含む B良好 C外.灰10YR6/1 内.灰白N4/	

表4 野添遺跡第6次調査出土遺物観察表④

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量cm ※()は復元径 ①口径 ②器高 ③底径 ④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
100	須恵器	短頸 壺蓋	灰原1区水道 灰原3・4区間ベルト3層	①(7.8) ②2.95	外面3/4回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫、黒色粒子を少し含む Bやや不良 C内外.灰白2.5Y7/1～黄灰2.5Y6/1	
101	"	"	灰原3区2層黒色	①(9.6) ②3.0	外面1/2ヘラ切り後ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。0.5～1mmの白色粗砂、黒色粒子をやや多く含む B良好 C外.灰7.5Y6/1～暗青灰5PB3/1 内.灰N5/	天井外面にヘラ記号
102	"	壺	灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区下方暗褐色 灰原1区1層 灰原下方1層 灰原中段2層 灰原検出中	④(22.0)	体部外面回転ヘラケズリ後カキメ、 他は回転ナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫、黒色粒子を少し含む B良好 C内外.灰N6/～褐灰10YR6/1	
103	"	短頸 壺	灰原3区2層黒色	④(20.0)	外面は体部上半カキメ、体部中位平行タタキ後 カキメ、体部下半平行タタキ、他は回転ナデ。 体部内面下半に同心円当て具痕が残る	Aやや粗。0.5～3mmの白色粗砂・礫をやや多く含む B不良 C内外.灰黄2.5Y6/2	
104	"	"	灰原4区1層黒色 灰原1区水道	④(22.0)	外面は体部上半カキメ、体部下半格子目タタキ、 他は回転ナデ	A精良。1～6mmの白色粗砂・礫、黒色砂粒を少し含む B良好 C外.灰N7/～明緑灰10G7/1 内.灰N7/～オリーブ灰5GY5/1	
105	"	"	灰原3区2層黒色 灰原1区水道	①5.9 ④11.6	外面は体部中位カキメ、体部下半回転ヘラケズ リ、他は回転ナデ。体部外面中位に沈線2条	A精良。1～2mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外.灰オリーブ7.5Y6/2～灰7.5Y6/1 内.灰N5/～緑灰7.5GY6/1 灰かぶり.暗青灰10B4/1～灰N6/	
106	"	脚付 壺	灰原4区4層西端褐色	脚端部径(10.5)	外面杯部と脚部の境にカキメか? 他は回転ナデ、脚部外面に沈線2条	A精良。0.5～2mm以下の白色粗砂を少し含む B良好 C外.灰白N7/～灰N4/ 内.灰N4/	焼け歪む
107	"	甕	灰原1区上方1区黒色 灰原1区下方1層 灰原3区2層 灰原3区4層 灰原4区1層 縦断ベルト1層灰層	①(13.7) ②18.2 ④(19.8)	内外面を回転ヨコナデ後、外面に底部～胴部中 位に縦格子タタキ、内面に同心円当て具痕。外 面にタタキ後体部中位からカキメ。底部は施さ ない	A精良。1～2mmの白色粗砂をわずかに含む B良好 C外.灰10Y6/1～オリーブ灰10Y6/2～黒10Y2/1 内.灰7.5Y6/1・N5/～暗灰N3/	
108	"	脚付 壺	防空壕内 灰原1区1層 灰原1区下方1層 検出中	脚端部径12.5	脚部は杯部接合部まで回転ヨコナデ、杯部は外 面は縦格子タタキ、内面は同心円当て具によっ て形成。外面杯部中位から接合部のタタキ痕は 脚部接合による回転ヨコナデにより消されている	A精良。1～2mmの白色粗砂を含み、他は3mm程度の 白色砂礫を若干含む B良好 C外.灰N5/ 内.灰白N8/～明オリーブ灰2.5GY7/1	
109	"	甕	灰原1区1層暗褐色 灰原1区水道 灰原1区上方1層 灰原3区2層 灰原3区2層黒色 灰原3区3層東端 灰原3区水道	①(22.3) ④(45.6)	口縁部内外面回転ヨコナデ、内面屈曲部付近か ら口縁部接合のための指ナデ。体部外面は平行 タタキ、中位に一部カキメ。内面は同心円当て 具痕	A精良。4mm以下の白色礫を少量含む B良好 C外.灰白N7/～10YR7/1 内.灰N5/～暗緑灰10GY4/1 降灰.オリーブ黒5Y3/2	口頸部と胴部外面中位 以下に降灰が認められる
110	"	"	灰原1区1層暗褐色 灰原1区縦断ベルト1層灰 層	①(22.3)	体部外面は縦格子タタキ、内面は同心円当て具 の線を使い青海波状に残る。口縁部内外面回転 ヨコナデ、口縁部接合の回転ヨコナデが縦格子 タタキを切る	A精良。5mm以下の白色礫を少量含む B良好 C外.灰白N7/～暗灰N3/ 内.灰N5/ 降灰.暗オリーブ灰5GY3/1	口縁部内外面の一部に 降灰が認められる
111	"	"	灰原2区上方3層暗褐色混褐色 灰原2区下方1層 灰原3区2層黒色 検出中	①(46.4)	口縁部外面4位と中位に2条の沈線、その間に 連続斜線文。口縁部下に2本の沈線、他は回転 ヨコナデ、体部接合部はヨコナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.灰白5Y8/1 内.灰白7.5Y7/2～灰5Y5/1 口縁部内外.灰7.5Y4/1	口縁部内外面に焼け ムラ 外面にヘラ記号
112	"	"	灰原1区上方3層暗褐色混褐色 灰原1区上方1層黒色 灰原1区1層暗褐色 灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区水道	①(50.2)	カキメで形成後、口縁部部下と中位に2条の沈 線、その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ、 下位の体部接合部はヨコナデ	A精良。3mm以下の白色礫を含む B良好 C外.暗灰N3/ 内.暗灰N3/～灰N4/	
113	"	"	灰原1区上方灰原3層 灰原1区上方灰原1層黒色 灰原1区上方灰原1層暗褐色 灰原1区上方1層 灰原1区上方2層 灰原1区下方1層暗褐色	①(47.2)	体部外面は縦格子タタキ、内面は同心円当て具 痕。口縁部は下位を平行タタキ、上位から中位 をハケメで形成。上位と中位に2条の沈線、そ の間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ、下位の 体部接合部はヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を少量含む B良好 C外.灰白N7/ 内.暗灰N3/～暗オリーブ灰5GY3/1 降灰.暗オリーブ灰2.5GY3/1～5GY3/1	体部外面に降灰 層部に粘土紐。2mm以 下の白色粗砂をやや多 く含む。外.灰(10Y6/1) 内.灰(N5/)
114	"	"	灰原1区上方灰原3層暗褐 色混褐色 灰原1区上方灰原上層 灰原1区下方灰原1層暗褐色 灰原1区水道 灰原3区2層	①(56.3)	体部外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕。 口縁部はタタキとカキメの形成後、口縁部部下、 中位、中位やや下方に2条の沈線、その間に連 続斜線文。他は回転ヨコナデ、下位の体部接合 部はヨコナデ	A精良。4mm以下の白色礫をやや多く含む B良好 C外.暗緑灰10GY3/1～緑灰7.5GY5/1 内.緑灰7.5GY5/1、灰N5/	
115	"	"	灰原1区上方灰原3層暗褐 色混褐色 灰原1区1層暗褐色 検出中	①22.7	体部外面縦格子タタキ後カキメ、内面同心円当 て具痕。口縁部回転ヨコナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂を少量含む B不良 C外.灰白10YR7/1 内.灰白10YR8/1～8/2	
116	"	"	灰原1区上方灰原3層暗褐 色混褐色 灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区水道 灰原1区表探 灰原2区下方1層 灰原3区4層 灰原検出中	①22.5	体部外面は縦格子タタキ、内面は同心円当て具 痕。口縁部は回転ヨコナデ、口縁部形成によ る回転ヨコナデ	A精良。1～2mmの白色粗砂をやや多く含む Bやや不良 C外.灰5Y5/1～灰白5Y7/1 内.灰オリーブ5Y5/2	口縁部外面にヘラ記号
117	"	"	灰原1区上方灰原水道 灰原1区上方灰原3層暗褐 混褐色 灰原1区水道 灰原3区水道 灰原3区水道内	①(44.0)	体部外面カキメ調整後、口縁部部下に4条、中 位とやや下位に2条の沈線、その間に連続斜線 文。他は回転ヨコナデ。体部内面は同心円当て 具痕か?	A精良。3mm以下の白色礫をやや多く含む B良好 C内外.青灰5BG5/1～灰N5/	
118	"	"	灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区上方灰原1層黒色 灰原1区上方灰原2層灰褐色 灰原3区2層黒色 灰原3区2層	①(40.4)	口縁部外面カキメ後、上位と中位に2条の沈 線、その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ	A精良。4mm大の白色礫が多く含まれる B良好 C外.暗灰N3/ 内.灰10Y5/1	

表5 野添遺跡第6次調査出土遺物観察表⑤

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量cm ※()は復元径 ①口径 ②器高 ③底径 ④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
119	須恵器	甕	灰原1区上方1層黒色 灰原1区下方1層暗褐色 灰原1区下方1層 灰原2区上方1層 灰原2区下方1層 灰原3区2層黒色 灰原3区防空壕 灰原検出中 水道 灰原縦断ベルト1層灰層	①(53.0)	体部外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕。口縁部外面は口縁端部に1条、端部下、中位、やや下位に2条の沈線。その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ、体部接合部はナデ、一部指頭圧痕。	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.暗灰N3/～黒N2/～灰白5Y8/2 内.灰10Y4/1	口縁端部に一部自然釉 釉着 全体的に焼け至む
120	"	"	灰原1区水道		カキメ後、口縁端部下に2条、中位に1条の沈線、その間に連続斜線文。口縁端部から内面は回転ヨコナデ	A精良。1～3mmの白色粗砂を含む B良好 C外.灰N6/ 内.灰N4/	内外面に竅壁の一部?と 思われる付着物
121	"	"	灰原1区下方1層 灰原1区水道 灰原1区防空壕 灰原3区2層 水道	①(51.0)	口縁端部と外面上位に1条の沈線。上位の下から連続斜線文。他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.暗灰N3/～灰白N8/ 内.灰N5/	
122	"	"	灰原1区水道 灰原3区3層東端 灰原4区1層		口縁部外面端部に5条、中位に2条の沈線、その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ	A精良。粗砂はほとんど含まれない B良好 C外.灰N6/～暗灰N3/ 内.灰N6/～緑灰10GY6/1 降灰.暗オリーブ灰5GY3/1、淡黄2.5Y8/3	外面に降灰による釉着
123	"	"	灰原1区水道 灰原2区上方1層 灰原2区上方3層 灰原2区下方1層 灰原2区灰原1層黒色 灰原3区2層黒色 灰原4区1層	①(36.1)	体部外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕。口縁部はカキメ後、口縁端部に1条、端部直下と中位に3条の沈線。その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ	A精良。2mmの白色礫を若干含む。 他は、1mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.暗灰N3/～灰白5Y7/1～灰5Y6/1 内.灰白5Y7/1～灰5Y6/1～5Y4/1	口縁部内面に降灰
124	"	"	灰原1区水道		口縁部外面カキメ後、端部に1条と端部直下に2条の沈線、その下に連続斜線文。他は回転ヨコナデ	A精良。1～2mmの白色粗砂を含む B不良 C外.灰白5Y8/1 内.灰白2.5Y8/2	
125	"	"	灰原1区水道 灰原1区1層 灰原1区1層暗褐色 灰原1区上方灰原1層黒色 灰原1区中段1層褐色 灰原1区下方1層 灰原2区下方1層 灰原3区2層 灰原3区2層黒色 灰原検出中 表採	①48.7	体部外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕。口縁部はタタキ(擬格子?)形成後カキメ、口縁端部下に4条、中位と下位に2条の沈線、その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ	A精良。6mm以下の白色礫を少量含む B良好 C外.灰N6/ 内.灰N5/ 降灰.暗緑灰10GY3/1	内外面に一部降灰
126	"	"	灰原1区水道 灰原1区下方1層 灰原2区1層 検出中	①(47.7)	体部外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕。口縁部は上位、中位、やや下位に2条の沈線、その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ、体部接合部はヨコナデ、一部指頭圧痕。	A精良。1～2mmの白色粗砂を含む B良好 C外.暗灰N3/～灰5Y6/1 内.灰5Y6/1～オリーブ黒5Y3/1～灰白5Y7/1	
127	"	"	灰原1区水道 上方灰原1層黒色 灰原2区下方1層黒褐色	①(20.6)	体部外面は擬格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕。口縁部は口縁端部に1条の沈線、端部から内面は回転ヨコナデ、外面はカキメ	A精良。1～3mmの白色粗砂・礫をやや多く含む B良好 C外.黄灰2.5Y6/1 内.灰N5/	
128	"	"	灰原1区水道 灰原1区下方1層暗褐色 灰原2区下方1層 灰原3区2層 灰原3区2層黒色 灰原4区1層黒色	①20.4	体部外面は擬格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕。口縁端部に1条の沈線、他は回転ヨコナデ	A精良。3mm以下の白色礫を少量含む B良好 C内外.暗緑灰10G4/1～灰N5/	口縁部内面に接合痕
129	"	"	灰原1区水道 灰原1区上方1層 灰原1区上方灰原1層黒色 灰原4区上方1層	①(19.4)	体部外面は擬格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕後軽い回転ヨコナデ。口縁部外面にハケメ、他は回転ヨコナデ	A精良。3mm以下の白色礫を少量含む Bやや不良 C外.灰N6/～N4/ 内.暗緑灰7.5GY4/1～褐灰10YR5/1	
130	"	"	灰原1区水道 灰原1区下方1層暗褐色 灰原2区上方3層暗褐色混褐色 灰原3区1層黒灰色混褐色 灰原3区3層黒色 検出中	①(19.8)	体部外面は擬格子タタキ、口縁接合部から肩部にカキメ、内面は同心円当て具痕。口縁部外面は接合部付近にカキメ、他は回転ヨコナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂を含む Bやや不良 C外.灰黄2.5Y7/2～にぶい黄橙10YR7/3 内.灰黄褐10YR6/2～灰黄2.5Y7/2～浅黄2.5Y7/3	
131	"	"	灰原1区水道 灰原1区上方1層 灰原1区上方灰原1層黒色 灰原3区2層黒色 灰原3区2層 灰原3区水道 灰原3区防空壕	①21.5～22.5	体部外面は擬格子タタキ後カキメ、肩部付近は目の粗いヨコハケ(タタキ工具によるものか?)内面同心円当て具痕。口縁部回転ヨコナデ	A精良。4mm以下の白色礫、黒色粒子を少量含む B良好 C外.灰白10YR7/1～灰黄褐10YR6/2 内.灰N5/ 降灰.緑黒10GY2/1	口縁部外面(約半周)に へう記号 口縁部内外に降灰
132	"	"	灰原縦断ベルト1層灰層 灰原1区1層 灰原1・2区間縦断ベルト 灰原3区3層東端褐色 検出中	①(20.4)	体部外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕。口縁部外面は体部接合部付近にカキメ、口縁端部に1条の沈線。他は回転ヨコナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂を含む B不良 C外.灰白2.5Y8/1～2.5Y8/2 内.灰白2.5Y8/1～浅黄2.5Y7/3	口縁部外面にへう記号
133	"	"	灰原1・2区間縦断ベルト1層 灰原1区水道 灰原上方灰原1層黒色 灰原1区下方1層暗褐色 灰原2区上方3層 灰原2区下方1層 灰原3区2層 灰原検出中/灰原1層 灰原下方1層/灰原下方防空壕入口/水道	①(22.0) ④(43.7)	体部外面は擬格子タタキ後、最大径よりやや下半から体部接合部までカキメ。内面は同心円当て具痕。口縁端部に1条の沈線。他は回転ヨコナデ	A精良。1～3mmの白色礫をやや多く含む Bやや不良 C外.灰黄2.5Y7/2～黄灰2.5Y5/1 内.灰7.5Y4/1	
134	"	切削物	灰原3区水道	残存長8.9cm 厚さ約1.5cm	体部外面の擬格子タタキ後軽い回転ヨコナデ、内面は同心円当て具?	A精良。粗砂をほとんど含まない B不良 C内外.橙7.5YR7/6～6/6	甕の口縁部整形時の体 部切り落とし片

表6 野添遺跡第6次調査出土遺物観察表⑥

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量cm ※()は復元径 ①口径 ②器高 ③底径 ④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
135	須恵器	甕	灰原3区1層黒灰色混褐色 灰原1区上方1層 灰原3区水道 灰原3区2層黒色土 灰原3区2層 灰原3区3層東端	①(55.8)	体部外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕。口縁部は口縁端部から体部接合部までカキメの形成後、口縁端部と口縁端部下に1条、中位やや下位に2条の沈線。間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ、体部接合部はヨコナデ	A精良。1～3mmの白色礫をやや多く含む B良好 C外.灰白N7/～暗灰N3/～灰10Y6/1 内.暗灰N3/～灰N4/	
136	"	"	灰原3区1層 灰原3区2層 灰原3区防空壕	①(27.2)	口縁部外面にタタキ痕がわずかに確認できる。その後、回転ヨコナデ。口縁端部に1条沈線	A精良。2mm以下の白色粗砂をやや多く含む B良好 C外.灰N5/～紫灰5P6/1 内.灰10Y4/1～明紫灰5P7/1	口縁部外面にヘラ記号?
137	"	"	灰原3区1層黒灰色混褐色 灰原3区1層 灰原3区2層黒色土 灰原3区2層 灰原3区防空壕 灰原1区1層	①(22.8)	体部外面は縦格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕。口縁部外面はハケメ後回転ヨコナデ、1周廻らない沈線が1条、他は回転ヨコナデ。体部内面接合部付近には指頭圧痕	A精良。4mm以下の白色礫を少量含む Bやや不良 C内外.褐灰10YR4/1～暗緑灰10GY4/1	口縁部内面に接合痕
138	"	"	灰原3区1層黒灰色混褐色 灰原3区防空壕 灰原1区水道 上方灰原1層 検出中	①(21.8)	体部外面は縦格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕、口縁部内外面は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B不良 C内外.灰白2.5Y7/1～灰黄2.5Y7/2	口縁端部は形成後、接合部付近から剥がれ落ち、急遽、端部をナデ形成を行って補修している
139	"	"	灰原3区2層黒色 灰原3区2層 灰原1区1層 灰原1区1層暗褐色 灰原2区上方1層		体部外面は平行タタキ、内面は同心円当て具痕。口縁部外面はカキメ後、やや下位に2条の沈線、その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.灰オリーブ5Y5/2～灰白5Y7/1 内.灰オリーブ5Y5/2～灰5Y5/1	
140	"	"	灰原3区2層		口縁部外面上位、中位、やや下位に2条の沈線、その間に連続斜線文、下半はタタキ、他は回転ヨコナデ	A精良。3mm以下の白色礫をやや多く含む B良好 C外.灰N6/ 内.暗緑灰7.5GY4/1	
141	"	"	灰原3区2層黒色土 灰原3区1層東端 灰原3区防空壕 2層 4層	①(47.2)	体部外面縦格子タタキか?内面は同心円当て具痕。口縁部外面は端部と上位に1条、中位に2条の沈線、その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ、体部接合部付近はヨコナデ	A精良。3mm以下の白色礫をやや多く含む B良好 C内外.暗赤灰5R3/1～暗灰N3/	
142	"	"	灰原3区2層黒色		口縁部外面はカキメ、口縁端部から内面は回転ヨコナデ、端部に2条の沈線?上位に3条の沈線その下は連続斜線文	A精良。1～2mmの白色粗砂をやや多く含む Bやや不良 C外.灰5Y5/1～灰オリーブ5Y6/2 内.灰白5Y5/1	
143	"	"	灰原3区2層黒色土 灰原1区1層 灰原4区1層	①(21.0)	体部外面は縦格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕。口縁部外面はカキメ、他は回転ヨコナデ	A精良。2mmの白色粗砂を含む Bやや不良 C内外.赤灰2.5YR4/2	
144	"	"	灰原3区2層黒色		口縁部外面はカキメ、端部に2条、直下に2条、上位に1条、中位付近に3条?の沈線、その間に連続斜線文、他は回転ヨコナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂を含む Bやや不良 C外.灰7.5Y5/1 内.灰オリーブ5Y5/2	口縁端部に窯壁付着
145	"	"	灰原3区2層 灰原3区3層東端	①(20.0)	体部外面は縦格子タタキ、内面は同心円当て具痕。他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.灰白7.5Y7/1～灰7.5Y6/1 内.灰10Y4/1～7.5Y5/1	口縁部外面ヘラ記号?
146	"	"	灰原3区2層黒色		口縁部外面はカキメ、端部直下に2条の沈線その下に連続斜線文、端部はや強い回転ヨコナデ、他は回転ヨコナデ。内面の一部は板状工具による回転ヨコナデ?	A精良。1～2mmの白色粗砂を含む B良好 C内外.灰N6/	
147	"	"	灰原3区2層黒色土 灰原3区2層 灰原3区1層 灰原3区東端 4層 検出中	①(24.3)	体部外面は縦格子タタキ後、一部ナデ。体部接合部は回転ヨコナデ。内面は同心円当て具痕。口縁端部に1条の沈線、他は回転ヨコナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂を含む B良好 C灰5Y6/1～5/1 内.灰N4/	
148	"	"	灰原3区2層黒色	①(17.7)	体部外面は平行タタキ、口縁部接合付近は縦格子タタキ、内面は同心円当て具痕。他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む Bやや不良 C外.浅黄2.5Y7/3 内.灰黄褐2.5Y6/2～にぶい黄2.5Y6/3	体部外面にヘラ記号
149	"	"	検出中 1層 灰原3区2層		体部外面は縦格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕。口縁端部に1条の沈線、他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂含む B良好 C外.5Y5/1～N6/ 内.灰7.5Y4/1～N4/	
150	"	"	灰原3区2層黒色 灰原3区2層 灰原3区ベルト際焼土層 灰原1区上方灰原1層黒色	①(26.0)	体部外面は縦格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕。口縁部外面はタタキで形成後、内外面回転ヨコナデ	A精良。3mm以下の白色礫を少量含む B良好 C緑灰7.5GY6/1～青灰5BG5/1 内.灰N5/～緑灰10G5/1	口縁部外面にヘラ記号
151	"	横瓶	灰原3区2層黒色	①(15.0～15.1)	体部外面は縦格子タタキ、内面は同心円当て具痕。口縁端部に1条の沈線、他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む Bやや不良 C外.灰黄2.5Y7/2～にぶい黄褐10YR7/3 内.灰黄褐10YR5/2	口縁部外面にヘラ記号
152	"	甕	検出中 灰原4区東端 灰原4区東端褐色 灰原4区西端	①(19.0)	体部外面は縦格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕。端部に1条の沈線、他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む Bやや不良 C外.灰10Y5/1 内.灰白5Y7/1～灰5Y5/1	口縁部外面にヘラ記号
153	"	"	灰原4区1層黒色 灰原4区1層暗褐色 灰原1区水道 灰原2区上方灰原1層黒色 灰原2区上方3層暗褐色混褐 灰原2区下方1層黒褐色 灰原3区2層黒色 灰原3区防空壕	①22.0	体部外面は平行タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕。口縁部外面は回転ヨコナデ後カキメ、他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を少量含む Bやや不良 C外.黒褐7.5YR3/1～灰褐7.5YR4/2 内.灰褐5YR5/2～暗灰N3/	口縁部外面にヘラ記号
154	"	"	灰原4区1層黒色 灰原3区水道内	①(21.6)	体部外面は平行タタキ後カキメ?、内面は同心円当て具痕。口縁部外面はタタキ形成後、口縁部接合付近から口縁部内面まで回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.暗灰N3/～灰N6/ 内.灰N5/	
155	"	横瓶	灰原4区1層黒色 灰原1区下方1層	①10.6	体部外面は縦格子タタキ、口縁部接合付近は回転ヨコナデ、内面は同心円当て具痕。口縁部は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂をやや多く含む B良好 C外.灰10Y6/1～N6/ 内.灰N5/	口縁部外面にヘラ記号

表7 野添遺跡第6次調査出土遺物観察表⑦

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量cm ※()は復元径 ①口径 ②器高 ③底径 ④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
156	須恵器	甕	灰原4区4層西端褐色 灰原4区東端褐色	①(48.8)	カキメ後、口縁部外面は端部に1条、直下に3条、中位、下位に2条の沈線、その間に連続斜線文。他は回転ヨコナデ。体部外面は擬格子タタキ?内面は同心円当て具痕	A精良。5mm以下の白色礫をやや多く含む B良好 C外.黒N2/～暗赤灰5R3/1 内.灰赤7.5R2/4	
157	"	"	検出中		体部外面は擬格子タタキ後カキメと回転ヨコナデを交互に行う。内面は同心円当て具痕。他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.暗灰N3/～灰7.5Y5/1 内.灰N4/	
158	"	"	検出中	①(21.4)	体部外面は擬格子タタキ後カキメ、内面は同心円当て具痕。口縁部外面はタタキ後回転ヨコナデか?他は回転ヨコナデ	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B不良 C内外.灰白5Y8/1	全体に摩滅が進む
159	弥生土器	甕	灰原1区上方灰原1層黒色		口縁部内外面はナデ、端部は刻目か?	A粗。1mm以下の石英、長石を多く含む、角閃石、赤色礫(土器片?)を含む Bやや不良 C外.褐7.5YR4/5～黒褐7.5YR3/1 内.褐7.5YR6/6～黒褐7.5YR3/1	口縁端部から内面は摩滅が進む
160	須恵器	杯蓋	灰原3区防空壕	①(12.9) ②3.6	外面3/5回転ヘラケズリ、内面2/5不定方向ナデ、他は回転ナデ	A粗。3mm以下の白色粗砂・礫を多く含む Bやや不良 C外.灰白7.5Y8/1～N7/ 内.明青灰5PB7/1	
161	"	"	灰原3区防空壕	①13.6 ②4.7	外面1/2回転ヘラケズリ、内面1/3不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。0.5mm以下の白色粗砂を少し含む B不良 C外.褐5YR7/6 内.浅黄褐10YR8/3～褐5YR7/6	
162	"	高杯	灰原3区防空壕	脚端径9.9	脚部内外面にしぼり痕、他は回転ナデ。脚部外面に沈線2条	A精良。1mm以下の白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外.灰N5/ 灰かぶり.灰白N7/ 内.青灰5PB6/1	
163	"	碗	灰原3区防空壕	①(14.7) ②8.8	外面体部下～底部回転ヘラケズリ、底部外面摩滅のため調整不明、底部内面不定方向ナデ、他は回転ナデ	Aやや粗。3mm以下の白色粗砂・礫をやや多く含む B不良 C内外.褐5YR6/6 底部内面.淡黄2.5Y8/3～黄灰2.5Y4/1	外面ヘラ記号 底部内面生焼け
164	"	高杯蓋	灰原1区上方東SP	つまみ径3.4 つまみ高1.7	内面不定方向ナデ、他は回転ナデ	A精良。1～2mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む Bやや不良 C外.明オリブ灰5GY7/1～灰白N7/ 内.灰白N7/	
165	"	短頸壺	灰原1区上方東SP	①(5.7) ②(6.65) ④(10.8)	外面は肩部～体部中位カキメ、体部下手持ちヘラケズリ、他は回転ナデ。体部外面中位や上に沈線1条	A精良。1～2mmの白色粗砂、黒色粒子を少し含む B良好 C外.褐灰10Y5/1～4/1 内.褐灰10YR4/1～灰N4/ 灰かぶり.黒色N2/～暗灰N3/	頸部下に蓋輪着
166	土師器	甕	表探	①(11.2)	内外面摩滅のため調整不明	A粗。1～3mmの石英、長石を多く含む B良好 C外.褐7.5YR7/6～褐5YR7/6 内.灰白10YR8/2～浅黄褐10YR8/4	
167	須恵器	甕	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂を少量含む B良好 C外.暗灰N3/ 内.灰N5/	破片
168	"	"	灰原2区上方1層		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C内外面.灰N4/	破片
169	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.暗青灰10BG4/1 内.青灰5B5/1	破片
170	"	"	灰原2区下方1層		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂を少量含む B良好 C内外.暗灰N3/	破片
171	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.灰白N7/ 内.暗青灰5PB4/1～暗紫灰5P4/1	破片
172	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1～2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C 内外.灰N4/	破片
173	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.暗青灰5B4/1 内.青灰5B5/1	破片
174	"	"	灰原2区1層		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1～2mmの白色粗砂を少量含む B良好 C外.暗灰N3/～灰N6/ 内.灰N4/	破片
175	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂をやや多く含む Bやや不良 C外.灰10Y6/1 内.灰5Y6/1	破片
176	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂を少量含む B不良 C内外面.浅黄2.5Y7/3	破片
177	"	"	灰原1区上方 灰原1区下方1層		外面は擬格子タタキ後、カキメ。内面は同心円当て具痕	A精良。1～2mm以下の白色粗砂を含む B良好 C外.暗灰N3/ 内.灰N4/	破片
178	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂を含む B精良 C内外.N5/	破片
179	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂を少量含む Bやや不良 C外.灰黄褐10YR6/2～褐灰10YR4/1 内.褐灰7.5Y6/2	破片
180	"	"	灰原2区1層		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂を含む Bやや不良 C外.明褐灰7.5YR7/2 内.にぶい褐7.5YR6/4	破片
181	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂を少量含む B良好 C外.暗灰N3/ 内.灰N5/	破片
182	"	"	灰原1区水道		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂、3mmの白色礫を少量含む B良好 C内外面.暗青灰5PB3/1	破片
183	"	"	灰原1区1層		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂、3mmの白色礫を少量含む B良好 C外.暗灰N3/ 内.灰N4/	破片
184	"	"	灰原4区1層黒色		外面は擬格子タタキ、内面は同心円当て具痕	A精良。1mm以下の白色粗砂を少量含む B良好 C外.黒10Y2/1 内.黄灰2.5Y5/1	破片

表8 野添遺跡第8次調査出土遺物観察表

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量cm ※()は復元径 ①口径 ②器高 ③底径 ④最大径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調	備考
185	須恵器	高杯	SX01 左区 SX01 左区1層褐色 SX01 付近検出	①(8.75) ②9.2 ③6.4	杯部形成後底部外面カキメ。脚部接合後脚部上半にカキメ。杯体部外面と脚部外面に2条沈線。脚部内面にシボリ痕あり。他は回転ヨコナデ	A精良。1mm以下の白色粗砂を少量含む B良好 C外.灰色N5/～6/、灰白色N7/ 内.灰色N6/～5/	ヘラ記号あり。窯壁屑 釉着。杯部内面～脚部 外面に降灰。脚部に6本の透かし状の切り込み
186	"	甕	SX01 左区	①23.6 ②49.2 ④44.1	胴部外面擬格子目タタキ、上位はタタキ後カキメ、内面同心円当て具痕、口縁部接合後回転ヨコナデ	Aやや粗。3mm以下の白色礫、黒色粒子を含む B不良 C内外.灰白色5Y7/1～浅黄色5Y7/3	
187	"	"	SX01 右区 SX01 付近検出	①(42.0)	内外面ヨコナデ、頸部接合付近内外面に指頭圧痕と外面にカキメ状らしき痕跡あり。外口縁部連続斜線文を施し、その上端に2条、下端に2条の沈線が巡る	A精良。0.5～2mmの白色粗砂を少量含む B良好 C外.暗灰色N6/、内.灰白色N7/	

Ⅲ．ま と め

1．野添6・8次調査周辺窯跡の分布と支群設定について

以上のように、野添6・8次調査ではⅣ期に位置付けられる灰原と土坑が確認された。両調査地は丘陵鞍部を挟んで指呼の間に位置しているが、削平の度合いが大きく、残念ながら旧状を復元するにいたらない。したがって、本来の遺構の数や規模を明らかにすることはできないが、旧地形より見た窯跡の分布について、野添6・8次調査地を中心に現時点での認識を明らかにしておきたい。

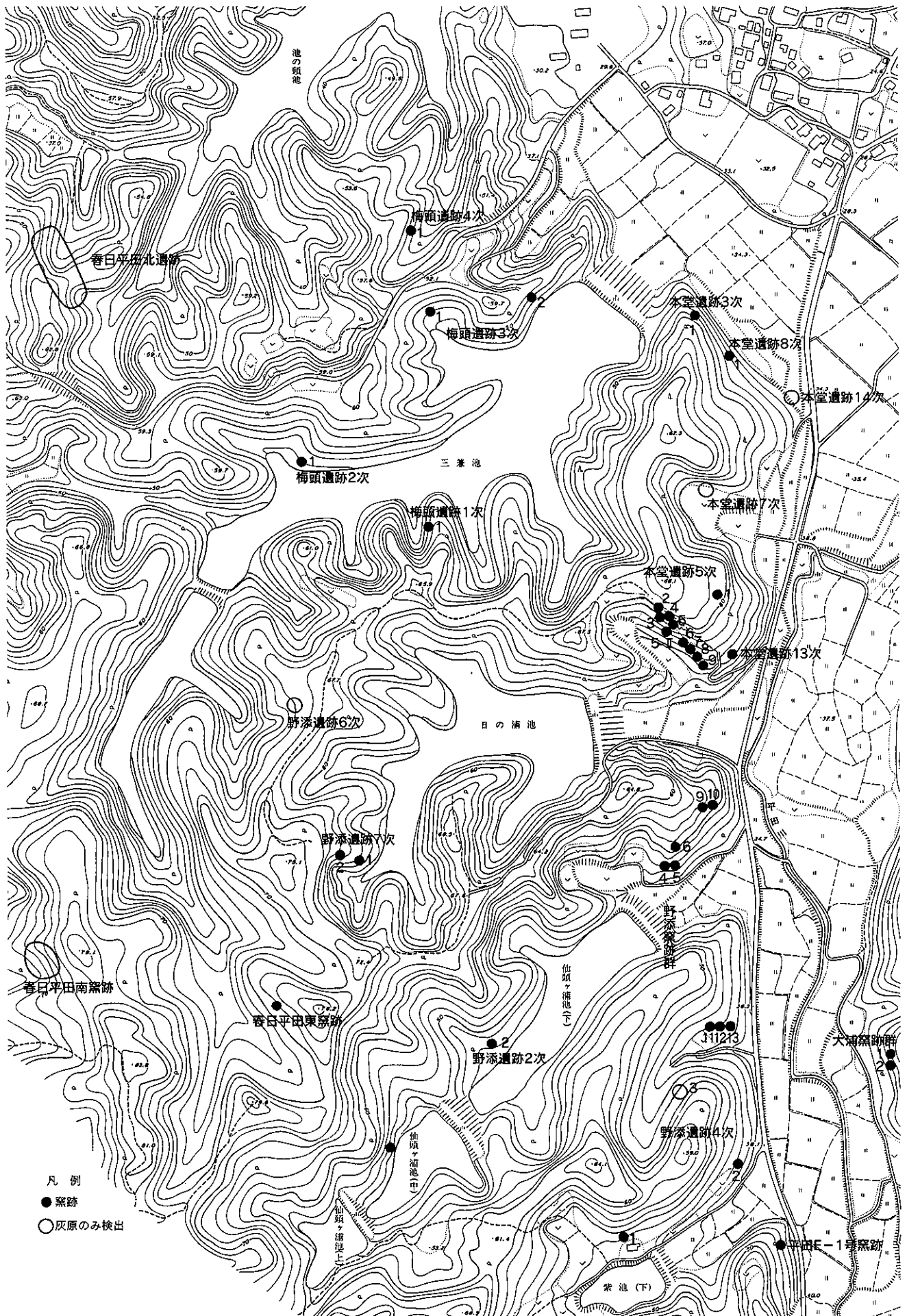
上大利では北・南に分かれて区画整理事業が進行しており、現時点での窯跡の分布を表すと第30図のようになる。分布図の基としたのは、1948年に米軍が撮影した航空写真より起こした地形図である。ここには江戸時代後期から明治時代前半にかけて開鑿された三兼池・日ノ浦池・仙道ヶ浦池がみえているため、この地形図が正確に古代の状況を反映しているとは言えない部分もあるが、ある程度の様子は知ることができよう。

これを見ると、区画整理事業地と周辺は樹枝状に枝分かれした丘陵が発達している。この丘陵は花崗岩を基盤としており、本堂遺跡3次調査地北側の水田下や丘陵斜面の一部ではAso-4火砕流堆積物が認められる。深く大きな谷部は入口が築堤され、白木原・上大利・春日村の水田を潤す溜池として利用されており、北から池の頭池・三兼池・日ノ浦池・仙道ヶ浦池が見える。池下の地形については、おそらく周辺の丘陵斜面から下った狭い谷であったのであろう。

このように主要な谷部は池として利用されていたが、丘陵の裾部から尾根部にかけては1948年当時の生活道路およびさらに細い里道の存在が見受けられる。生活道路のうち、主要なものは平田川に一部並行して南北方向に通じる道である。道の北側は上大利の集落に通じ、南は小水城を抜け、牛頸・向佐野へ通じている。事業地はこの道の西側にあたるが、地形図からは道へ向かって丘陵がのびていることが分かる。この丘陵先端部にはいずれも窯跡の存在が認められ、これらは比較的大きな道を中心に分布することから、窯への焼成品の搬入や製品の搬出にはこの道を使用した可能性が高い。

一方野添6～8次調査地は日ノ浦池の西側の丘陵上に位置し、先の道路からすると丘陵の奥へ入り込んだ所にあたる。位置的には、6次調査地は三兼池に面した斜面にあり、7・8次調査地は日ノ浦池に面した斜面にあたることから、それぞれの窯への移動は別のルートをたどったとも考えられる。しかし旧地形図を見ると、野添6～8次調査地へ向かって本堂遺跡5次調査地より丘陵尾根部を通るようにのびる里道が存在していることが分かる。野添6～8次調査地間は丘陵尾根部を挟んで直線距離で約150mと至近に位置しており、窯間の移動にあたっては、谷部を移動するよりも尾根部を横断した方が便がよい。また焼成品の搬入や製品の搬出にあたっては、現在溜池となるような湿潤な谷部を通行するより、高燥な尾根部を通行した方が容易な場合もあったと考えられる。

窯跡の分布を考える際には、谷部を中心としたまとまりを想定する場合と尾根線を中心としたまとまりを想定する場合がある。窯跡の分布には、工人が窯へいたる移動経路と、操業される窯場の移転にともなう窯の移動の両者が反映されているものと考えられる。上述のように、上大利地区の窯跡の分布を考えると、南北にのびる大きな谷に面した窯は谷を中心に、丘陵の入り組んだ所に位



第30図 上大利区画整理事業地周辺窟跡分布図 (1/5000)

置する窯は尾根を中心に考えることができよう。これは工人が窯へいたる移動経路の想定であるが、これに時期的変遷を加えていくことで窯の移動の復元に近づくことができる。これらに加えてさらに遺物の技法的特徴の検討を加えると当時の同一工人集団のまとまりを表すことも可能であり、より実態に近い支群設定が可能となる。

これまでの牛頸窯跡群の研究において、初めに支群設定を試みられたのは上野精志氏である。氏は1977年当時の窯跡の分布から、春日市内一帯の春日支群・太宰府寄りで平田川両岸の上大利支群・牛頸川両岸の牛頸川支群・平野川両岸の平野川支群・太宰府市大佐野を中心とする大佐野支群の5つに大別し、さらに平野川支群を谷奥深い上地区・中流域の中地区・牛頸に合流する下地区に細分されている（註1）。これは河川を中心とした地形区分を基に設定されたもので、理解しやすいものであった。

これに対し西村康氏は、小田編年Ⅲ～Ⅴ期にかけての窯のつながりと地形より「牛頸川の谷では大牟田池・惣利・春日平田の窯をあわせた群、牛頸平田・東浦・中通・ハゼムシ・城ノ山・原・井手をあわせた群、平野川ぞいの畑ヶ坂・胴ノ元・月の浦・小田浦をあわせた群、この谷の北の谷に分布する浦ノ原・後田をあわせた群、野添・大浦の谷ではこの2窯跡群に大浦・筑前平田・上平田を加えた群、御笠川をのぞむ丘陵では神ノ前・尊田・長浦・向佐野・宮ノ本をあわせた群、そして平野川谷奥の大谷・石坂をあわせた群、牛頸川谷奥の道の下・長者ヶ原・笹原・足洗川をあわせた群」の8つの支群設定をおこなわれた（註2）。さらに「平野川谷奥と牛頸川谷奥に分布する2群の年代は新しく、奈良時代になってから築かれた群」と奈良時代になって新たに操業を開始する群があることを指摘されている。

また岡田裕之氏は「ある範囲に複数の窯が同時あるいは連綿と営まれる場合、それを窯群という一つの単位として捉え、その一つのまとまりをもって窯群単位と呼ぶ」とされて、「自然地形による区分を前提」として野添・惣利・小田浦・浦ノ原・中通・牛頸ダム地区窯群を具体例として挙げられている（註3）。この区分は上野・西村両氏の支群設定より細かな設定であり、どちらかというところと小字ごとの設定に近い。氏によれば、各群における窯の時期的な検討の結果、窯が各窯群内で連綿と造られており、これを各群内で累代的に操業をおこなっている状況を看取できることから、「牛頸窯跡群は成立当初より、各製作者集団にある一定の範囲の土地が割り当てられ、その範囲内で築窯→使用→廃棄というサイクルがくり返された」とされ、各窯群の実体は「須恵器製作集団の一つの単位として捉えられる可能性が高い」とされている。

これに対し、筆者は上大利南土地区画整理事業地内で調査した野添4次2号窯跡出土軒丸瓦と神ノ前2号窯跡出土瓦との比較を基にして、神ノ前2号窯跡が上大利地区と同じ工房に含まれる可能性を明らかにした（註4）。事業地周辺は上野氏分類の上大利支群にあたるが、氏の設定された上大利支群よりやや広い範囲が想定される。この範囲に含まれる窯跡の時期的な関係を考えると、事業地内の調査は未整理の現場が多いが、同時期の窯跡が複数箇所を確認されている。このことは上野氏分類の上大利支群において複数の工人集団（複数工房）が操業をおこなっている場合と、同一工人集団（同一工房）から複数操業単位が派生・展開していた場合の両方が考えられる。基本的には一支群の表す範囲とは同一工人集団（同一工房）が築窯・操業した範囲と考えているが、先に上

大利区画整理事業地内で明らかにした窯跡の分布と出土瓦から考えると、上大利周辺は同一工人集団（同一工房）の存在が想定され、工人集団内には複数の作業単位が存在していた可能性が高い。今後の課題としては、事業地内の整理を進め遺構・遺物の検討から上野氏の設定された上大利支群の範囲の再設定をおこない、支群内における窯の変遷を明らかにしたい。その上で、牛頸窯跡群の支群設定についても再考を進める必要があると考えている。

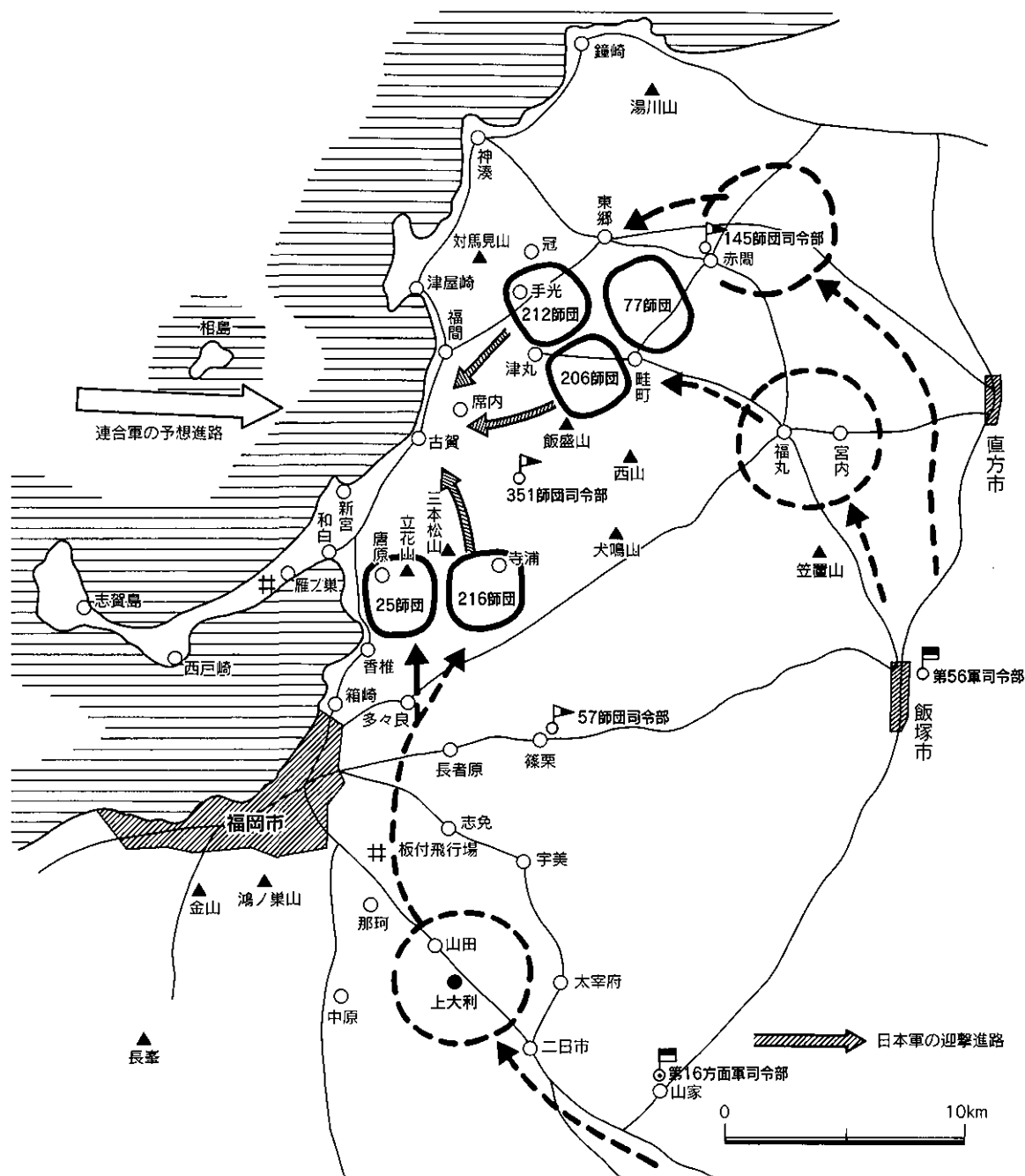
2. 野添遺跡6次調査検出の洞窟壕について

6次調査で確認された地下式の横穴を洞窟壕としたが、これは地元の人から昭和20年当時上大利から南側の丘陵地に陸軍が駐屯し、本土決戦に備えて陣地構築をしていたと聞いたことから遺構の性格を推測したものである。古代の須恵器窯跡の灰原を切り込んでおり、床面から検出された構築材があまりにも生々しいため、調査当時からそうように考えてきた。ただし、昭和20年当時の出土遺物はまったくなく年代を特定する根拠はない。このため、遺構の性格・年代について不明とするのが穏当かもしれないが、山腹に極めて大規模な横穴を掘ること、床面に構築材を伴い地下式トンネルを支える柱をとまなうこと、地元の人からの証言どおり構築材に松が使われていたこと、民間レベルでこうした構造物を山中に構築する必要性が考えられないことから、当該遺構は陸軍が本土決戦むけに構築したものと考えておく。

愛知県の事例では、伊藤厚史氏により豊橋市福田遺跡において同様の平面形をもつ遺構が紹介されている（註5）。これは福田型とされ、弾薬や食料の格納庫であったとされている。上大利区画整理事業地内では、本遺跡の他に本堂遺跡7次調査地においても同様の横穴が確認されており、あるいは同様の性格をもつものかもしれない。

また、区画整理地内の試掘調査では、丘陵の斜面を掘り込んだ時期・性格不明の土坑や溝状遺構が多数確認できた。出土遺物がなく、試掘調査により表土を除去したのみで発掘調査をおこなうことはできなかったが、これらは表土を取り去り、丘陵斜面を大きく掘り込んだのは明確であった。『大野城市史 下巻』によれば、昭和20年当時大野城市内（当時大野村）には第57師団指揮下にあった歩兵第117連隊、野砲兵第57連隊が上大利から牛頸にかけて配備され、雉ヶ尾には独立照空第21大隊、上大利・平田の地域には戦車92部隊が配備され、本土決戦への準備が着々と進められている（註6）。北部九州における本土決戦準備は第31図に示したとおり、連合軍が福岡海岸周辺に上陸するとの作戦計画に基づくものであった。区画整理地内で検出された時期・性格不明の土坑や溝状遺構も、あるいはこうした作戦計画に基づく陣地構築により掘られた可能性もある。

幸いにして昭和20年8月15日に終戦となり、本土決戦がおこなわれることはなかった。大野城市内はもとより福岡平野周辺でおこなわれた本土決戦準備の陣地構築の跡は詳らかではないが、6次調査ではその一端を垣間見ることができた。戦争遺跡は近年注目されることの多い分野であるが、主戦場とならなかった地域では関心は低く、調査も偶然対象地に含まれていたものについて認識される程度である。しかし、その成果が地域の歴史をより明確にすることができることは既に指摘されていること（註7）であり、文化財行政に携わり、埋蔵文化財の調査を主とする自分自身にとって、地域の歴史にとって重要なものが何であるのか再認識させられるものであった。（石木）



第31図 福岡会戦構想概見図

(戦史叢書『本土決戦準備(2)』防衛庁防衛研究所図書館蔵をトレース、一部改変)
(大野城市歴史資料展示室解説シート歴史No.1「本土決戦」より転載)

註1 大野城市教育委員会1977『大野城市の文化財』第9集

上野精志1993「Ⅱ. 位置と環境」『牛頸小田浦遺跡群』大野城市文化財調査報告書第40集

註2 西村康1983「陶邑・猿投・牛頸」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集

註3 岡田裕之2003「北部九州における須恵器生産の動向」『古文化談叢』第49集 九州古文化研究会

註4 石木秀啓2005「Ⅳ. まとめ」『牛頸野添遺跡群Ⅱ』大野城市文化財調査報告書第66集

註5 伊藤厚史1998「愛知県東部における本土決戦準備(2)」『三河考古』第11号

註6 赤司岩雄2004「第5編近代 第10章第2節本土防衛軍と大野村」『大野城市史 下巻』

註7 戦争遺跡保存全国ネットワーク編1999『戦争遺跡は語る』かもがわブックレット128

圖 版

(1) 6次灰原横断面
(B-B'面)
(南西から)



(2) 6次灰原縦断面上方
(A-A'面)
(南から)



(3) 6次灰原縦断面下方
(A-A'面)
(南から)

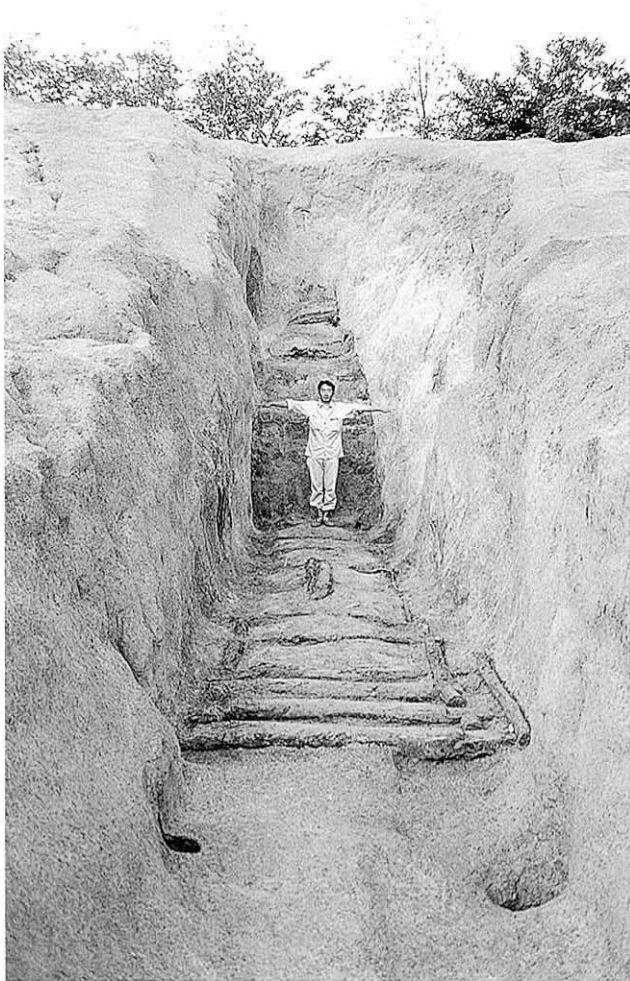




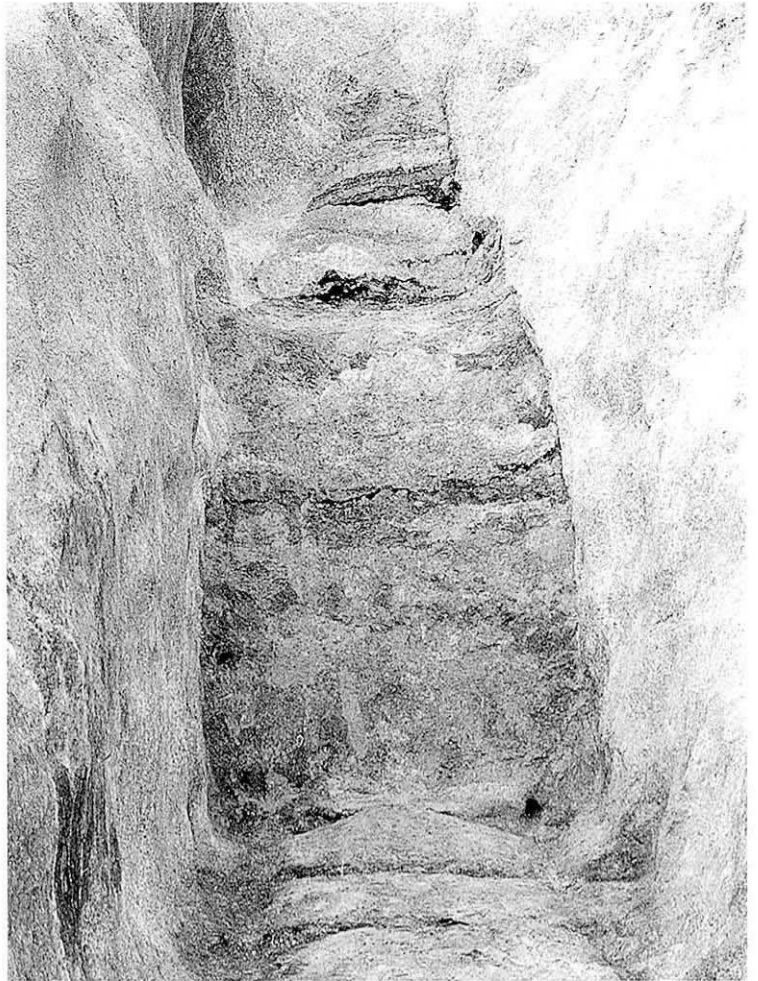
(1) 6次洞窟塚上土層① (南東から)



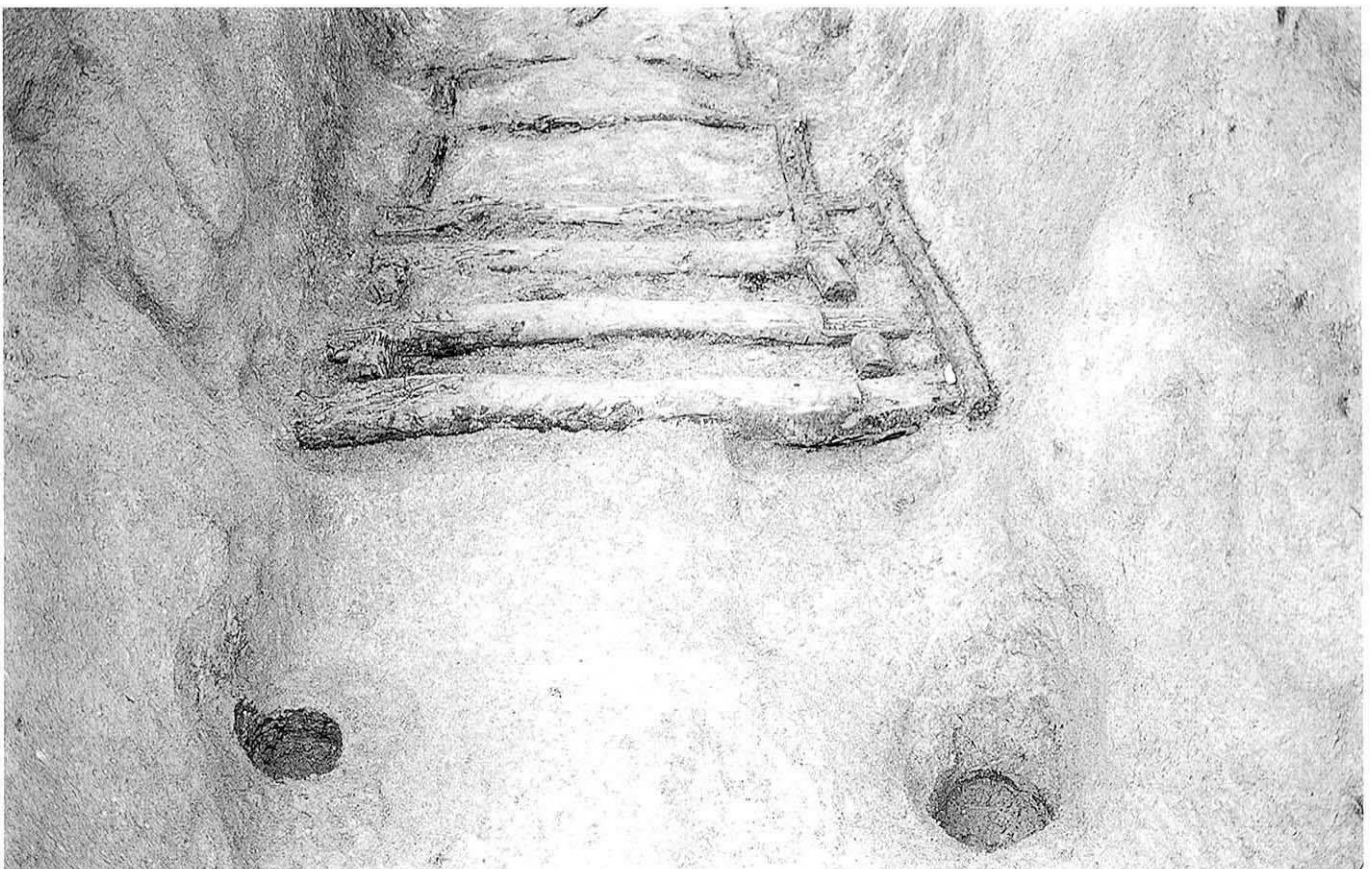
(2) 6次洞窟塚上土層② (南東から)



(1) 6次洞窟塚全景（南西から）



(2) 6次洞窟塚横断部土層（南西から）



(3) 6次洞窟塚井桁状構築材検出状況（南西から）



(1) 8次調査地全景（北東から）



(2) 8次SX01全景（南から）



(1) 8次SX01遺物出土状況（南から）



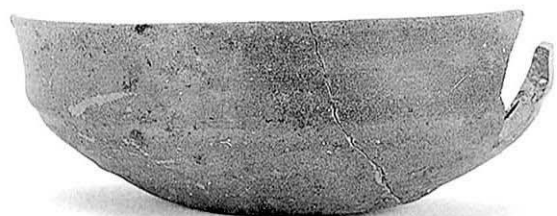
(2) 8次SX01土層（南から）



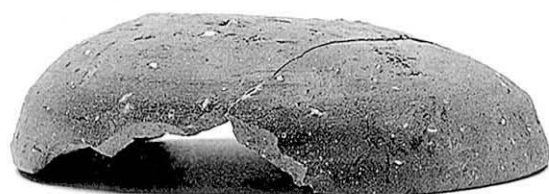
2



21



4



23



6



29



14



30



18



31



20



33



34



46



35



50



39



51



42



55



43



45



56



66



72



67



73



71



76



75



80



83



107



88



108



96



113



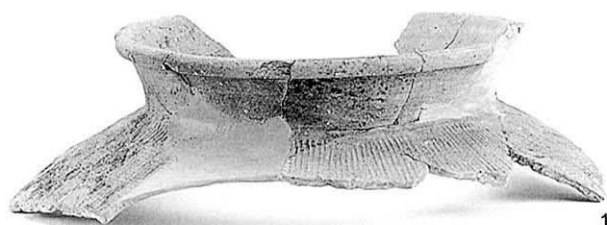
100



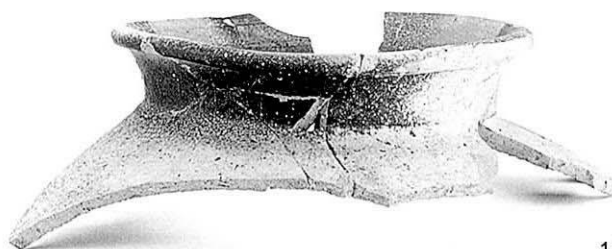
105



115



116



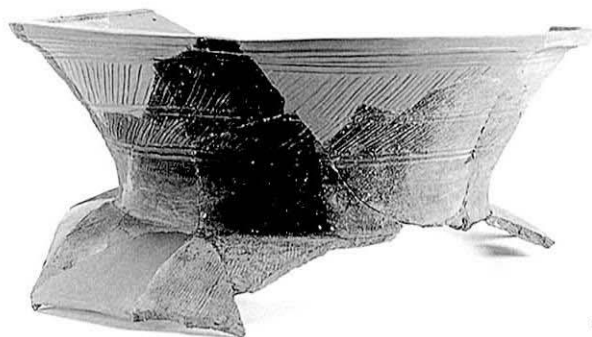
131



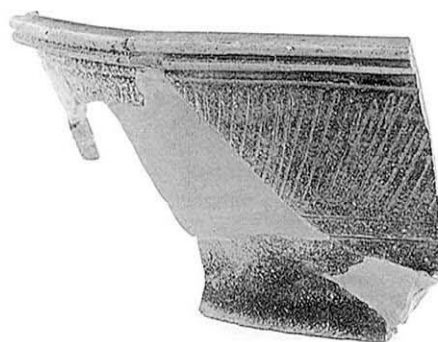
119



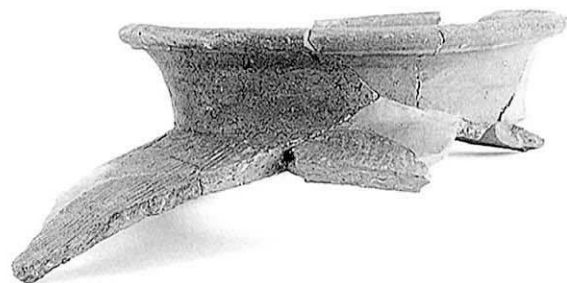
133



125



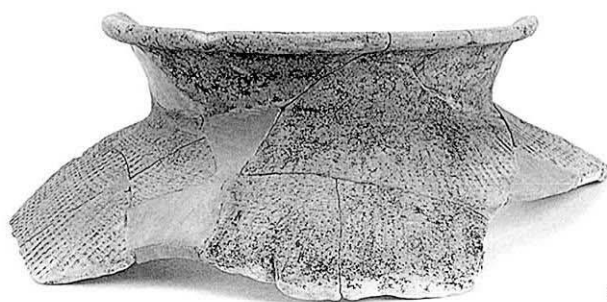
135



128



151



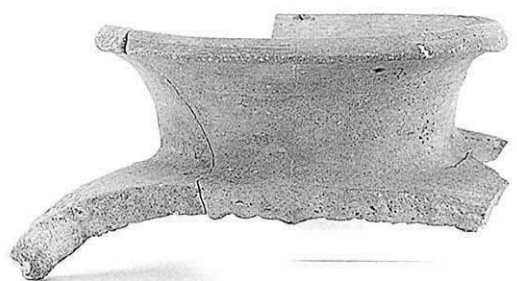
130



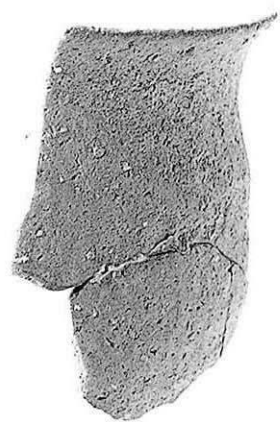
134外



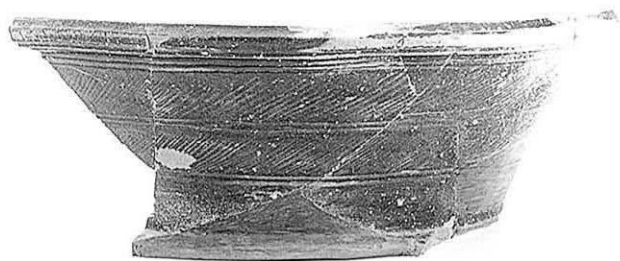
134内



155



166



156



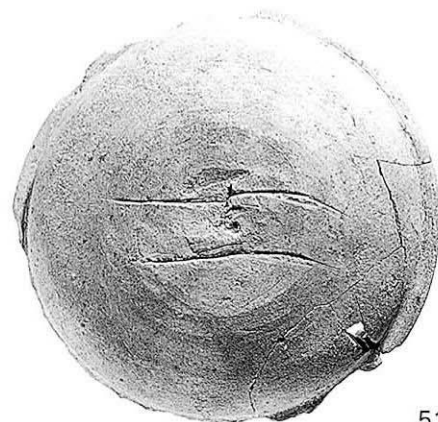
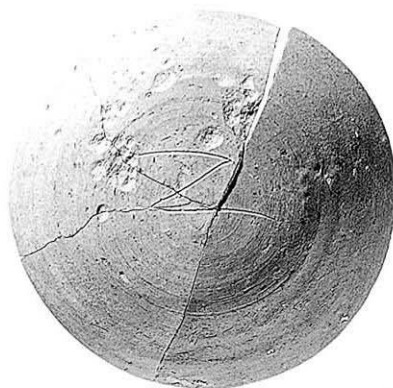
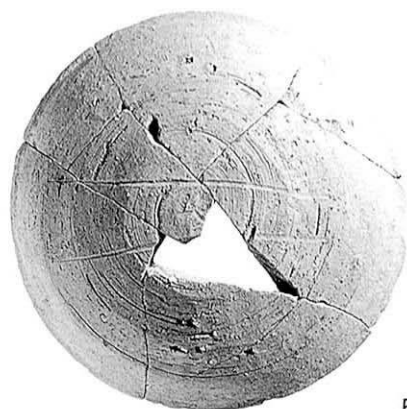
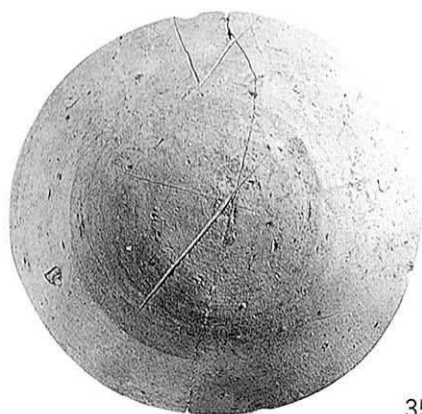
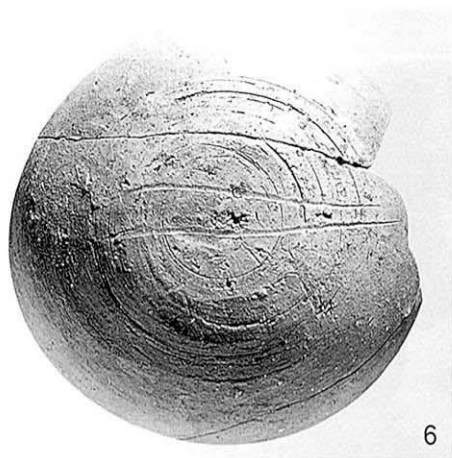
161



162

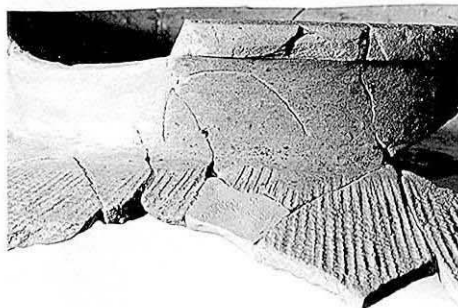


163





56



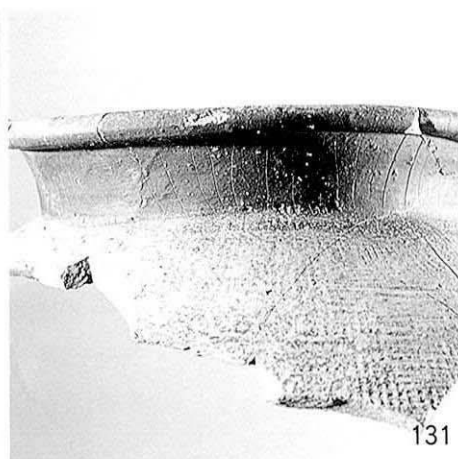
116



116



75



131



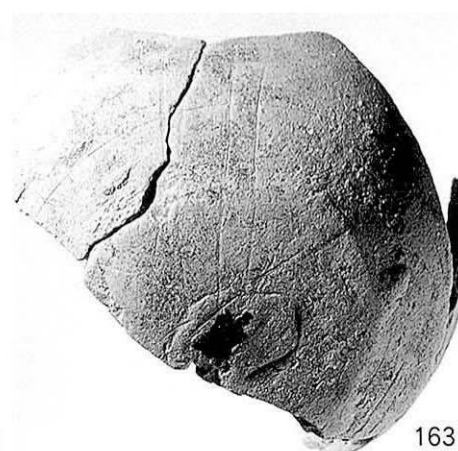
83



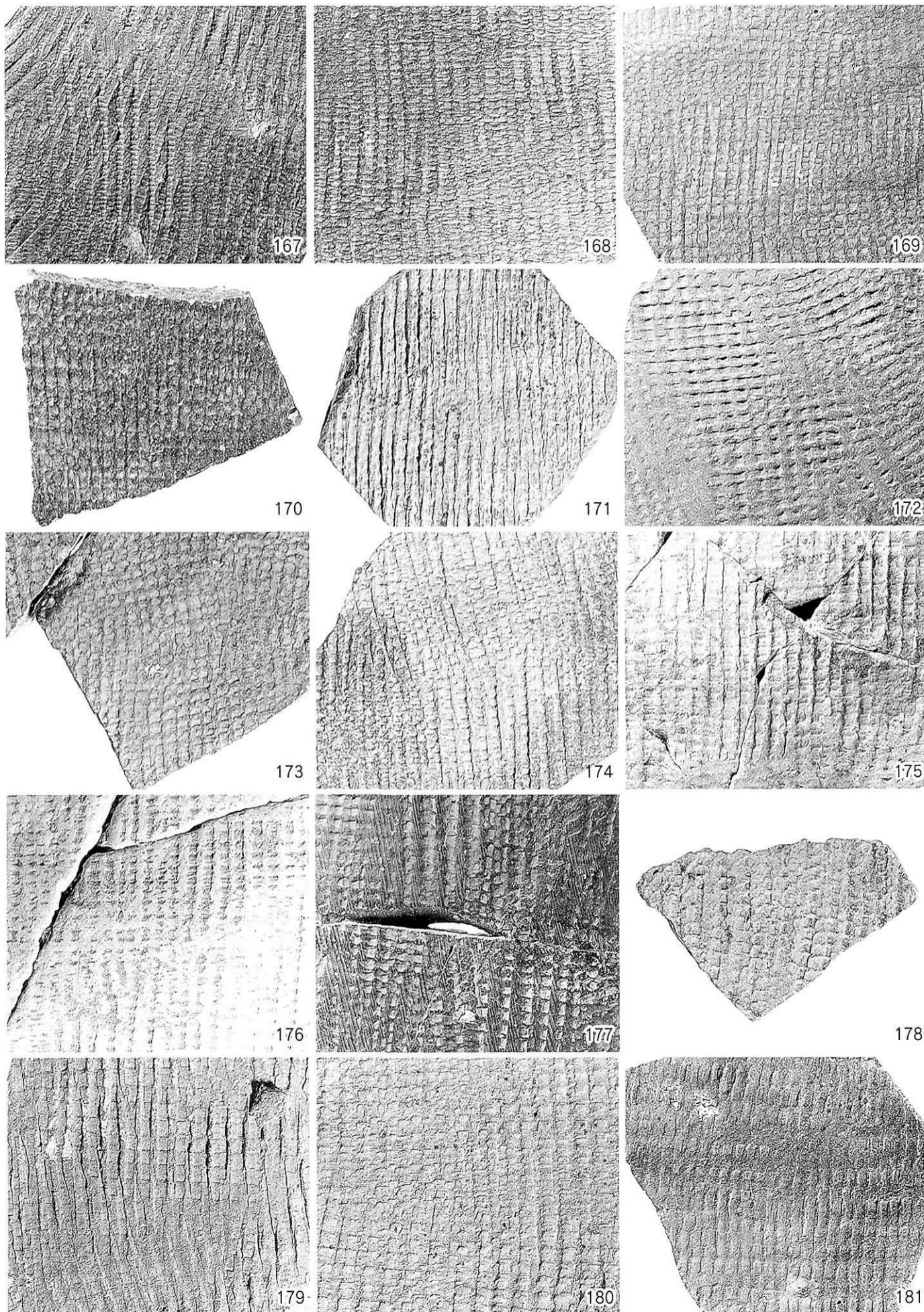
155



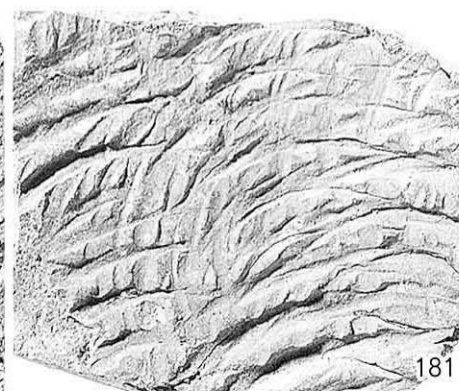
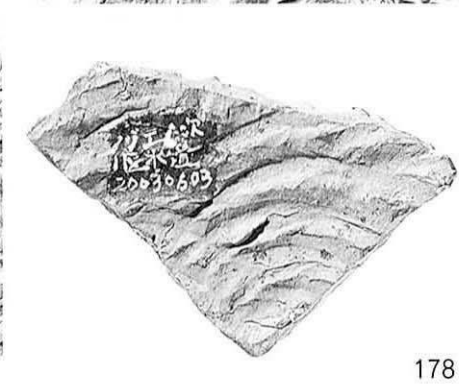
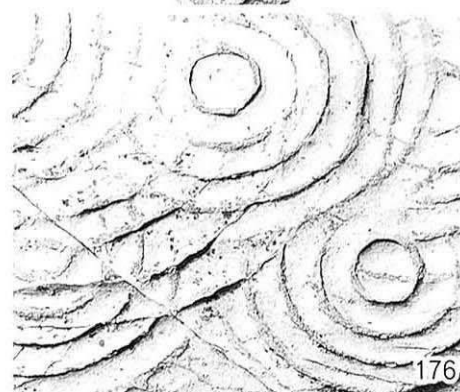
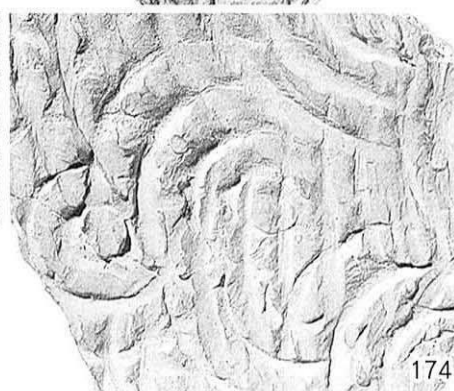
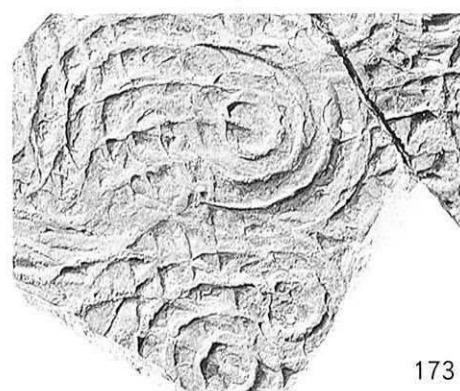
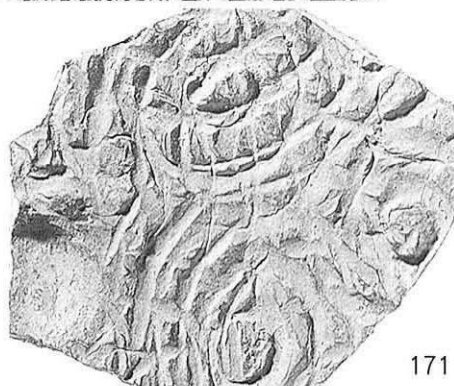
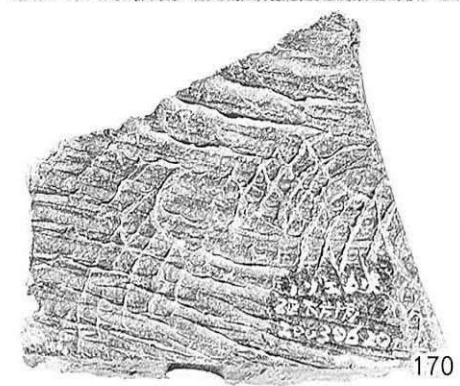
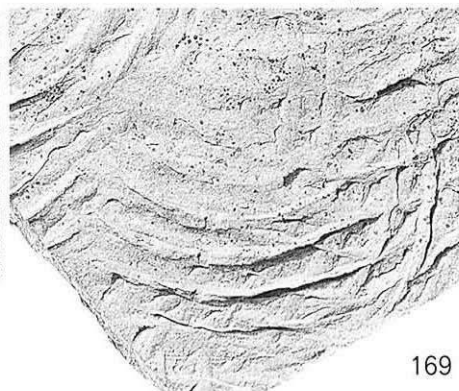
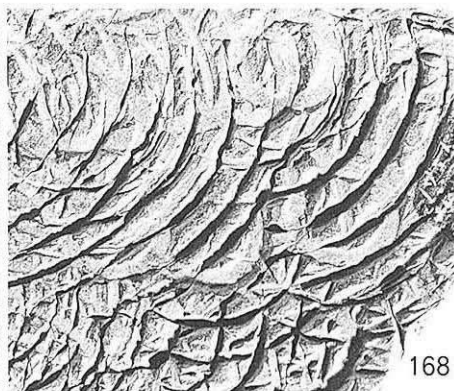
88

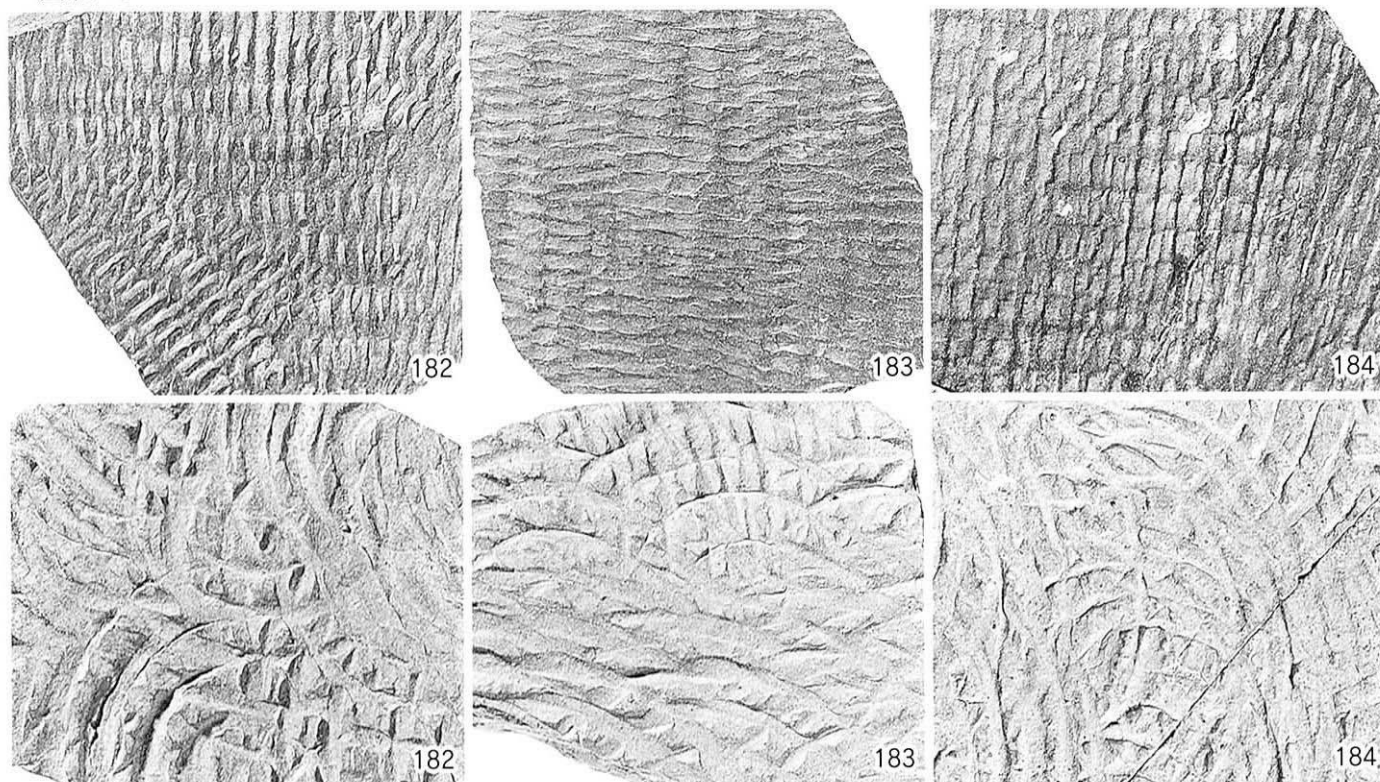


163



6次調査出土甕類タキ・当て具痕①





6次調査出土甕類タタキ・当て具痕③



185



185



186

8次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	うしくびのぞえいせきぐん							
書名	牛頸野添遺跡群Ⅲ							
副書名	上大利南土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第69集							
編著者名	石木 秀啓・井上 愛子・北川 貴洋							
編集機関	大野城市教育委員会							
所在地	㊟816-8510 福岡県大野城市曙町2丁目2番1号 ☎092(501)2211							
発行年月日	2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° , "	東経 ° , "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
のぞえいせき 野添遺跡 第6次調査	福岡県 おおのじょうし 大野城市 かみおおり 上大利			33°30'35"	130°28'40"	2003.5.22) 2003.8.4	6500m ²	
所収遺跡名	種名	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
野添遺跡 第6次調査	窯跡	古墳・奈良		灰原 1ヵ所		須恵器		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 ° , "	東経 ° , "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
のぞえいせき 野添遺跡 第8次調査	福岡県 おおのじょうし 大野城市 かみおおり 上大利			33°30'35"	130°28'45"	2003.9.16) 2003.10.23	8260m ²	
所収遺跡名	種名	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
野添遺跡 第8次調査	散布地	古墳		土坑 1基		須恵器		

大野城市文化財調査報告書 第69集

牛頸野添遺跡群Ⅲ

平成18年3月31日

発 行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印 刷 株式会社 三 光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1